

レジャー・レクリエーション研究

第34号

第26回大会発表論文集

日本レジャー・レクリエーション学会第26回大会

平成8年11月23日(土)・24日(日)

於：奈良女子大学

日本レジャー・レクリエーション学会

1996年11月

1. 印刷・製本

発表論文は、提出された原稿をそのまま縮写し、論文一題につきB5版見開き2ページまたは4ページにオフセット印刷され、「レジャー・レクリエーション研究（大会発表論文集）」として製本される。

2. 原稿用紙

提出原稿は、指定の原稿用紙（A4版）4枚以内に限る。なお、予備を含め合計6枚の原稿用紙が同封されている。

3. 文字

本文文字は、邦文タイプ（4号活字）またはワードプロセッサ（12ポイント・24ドット以上）を用いて、横書き印字したものに限る。

4. 演題・氏名等

①演題は、原稿用紙上部第1行と2行を用い、副題がある場合には行を改めて記載する。

②演題には、本文より大きな活字または倍角文字を用いること。

③氏名は、演者と共同研究者について行を改めて区別し、演者には氏名のすぐ前に○印をつけること。

④所属機関名は、氏名に続いて（ ）付で記入する。また、複数の共同研究者が同一の機関に所属する場合には、まとめて（ ）付で記載すること。

5. 本文

①本文は、目的、方法、結果、考察など、できるだけ分かりやすくまとめ、研究論文として完結していること。

②本文各段は、最初の一字分をあけて書き始めること。

③原稿用紙の字数は、40字×40行の1600字となっている。

④図表などを使用する場合にも、必ず本文枠内に収めること。

6. 送付要領

①同封の厚紙にはさみ、原稿とそのコピー2部を同封のこと。

②同封の提出用封筒を使用し、書留郵便（簡易書留可）で郵送のこと。

③提出要領が守られていない場合には、原稿を受け付けない場合がある。

7. 締切期日

1996年7月31日（水） 当日消印有効

8. 送付先

〒250 神奈川県小田原市荻窪1162-2

関東学院大学法学部（小田原校地）体育館内 気付

日本レジャー・レクリエーション学会 編集委員会

電話・FAX 0465-32-2617

日本レジャー・レクリエーション学会 第26回大会の開催にあたって

会長 前野 淳一郎

美しいおだやかな大和の自然に囲まれ、多くの優れて豊かな文化財を保有する古都・わが国有数の観光都市である奈良のまちに集い、88年有余に及ぶ由緒ある伝統に輝く奈良女子大学のキャンパスをお借りして本学会の第26回大会を開催できますことを、会員の皆様とともに慶びたいと存じます。

本大会の開催につきまして、多大のご配意を賜りました奈良女子大学の当局、また絶大のご支援を頂いた関係各位に対し、ここに深甚の謝意を表する次第です。また遠路ご参集の学会員の皆様にも、敬意とそして歓迎の意を呈したいと思えます。

本誌の記事にご覧のように、この大会には全国の各地から多方面の分野にわたる研究者が集い、興味深い研究成果の発表が行われます。夫々に有意義な討議の交わされることが期待されます。

またこの度の学会大会では、上の研究発表に先き立って、奈良女子大学の小田切毅一教授による「レジャー・レクリエーション研究の変遷」と題する特別講演のほか、「高齢社会におけるレジャー・レクリエーション研究への期待」というテーマによるシンポジウムや、会員相互交流のための懇親会など多彩な行事が準備されております。

小田切教授は、本学会の前身である研究会の時代等を含めて永年にわたりレジャー・レクリエーション研究の先端で活躍してこられた方です。多くの示唆に富むお話を伺うことができるに違いありません。

シンポジウムでは、21世紀を目前に控えて、わが国に到来する高齢社会を見据えた本学会の今後の研究と実践の方向性が、シンポジストの先生方から提示されるでしょう。参加される会員の皆さんによる活発な議論によって、近未来における学会のあり方などが明示されることを願っております。

高齢者、幼少の子供たち、妊婦、心身に何らかの障害をもつ人々、そして在留外国人や観光客などの情報弱者達が、のびのびと楽しむことのできる生活環境／社会の形成を目指すバリアフリー、ノーマライゼーション、そしてユニバーサルデザインの運動は、いまや交通・宿泊・飲食物販・住居・医療・職場・学校そして旅行やレジャー・レクリエーションなどのあらゆる生活／サービス分野で起こりつつあります。こうした中で、本学会の研究者達が果たすべき役割はたいへん大きなものがあると申せましょう。

このあと更に、会員同志による年に一度の交流と親睦を図る楽しい懇親会の企画もあるようです。是非共多くの皆様のご参加を頂いて、相互のコミュニケーションを深められることを願っています。またこの機会に、今後の学会運営などに対する忌憚のないご意見を伺うことができれば、誠にうれしい次第です。

昨年秋に第25回の学会大会を祝った本学会は、心機一転、新たな一步を踏み出そうとしています。会員の皆さんの意向を反映しながら、大きな変革を遂げようとしている社会の付託に応えつつ学会運営を進めて参る所存ですので、ご協力方をお願い申し上げます。

日本レジャー・レクリエーション学会 第26回学会大会開催要領

1. 主催 日本レジャー・レクリエーション学会
2. 主管 日本レジャー・レクリエーション学会第26回学会大会実行委員会
3. 期日 平成8年11月23日(土)・24日(日)
4. 会場 奈良女子大学
〒630 奈良市北魚屋東町
5. 日程

11月23日(土)

11:00～12:00	理事会 文学部会議室
13:00～	受付
14:00～14:40	特別講演 記念館
14:40～14:50	休憩
14:50～17:30	パネルディスカッション 記念館
18:00～20:00	懇親会 大学会館(生協食堂)

11月24日(日)

9:00～	受付
9:30～11:50	研究発表 A会場 N101(1階) B会場 N201(2階)
13:00～14:30	総会 記念館
14:30～16:10	研究発表

日本レジャー・レクリエーション学会 第26回学会大会組織委員会

大会名誉会長	山本 徳郎	(奈良女子大学文学部長)
大会会長	前野淳一郎	(学会会長 (株)スペースコンサルタンツ)
大会副会長	秋吉 嘉範	(学会副会長 福岡教育大学)
	黒田 信寛	(学会副会長 明治大学)
	高橋 和敏	(学会副会長 (株)余暇問題研究所)
	田中 鎮雄	(学会副会長 日本大学)
監事	鈴木 祐一	(学会監事 東京女子体育大学)
	永島 正信	(学会監事 東京農業大学)
大会委員長	鈴木 秀雄	(学会理事長 関東学院大学)
委員	荒井 啓子	(学会常任理事 武蔵野短期大学)
	飯田 稔	(学会常任理事 筑波大学)
	石井 允	(学会常任理事 立教大学)
	坂口 正治	(学会常任理事 東洋大学短期大学)
	嵯峨 寿	(学会常任理事 筑波大学)
	下村 彰男	(学会常任理事 東京大学大学院)
	西田 俊夫	(学会常任理事 淑徳大学)
	西野 仁	(学会常任理事 東海大学)
	松浦三代子	(学会常任理事 東京女子体育大学)
	松田 義幸	(学会常任理事 実践女子大学)
	油井 正昭	(学会常任理事 千葉大学)
	大谷 善博	(学会理事 福岡大学)
	大森 雅子	(学会理事 東京女子体育大学)
	小田切毅一	(学会理事 奈良女子大学)
	杉尾 邦江	(学会理事 (株)プレック研究所)
	鈴木 文明	(学会理事 拓殖大学北海道短期大学)
	中島 豊雄	(学会理事 名古屋大学)
	芳賀 健治	(学会理事 東京家政学院大学)
	原田 宗彦	(学会理事 大阪体育大学)
	松尾 哲矢	(学会理事 福岡大学)
	宮下 桂治	(学会理事 順天堂大学)
	守能 信次	(学会理事 中京大学)
	師岡 文男	(学会理事 上智大学)
	山口 泰雄	(学会理事 神戸大学)

日本レジャー・レクリエーション学会 第26回大会実行委員会

大会実行委員長	小田切毅一	(学会理事)	奈良女子大学)
副委員長	石井 允	(学会常任理事)	立教大学)
監事	鈴木 祐一	(学会監事)	東京女子体育大学)
〃	永島 正信	(学会監事)	東京農業大学)
事務局長	坂口 正治	(学会常任理事)	東洋大学短期大学)
事務局次長 (会計担当)	西田 俊夫	(学会常任理事)	淑徳大学)

実 行 委 員

総務	嵯峨 寿	(学会常任理事)	筑波大学)
研究企画	松田 義幸	(学会常任理事)	実践女子大学)
〃	飯田 稔	(学会常任理事)	筑波大学)
〃	山口 泰雄	(学会理事)	神戸大学)
編集	松浦三代子	(学会常任理事)	東京女子体育大学)
〃	下村 彰男	(学会常任理事)	東京大学大学院)
広報渉外	油井 正昭	(学会常任理事)	千葉大学)
〃	原田 宗彦	(学会理事)	大阪体育大学)
財務	西野 仁	(学会常任理事)	東海大学)
〃	荒井 啓子	(学会常任理事)	武蔵野短期大学)
事務局幹事	沼澤 秀雄	(学会幹事長)	立教大学)
〃	菊 幸一	(学会会員)	奈良女子大学)
〃	梅澤 佳子	(学会幹事)	湘南国際女子短期大学)
〃	神谷 明宏	(学会幹事)	関東学院大学大学院)
〃	杉本 文	(学会幹事)	(財)ハイライフ研究所研究員)
〃	田中 伸彦	(学会幹事)	農林水産省森林総合研究所)

参加者へのご案内

1. 受付

11月23日（土）13:00より受付け致します。

下記参加費をお支払ください。

正会員・特別会員	4000円
名誉会員・賛助会員・顧問	無料
その他の一般の方	2000円（1日につき）

2. 大会本部

奈良女子大学

3. 車両の入構について

駐車場は用意してあります。

4. 休憩と食事

休憩室が用意されています。昼食は、お弁当をご利用ください。

5. 会場内禁煙のお願い

発表会場は禁煙です。喫煙所をお願いします。

（発表者へのお願いとお知らせ）

1. 発表受付

各発表会場の入り口で受付を行います。各自の発表時刻の30分前までに受付けをすませ、「次演者席」におつきください。

2. 発表資料

研究発表および実践報告補足資料等については、100部を発表受付け時に提出してください。資料には、必ず演題番号（例・A-01、A-02）、演題、演者氏名を明記してください。

3. スライド

スライド映写を希望される方は、発表受付けにあるホルダーに、各自で順序正しく正像に写るように挿入して、発表受付けにご提出ください。スライドの大きさは35ミリフィルム用の標準マウント（50×50ミリ）に限ります。

4. 発表時間

各発表演題につき、発表15分です。（13分—ベル1回、15分—ベル2回）。
なお、質疑討論は、各発表セッション毎にまとめて行います。

（座長へのお願いとお知らせ）

座長受付けを各発表会場の入口で行います。座長時間の30分前までに必ず受付けを済ませていただき、開始20分前までに「次座長席」にお座りください。

時間を厳守して進行させるようにご協力ください。

質疑討論は、各セッション毎にまとめて該当時間でとり行うようにお願いします。

発表取り消しなどで空き時間ができた場合は、討論や休憩にあてられるなど、自由にご裁量下さい。

（討論者・質問者へのお願い）

挙手のあと、座長の合図を待って、所属、氏名を告げたのち、参加者にわかるように発言してください。

日本レジャー・レクリエーション学会 第26回学会大会大会本部企画

日時：第1日目 11月23日（土） 午後

□大会テーマ

『高齢社会におけるレジャー・レクリエーション研究と教育への期待』

□特別講演 14:00～14:40（40分）

『レジャー・レクリエーションの史的変遷』

小田切毅一 奈良女子大学教授

□パネルディスカッション 14:50～17:30（160分）

『高齢社会におけるレジャー・レクリエーション研究と教育への期待』

問題提起（30分）

石井 允 立教大学教授

パネリスト（各20分）

1. 「セラピューティックレクリエーションに寄せる期待」

大堀 孝雄 東海大学教授

2. 「介護福祉とレジャー・レクリエーション」

鈴木 秀雄 関東学院大学教授

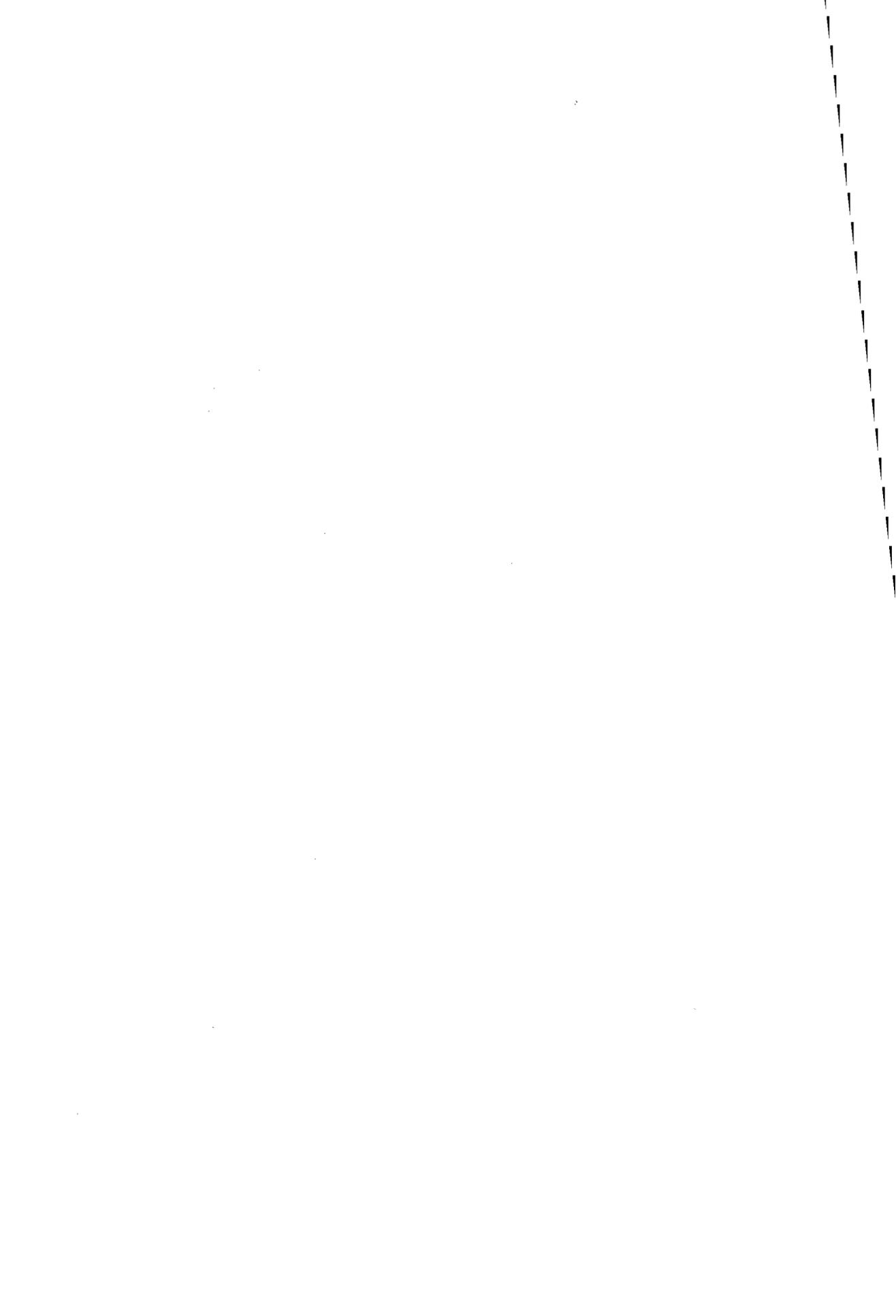
3. 「わが国におけるレジャー・レクリエーション専門家育成の課題」

吉田 圭一 武庫川女子大学教授

司会 下村 彰男 東京大学大学院助教授

特 別 講 演
及 び

パネルディスカッション



日本レジャー・レクリエーション学会第26回学会大会

テーマ「高齢社会におけるレジャー・レクリエーション研究・教育への期待」

1. 趣旨

戦後50年が経過した今日のレジャー・レクリエーションの研究と教育は、当初の目的と今日の社会ニーズの間に少なからずギャップが生じてきているのではないだろうか。我が国の高齢化問題に対する取り組みは、どの分野でも行われているが、高齢社会におけるレジャー・レクリエーション研究と教育のあり方の検討はまだ十分になされていないのではないかとと思われる。

人生80年時代における退職後の人生は時間に換算すると、ほぼ生涯労働時間に匹敵する。こうなると、高齢者の価値観、ライフスタイルは、誰にとっても大きな問題になる。この具体的対策についての「研究と教育」の検討は学会としても緊急な課題だと思われる。

こうした問題意識のもとに、このたびの学会大会では「高齢社会におけるレジャー・レクリエーション研究への期待」というテーマを掲げ、高齢社会をにらんだレジャー・レクリエーションの「研究と教育」のあり方を探るため、以下の講演およびパネルディスカッションを開催する。

2. 構成・展開

まず特別講演として、小田切毅一奈良女子大学教授から「レジャー・レクリエーションの史的変遷」と題し、講演をいただく。パネルディスカッションは「高齢社会におけるレジャー・レクリエーション研究と教育への期待」というテーマで、最初に、石井允立大学教授に問題提起をしていただく。次に、大堀孝雄東海大学教授から「セラピューティックレクリエーションに寄せる期待」と題し、事例を紹介していただき、我が国の諸分野への応用可能性についてお話いただく。

次に、鈴木秀雄関東学院大学教授から「介護福祉とレジャー・レクリエーション」と題し、我が国における介護福祉分野においてレジャー・レクリエーションがどのような貢献をすることができるか、現状を踏まえて展望していただく。最後に、武庫川女子大学吉田圭一教授から、「我が国におけるレジャー・レクリエーション専門家育成の課題」と題し、高齢社会のレジャー・レクリエーション分野の人材育成システムの現状と課題をお話しいただく。

各々のスピーチをいただいた上で、石井教授にもパネリストとして加わっていただき、これからの高齢社会におけるレジャー・レクリエーション「研究と教育」のあり方について全体での議論に入る。

特別講演の進行およびパネルディスカッションの司会は、下村彰男東京大学大学院助教授が担当する。

「レジャー・レクリエーションの史的変遷」

小田切毅一（奈良女子大学教授）

このたびの特別講演で、私に与えられたテーマは「レジャー・レクリエーションの史的変遷」である。レジャーやレクリエーションの歴史は、かの『ホモ・ルーデンス』（J.ホイジンハ）流の言い方を借りるならば、人類の文明の歴史と共に古いと言えるであろう。したがってその史的展開は、本来、古今東西の歴史の広がりの中で語られるべきものと考えられる。しかしながらこの講演では、こうした歴史を、我々の研究対象に直接かかわる、近代の問題にしぼり、とりわけ日本におけるレジャーやレクリエーションの運動史を中心に話題を進めたい。もとより日本レジャー・レクリエーション学会という、本学会の名称の発端となった言葉は「レクリエーション」に他ならないが、この「レクリエーション」という名辞そのものが、まさしく近代社会の所産なのである。よくレクリエーションの語義として述べられる“re-creation”（再創造）という意味は、仕事（本暇）と遊び（余暇）とを対置させ、それらをバランスよくとらんとする近代人の生活観とかかわって、広く社会に受け入れられることになった言葉に他ならない。

レクリエーションという言葉は、歴史の中で長い間、いわば「個人的レベル」の概念を示す言葉として普遍化されてきた。近代英語名辞としてのレクリエーションは、オックスフォード辞典などが示すところによれば、14～15世紀当時には、①「食物摂取による元気回復」や「滋養」の意味から、②「感覚や肉体を刺激する何かによってもたらされる元気回復」や「心の慰安」の意味へと、その意味内容（概念領域）を広げつつあった。そして15世紀以降には、上記二つの意味内容を廃語化させる一方で、③「自らの元気を回復する手段」や「楽しい運動や事柄に従事すること」の意味を成立させることになった。

こうした時代に伴う言葉の意味変容は、この言葉を用いた人々の生活ぶりや彼らがおかれた社会的制約を考えると、興味深い様々な問題を示唆する。最後の③の段階に至って、いわゆる“sports and recreation”といった表記で、青少年などの個人的教養というべき遊びの活動を意味する、今日流の一連の言葉の用いられ方が普遍化されるようになった。

ところでオックスフォード辞典などには記されていないが、我々にとってより重要なこの言葉の意味変容がもう一つあるということを、重要視すべきである。それは、上記の意味の変容や広がり未だに、いわば社会運動というレベルで、社会的概念として用いられるようになったこの言葉の展開である。そしてこうした社会運動を意味するレクリエーションの概念的成立に伴って、研究レベルにおいても、学術的な対象概念としてのレクリエーションが意識されるようになったという歴史的経緯を意識することが重要である。

たとえば子供の遊び場設置の運動から出発して、地域のレクリエーションを発展させ、今日のパブリック・レクリエーションの社会的、行政施策的なシステムを完成させたアメリカのレクリエーション運動は、こうした社会運動のひとつの理想とすべき典型である。いわば歴史の教訓を得ようとする課題意識からみても、こうした問いかけが少なくともわが国のレクリエーション運動の推進や研究に大きな影響を与え、またそれらへの重要な方向性を与えてきたことは、すでに衆知のことである。

レクリエーション運動の運動としての近代史的広がりや、その後世界の先進欧米諸国によって、いわば国家的な施策と結びついた健康づくりや体力づくり運動へと引き継がれて

きている。たとえばドイツにおける戦時中の「歓喜力行運動」や「ワンダーフォーゲル」から、戦後における「ゴールデン・プラン」「第二の道」などが思い出される。

あるいは直接国策と結びつかない運動の展開もなくはない。たとえば青少年の健全な教育という課題と結びついて、民間団体によって現代にまで提唱・展開されてきている種々の活動も、こうした範疇に加えるべきであるように思われる。例えば「ボーイスカウト」や「ガールスカウト」、「YMCA」や「YWCA」などの運動がそれである。言うまでもなく、これら運動の担い手は、時代に応じて変化し、交代し得るのである。

さて、わが国におけるレジャー・レクリエーションは、近代化に伴うわが国の歴史的経緯の中で、どのように運動として変遷してきたのだろうか？ その変化にある種の発展段階が読みとれるとすれば、それは何に基づくのだろうか？ 本講演では、こうした問題意識に応える仮説として、いわゆる「農業型社会」「工業型社会」「情報産業型社会」に基づく三様態に、社会的環境を要素化させることによって、そこに展開した運動と、それに触発されるかたちで動機づけられた研究の関わりに着目しようと思う。レジャーやレクリエーションは言うまでもなく、時代の社会的ありようを反映して生じる物に他ならない。

こうした三つの社会型は、いわゆる「前近代」「近代」「後近代」の区分と基本的に適合するものであるが、こうした段階づけは、近代文明をテーマにした通事的変容を問う場合に、最も基本的な類別法ということが出来る。例えば、農業革命、産業革命、情報革命といった三段階による、G.チャイルドらの文明史的な時代区分も、経済学者C.クラークの有名な産業分類（第一次産業：農・漁業、第二次産業：工業、第三次産業：サービス・流通・教育）も、この他、コミュニケーション史におけるマクルーハン流の、口承段階、活字的段階、触覚的段階（視聴覚的）も、あるいはD.リースマン流の「伝統志向」「内部志向」「他人志向」も、少なからずこうした三段階に対応する視野を持っており、こうした意味で、ある種の普遍的で妥当な尺度とみなすことができるように思われる。

(1)「農業型社会」段階におけるレジャー・レクリエーション

伝統的な在来文化としての遊びの実態と外来文化としての遊びの受け入れ（導入）

(2)「工業型社会」段階へのレジャー・レクリエーションの転換（1938年～1975年）

①運動前史としての厚生運動時代(1938～1946年)

②官制主導によるレクリエーション運動の萌芽期

③職場レクリエーション主導によるレクリエーション運動の発展期

★日本レクリエーション懇談会(1964年3月10日～)

★日本レクリエーション研究会(1965年5月8日発会～)

★日本レクリエーション学会創設期

(3)「情報産業型社会」段階への移行（1970年代後半以降）

①地域レクリエーションへの運動の転換期

②高齢化・小子化に対応する生涯学習時代への運動の移行

★日本レジャー・レクリエーション学会への展開期

それにしても、レジャーやレクリエーション運動と関連研究のありようを辿っていくと、第一に、楽しみ事としてのレジャーやレクリエーションへの文化統制の視野と、第二に、健康維持や体力づくりや長生き推奨にかかわる身体統制の視野を確信させる、ある種の「文化政治学」とでも言うべき論議を意識せざるを得ない。

〔第26回学会大会パネルディスカッション：問題提起及び発題〕

テーマ『高齢社会におけるレジャー・レクリエーション研究と教育への期待』

〔問題提起〕

石井 允（立教大学教授）

はじめに

昨年9月に厚生省が公表した資料によれば、1963年に僅か153人であった百歳を越える高齢者の数は、30余年後には、約40倍を越す6378人となった。また、65歳以上の人口比率は1970年に「高齢化の始まり」とされる7%となり、1994年に「高齢社会」と呼ばれる14%の比率となった。この現象は21世紀に入ると高齢大国といわれる欧州各国を抜き去り、2025年には「4人に1人が高齢者」となることが予測されている。このように日本の人口構成は高齢社会を示し、いわゆる高齢化社会から高齢社会へ急激に進んできている速さも水準も他の国に類を見ない。このように急激な量的変化のもとで、多方面にわたる対応の遅れから様々な質的な歪みを生じてきている。当然、高齢社会に対するレジャー・レクリエーションに関する諸問題も顕在化しており、こうした問題意識のもとに今回の日本レジャー・レクリエーション学会では、パネルディスカッションのテーマとして「高齢社会におけるレジャー・レクリエーション研究・教育への期待」を選択したといえる。

高齢社会でのレジャー・レクリエーションに寄せる期待としては、レジャー・レクリエーションを、(1)社会への身体的、精神的復帰の治療的手段として、(2)生活を楽しむための手段として位置づけることも可能であるが、ますます高年齢化する社会に対して、レジャー・レクリエーション研究と教育の実践はどうあるべきか、その方向性を探り、また会員の皆さんが具体的な研究・教育を進めていくうえでの議論の活性化を求める視点からも、いくつかの中心的な問題提起をし、周辺に存在している課題の提供もしたい。

《問題提起 (1)》

－レジャー・レクリエーション活動と健康問題－

★健康は万人の願いであるが、特に高齢社会において健康（精神的、身体的、そして社会的諸相）の問題は大きな課題となろう。レジャー・レクリエーションがこの問題に対してどのように効果的な役割を果たすことができるだろうか

《問題提起 (2)》

－介護の問題と経済的問題－

★介護とそれに伴う経済的な負担は切実な問題である。この問題の中にはどのような内容が含まれ、レジャー・レクリエーションとの関係からは、どのような支援ができるのかを明確にしていく必要がある

《問題提起 (3)》

－急速に高齢社会に進んだ結果としての“ひずみ”に関わる問題－

★「仕事人間から余暇人間への迷い」や「住宅問題」そして「ライフスタイル」等からくる核家族社会とコミュニケーションの問題

★家族や社会とのコミュニケーション（喜びや楽しみの獲得）をはかるための方法や手段として、レジャー・レクリエーションはどう関わりを持つことができるのか

《問題提起 (4)》

ーレジャー・レクリエーション理論の確立とその正しい普及ー

- ★レジャー・レクリエーションは単に活動や現象として捉えるのではなく、深く人間生活、いわゆる“生きがい”といった本質的な領域との関わりにおいての研究・教育が必要ではないだろうか
- ★レジャー・レクリエーション活動と生きがいとの関係を明らかにすると共に、レジャー・レクリエーション活動を通しての生きがい化の可能性を探究すべきであろう

《問題提起 (5)》

ー急激な長命・高齢社会への対策として、レジャー・レクリエーション研究・教育をどう対応させていくべきかという問題ー

- ★年代層の変化による社会構造に対してレジャー・レクリエーションそのものの捉え方、扱われ方をどうするか
- ★レジャー・レクリエーション教育をどう扱っていくか（高等教育機関、学会、協会）
- ★学会が高等教育機関と密接なネットワークを構築し、情報や人材の確保等の積極的な役割を果たす必要があるのではないか
- ★高等教育機関での教育システム（カリキュラム）の導入と指導者養成の制度化への働きかけを、どう組織的に進めていくべきか、そして学会はどのような役割を果たすべきなのか

まとめ

機能性を重視した現代社会は生活水準を大きく高めたものの、高齢者や障害者に十分配慮した社会を目指していくには、行政や社会保障の諸問題など国レベルで解決しなければならない問題も数多く挙げられる。課題の具体的な解決方法として、地域、職域、学校、家庭などで積極的に人間性回復の立場から考えると、生きがい、家族との関わり、地域での役割、レクリエーション指導者あるいは介護者との関わりといった中でコミュニケーション（人間交流）の問題をとりあげ、個人一人一人が能動的に解決すべき方向性を見いだす努力も大切である。

超高齢化に直面する日本社会において、現状を正しく把握し、将来を展望することの重要性を今ほど問われている時代はないであろう。ここで取り上げた問題提起を含めさらに議論を深めるために、新しい分野からの問題としての「セラピューティックレクリエーション」、そして日本における在宅医療との関係からも重要な問題を含んでいる「介護福祉とレジャー・レクリエーション」、また高等教育機関における教育と研究に加えて問題解決の能力を有した専門家の育成については「わが国におけるレジャー・レクリエーション専門家育成の課題」と題して、それぞれのパネリストからの発題と共に、具体的な問題の提起も期待したい。

レジャー・レクリエーションの本質に関わるところに大きな問題が潜んでいるのだが、本質論を曖昧にしたままで、運動論や活動論、あるいは指導者養成論を現象だけで捉えて問題解決しようとするだけでは、現状の打開は可能であっても豊かな将来を展望することは難しくなってしまう。会員諸氏からの活発な問題意識の提供と、本学会大会での単年度的な研究・教育の課題解決を求めることにとどまることなく、会員による当該課題解決へ向けての継続的な研究が期待されるところである。

「セラピューティックレクリエーションに寄せる期待」

大堀 孝雄（東海大学教授）

I セラピューティックレクリエーションそのものに寄せる期待

就学する子どもの不登校・いじめ・自殺、高校中退生、子どものアレルギー、交通事故の後遺障害と残された遺族、青年層の失業率、過労死・自殺と在職中の成人病による死亡、高齢者の寝たきり・一人暮らし・孤独死、そして、今と老後の生活不安の高まり、等々の現実が出現している。これらの現実セラピューティックレクリエーション領域に対する社会の客観的・潜在的期待であり、セラピューティックレクリエーションの“恩恵”を享受すべき人々である。

II セラピューティックレクリエーションとレクリエーションの関係に寄せる期待

1 セラピューティックレクリエーション領域の実践・普及によるレクリエーション概念の明確化へ

セラピューティックレクリエーションを必要とする対象に指導者として携わった経験をもとに現場での具体的なケースを理論的に突き詰めると、レクリエーション概念の明確化の必要性を痛感する。

セラピューティックレクリエーションは「障害」をもつ人や社会的に「不利」な人たちを対象に、治療的活動（目的-効果）とレクリエーション的活動（目的-効果）の統合化したプログラムを提供するものである。プログラムとその展開において治療的側面とレクリエーション的側面の相関は一連の動的なものであるが、レクリエーションに内在する本質・価値・機能が満足されなければセラピューティックレクリエーションの活動は成立しない。逆に言えば治療的成果が顕著に予測されるとしてもレクリエーションの目的と手段の関係が曖昧になってしまえばセラピューティックレクリエーションとはならない。このような観点に立つと、セラピューティックレクリエーション実践の蓄積はレクリエーションそのものの概念理解の明確化を促進するステップになるのではないだろうか。

レクリエーションの概念・定義等の明確化によってレクリエーションの理論と現実のギャップを縮めることができなければ、その流れとしてセラピューティックレクリエーションとレクリエーションの関係そのものの教育と研究の発展につながるものと考えられる。

2 セラピューティックレクリエーションとレクリエーションの関係での「目的と手段」

セラピューティックレクリエーションプログラムサービスは組織的形態・処方型で展開されるケースが多い。事例 「精神科病棟におけるレクリエーション」指導（資料、当日）の経験段階の総括では、レクリエーション的・目的的な活動段階にはいたらず手段化の段階に留まっている。「ストレス発散になっている」、「運動不足の解消になっている」との評価はレクリエーションの目的に対して手段が目標になっている。また、「ソフトバレーがうまくなっている」からレクリエーションの目的は達成されつつあると考えがちである。ゲームやスポーツの成果と治療（的）成果は同一の目標を追い求めるものではないと考えれば、指導者が技術の上達などを目標とする態度・役割意識は手段が目的化してセラピューティックレクリエーション本来の目的をどこかに置いてしまっていることになる。事例を点検するとセラピューティックレクリエーションの目的達成のために参加主体に一定の制限が加わる（拘束的）範囲での展開になること、治療的目標とレクリエーション的目標のプログラムは一連の相関にありオーバーラップすること、参加主体の要求・態度により行動の積極性→消極性の段階がオーバーラップすることを考慮する指導・支援が必要となる。

3 レクリエーションとは「なにか？」の論議の活発化を

一般の人々に「レクリエーションとはなにか？」、「楽しむことはレクリエーションなんだよ」、と問えば、多く人は「レクリエーションをやっている」、「レクリエーションを楽しんでいる」と答えないであろう。

レクリエーションの教育・学習の場をもつ機会がなかったことでレクリエーション自体の理解・認識を持っていないこと。もう一つは、日々の生活でレクリエーションの言葉を意識する必要に迫られることがないからである。「テレビを見る」、「ジョギングをする」、「音楽を聴く」というように、活動種目を楽しむ遊びだと把握しているのが一般的であろう。

遊びはそのとき・その場で、自らが「楽しい」思いができれば、個人にとってもすべて「よし」というものではない。「行楽地でのゴミ捨て」の例をレクリエーションに置き換えて考えればわかる。また、どのような遊びであれ「金」も必要である。遊びに使う費用の支出を本人の消費支出能力を越えてしまい「サラ金、クレジット地獄」に陥る例のように、本人の自由な生活欲求に根ざし自らの選択による生活行動であることは確かなのだが、その行動・活動の結果としての新たなレクリエーションへの不満と生活への矛盾を生み出すことになる。サラ金地獄に至ったのは本人の能力と責任の問題であるから自業自得であるとする論理には問題はないだろうか。本人がレクリエーションの本質・価値とその行動の発展段階を認識していれば、レクリエーションと生活からの二重の疎外状況にいたらず好ましいレクリエーションを経験する可能性が期待される。種々のレクリエーション行動形態がレクリエーションで「ある」または「ない」ととらえるのみではなく、レクリエーションの認識・経験・教育は個人々のレクリエーションに対する思考と行動の仕方に多様で健全な方向性を確信させる個人的社会的価値を持つとの論点からの議論を深めてレクリエーション概念の「曖昧さ」を克服していくことが社会的にも学問的にも求められているのではないだろうか。

4 セラピューティックレクリエーション領域の研究課題

社会の諸相にみる歪みや様々な軋轢を含めて現実のレジャー・レクリエーション状況の数量的な実態分析をし、解明の方向を探求する研究の重要性は論を持たない。しかし、レクリエーションは自らによって行うものである。自らの思考と行動はいろいろの要素・要因が重なり合ったところから発揮される。セラピューティックレクリエーション実践の指導・支援においても個の実体・事実が見えていないと個人への効果の還元は困難である。実践の場は生身の人間の個の問題であるから「全体」とか「平均」ではこの事実に向ける問題発見と解決の方法・方向も明らかにならない。セラピューティックレクリエーション領域の科学化にとって個別・具体的事実にもとづくテーマと内容に関わる研究の蓄積が重要な課題の一つであると考えられる。

III おわりに

セラピューティックレクリエーションの普及展開を促進させるためには医学、心理学、体育学、社会福祉学等の専門家とのネットワーク、市民とのネットワークによる取り組みが大きな方向である。また、人と予算が必要であるが、セラピューティックレクリエーションを必要とする指導・支援・援助に応じられる人材の育成と身分の確立も社会的な課題である。

東海大学社会体育学科は、1997年度実施のカリキュラムに「社会体育論」、「レジャー・レクリエーション概論」、「余暇社会論」との関連で「セラピューティックレクリエーション」科目を組み込んだ。学生に期待する狙いは4つの柱である。(1) 高齢の人、不健康な人、病弱な人、障害をもつ人、“孤独”な人は自分の身近に、そして日本社会に存在する事実を知り、「誰でもが障害者になりうる時代」、「病気でないことが健康であるとはいえない時代」の状況を把握する。(2) 「ゆとりのある豊か」な人間らしい生活の実現にとってレジャー・レクリエーションの現代的な意義を認識させる。(3) セラピューティックレクリエーションの考え方や方法を理解させスペシャリストとしての力量を高める。(4) 指導者・支援者の一人として、権利としてのレジャー・レクリエーションを自分のテーマとして引き寄せ、人権思潮を大切に基本スタンスをもつリーダーとなる。

「介護福祉とレジャー・レクリエーション」

鈴木 秀雄 (関東学院大学教授)

I. 介護福祉分野への新しいレジャー・レクリエーションの関わり

高齢社会において、特に介護福祉分野に対してレジャー・レクリエーションがどのように貢献できるのかということに俯瞰するとき、現状をふまえて展望するとすれば、研究と教育の現場で、改めて、レジャー・レクリエーションの“本質論”について、議論を交わし、“現実論”との比較の中で、そこに現われるギャップをどう埋めていくべきかという“あるべき論”を掲げて運動（ムーブメント）の展開をしていくことが大切であり、その役割の一端を学会も果たしていく必要がある。幅広い、且つ、奥深いレジャー・レクリエーションの概念理解や行動認識に立たなければ、介護福祉分野におけるレジャー・レクリエーションも今までの狭義化や限定化されたままの領域で捉えられ、何ら新しい21世紀へ向けての将来展望は開けてこない。

介護（Care and/or Cure=介抱と手当て）の中では、看病、世話、療育、指導など、何であれその個人にとっての“快”（こころよさ）がとても大切である（拙著『レクリエーション指導法 その理論と活動 ～レクリエーション的効果と治療的効果の並存を求めて～』[誠信書房刊参照]）。この快さとは、①気持ちが良いこと、②楽しく愉快であること、③病状などがよくなる（快方に向かう）ことであり、通常のレクリエーションは、“活動の快（歓娛=喜びと楽しみ）”が中心であるが、介護福祉としてのレクリエーションは、時には、むしろそばにいてあげることがすでに“生活の快”そのものの提供でもあり、傍らにいてさらにレクリエーション的に歓娛を積極的に産み出していくことも価値ある側面である。

日常生活の中で、「こころよさ」という個人の快追及の状態と、「こころよい」という快活動がいかになされるかが問題であり、自由時間が全て余暇であることを意味してはいない。快状態（Being enjoyable）と快活動（Doing the enjoyable）が必要であり、それらがレクリエーションとしてレジャーの中でなされて初めて、真のレジャーの存在となる。余暇（レジャー）になされ、自由に選択され、楽しみを主たる目的としてなされる活動（Activity）で、歓娛（よろこび楽しむこと）の状態（State of being）をレクリエーションというのであるから、介護福祉分野におけるレクリエーションはその意図により目的達成に向かって手段化され行われるとき、いわゆるセラピューティックレクリエーション（Therapeutic Recreation）の存在（意味合い）となる。しかしこれを決して安易に福祉レクリエーションなどと狭義化し概念化すべきではない。レクリエーションが自身の欲求に応じて目的的に活動（これをカフェテリア型プログラムという）されなければ、当然そのレクリエーションは程度の差こそあれ手段化された活動（これを処方型プログラムという）となり目的を達成するために活用される。

快状態と快活動の追及ができ、豊かなゆとりある生活をしていくうえでは、全ての個人が自身の余暇をどう管理運営するかが重要な課題である。障害や健康問題、社会の“よどみ”から起こる悩みなどを抱えて生活を余儀なくされていればなおさらのこと、豊かさやゆとりを自発的にも他発的にもどう創造していくかが解決すべき必須課題となる。自己の余暇管理や余暇利用については、いかに余暇能力（Leisurability）を高めていくかが求められている。

日常生活の中に存在しているのにもかかわらず、ややもすると気付かずにいる活動や、全く潜在化してしまっている活動を改めて意識化し、それを能動的にレクリエーションに創り変えて“昇華させる”工夫をし、強制や半拘束的な社会機能や生活機能からの離脱を図ることなどにより、余暇化（Leisurelization）を可能にしていくことを積極的にすすめ、日常生活の中で行われる活動を意識的にレクリエーション化し楽しさや豊かさそしてゆとりを加えるにはどうしたらよいのだろうかと考えることが大切である。（今学会大会号第34号発表演題A-01「21世紀を展望したレジャー・レクリエーション運動（ムーブメント）の課題と視点」参照）

II. 高齢社会における介護福祉分野に対するレジャー・レクリエーションの一連のプロセス
この一連のプロセスとは、高齢社会における介護福祉分野においてレジャー・レクリエーションが果たすべき役割(1. 何のために、2. 何を活用して、3. 何の充実をはかり、4. 何を追及し、さらに、5. 何を展望し何を視野にいれておくべきか)を意味するものである:

1. 何のために?⇒(★目的達成のために)

《目的(1)》 要介護者に対して、介護福祉分野におけるレジャー・レクリエーションは、あらゆる領域や度合いの苦痛をいかに予防し軽減していくか、生命を守り健康な生活ができるようにするためにはどのような努力をしていかなければならないか、そして人間の尊厳(尊重)を確保するための条件整備はどうしなければならないかを中心的な視点としていくことになる。

《目的(2)》 次なる介護福祉の立場からのレジャー・レクリエーションの目的は、レジャー・レクリエーション的効果の視点としては、QOL (Enhancing the Quality of Life) = “生活の質的向上”であり、治療的效果の主たる視点としては、医学的效果を向上させつつ、ADL (Activities of Daily Living) = “日常生活動作の充実・拡大”を目指すもので、且つ、第三番目の要因として、EPL (Enjoying Personal Living) = “自身の生活に対する喜び・楽しみ”を支援する効果、のそれぞれの領域を求めているといっても過言ではない。

2. 何を活用して?⇒(★プログラムサービスを利用して)

本来のレクリエーションといわれる①目的的活動(カフェテリア型プログラム)と作業的レクリエーションともいえる②手段的活動(処方型プログラム)との一連の段階的広がりの中にある多彩なプログラムの工夫によって、レクリエーション的に独立できる領域に近い形態の①と②の接点を持つものや①と②の2つが重なり合っているプログラムの創造が求められる。

3. 何の充実をはかるのか? . . .⇒(★生きる力の補完としての余暇化を充実する)

①レクリエーションをどう支援するか、レクリエーションでどう支援するかというレクリエーション支援(RecAid=レクエイド)、また②レクリエーションをどう世話するか、レクリエーションでどう世話するか、というレクリエーションでの世話(RecCare=レクケア)を通して必要な諸欲求を達成できるための余暇能力(Leisurability)の向上により、周囲に浮遊している意識化されていない活動や状態の余暇化(Leisurelization)の充実をはかっていく。

4. 何を追及するかの?⇒(★単なる長命でなく真の長寿としての生活の快を求める)

高齢社会における人生を、生き活きと豊かでゆとりのある生活をしていくためには確実に必要となる快状態(Being enjoyable)と快活動(Doing the enjoyable)を求めていくことである。その活動(行為)が目的達成のために、たとえ手段化されていても、その中でどう快の追及を進め、どう快状態と快活動を生活の快として獲得していくかが重要である。

5. 何を展望し視野にいれておくべきか?⇒(★生きがい化などの実現)

退職後の生活にあっても、仕事の趣味化、趣味の仕事化をはかることができるように、生きがいなどの創造を趣味と実益の両面を持つ訓練(Avocational Training)の活用により、若い世代から余暇教育としての生涯学習(Life Integrated Learning)を進めていくことが大切である。

「介護の社会化を進める一万人市民の会」の創設集会在9月4日東京で開催され、公的介護保険の実現を訴えた。代表の一人に選ばれた評論家の樋口恵子氏は夫の介護体験を基に、家族が直接介護するうえでは四つの条件があり、その一つが欠けてしまっても要介護者への憎しみを感じることにになりかねないと述べている。氏が言うそれら四つの条件とは、①まず本人にがんの末期のような苦痛がないこと、②ある種の経済力が本人と家族にあること、③家族に重労働としての介護負担がかかっていないこと、④介護者が健康で仕事を続けられること、であった。これは実質的介護の事柄を表現しているものであるが、この事実を広がりを持たせ、高齢社会における介護福祉分野で介護者と要介護者の双方にゆとりと豊かさを少しでも提供し獲得できることを願うときレジャー・レクリエーションの存在が一層クローズアップされてくる。

「わが国におけるレジャー・レクリエーション専門家育成の課題」

吉田 圭一（武庫川女子大学教授）

I 専門家育成の現状

レジャー・レクリエーションの専門家として最初に考えられるのは「研究者」である。研究領域として“歴史と原論”、“意識と行動”、“活動とプログラム”、“サービスと運営管理”、“資源と空間”、“政策と運動”など、昭和62年に本学会によって刊行された「レクリエーション学の方法」が示している領域をあげることができる。このような研究者の育成は、現在もごく限られたいくつかの大学や大学院で行われているに過ぎず、組織的な取り組みがなされているとはいえない。

次に、専門家として考えられるのが「活動の指導者」である。これについては、わが国のナショナルセンター的役割をはたしている財団法人日本レクリエーション協会が組織的な人材育成を展開している。統一されたカリキュラムに基づいて「日本協会が直接養成する」「都道府県協会が養成する」「日本協会が認定した大学・短大・専門学校が養成する」という三つの方法をとっている。その種別は、レクリエーション・インストラクター、レクリエーション・コーディネーター、福祉レクリエーション・ワーカー、グループレクリエーション・ワーカー、余暇生活相談員、余暇生活開発士の6種である。6種全体の登録者数は平成8年7月現在で約60,000名である。また日本キャンプ協会や各種スポーツ団体、さらに社会体育・社会教育などの関連団体も組織的な人材育成を実施している。

専門家として三つ目に考えられるのが「条件整備の担当者」である。レジャー・レクリエーションに関するさまざまな条件整備は、レジャー・レクリエーションの発展に欠かすことのできない要素である。この領域は特に行政や産業との関わりが深いと思われるが、日本レクリエーション協会の余暇生活開発士の養成や、いくつかの大学等が行っているリゾート産業関連の人材育成以外に、このような視点から条件整備の専門家が育成されている情報はほとんど聞かない。

このようにみえてくると、専門家のうち「活動の指導者」の育成は、かなり組織的に行われていることが分かるが、それ以外の専門家育成は、ほとんど手がつけられていないことが理解できる。

II 専門家育成の課題

1、レジャー・レクリエーション観の確立

現在のわが国には、せっかく育成されたレジャー・レクリエーションの専門家が正当に評価されない現実がある。つまり、この分野における専門家の必要性が一般に理解されていないのである。専門家育成も近視眼的な方法論だけではなく、なぜ専門家が必要なのかという根本的な問題に眼を向けた取り組みが最も大きな課題であると思う。

(1) 原理的研究

レジャーやレクリエーションの理解が混乱している現実をふまえ、歴史的・原理的立場から、真に価値のあるレジャー・レクリエーション観の確立が急務である。これまでも数々の関連する研究が存在するが、せっかくの貴重な研究が、重要な課題として十分に認

識されてこなかったようにも思う。具体的な事柄に関する研究も貴重ではあるが、それ以上に原理的な研究が活発化することが期待される。

(2) 啓蒙活動

「人間教育」「生き方の教育」などの観点から、レジャーやレクリエーションの意味や必要性、さらにその方法などの啓蒙を「教育」としてとらえる必要があると思う。具体的には、義務教育の後半や高等学校教育の段階で、レジャー・レクリエーションの意味と必要性やその方法について学習できる機会をシステムとして位置づけることが望まれる。

2. レジャー活動・レクリエーション活動の範囲の明確化

レジャー活動やレクリエーション活動の範囲が明確にされないかぎり、それに関する専門家の概念もまた不明確なままである。それらの活動が何を意味し、どのような範囲をいうのが明確になれば、専門家としての資質やその育成方法についても、より具体的な方向性を見いだすことができる。

(1) レジャー活動の範囲

J・デュマズデイエのいう休息・気晴らし・自己開発のために行われるものは、すべてレジャー活動であろう。それは反社会的なものでないがぎり、期間（時間の長さ・時間のまとまり具合）や内容に左右されるものではない。これらの点について、一般に共通の理解がなされているとは思えない。レジャー活動という言葉の使用やレジャー活動というイメージが、もっと正当になされる努力や工夫が求められる。

(2) レクリエーション活動の範囲

レクリエーション（人間性の回復・元気の回復）のために行われる活動は、すべてレクリエーション活動といえる。その範囲は身体活動的（動的）なものにとどまらず、当然、精神的（静的）なものまで含んだ膨大な範囲としてとらえることができる。レクリエーション活動には、身体活動的あるいは集団的なイメージが強くあり、そのイメージがレクリエーションやレクリエーション活動の正当な理解を阻害していると考えられることができる。

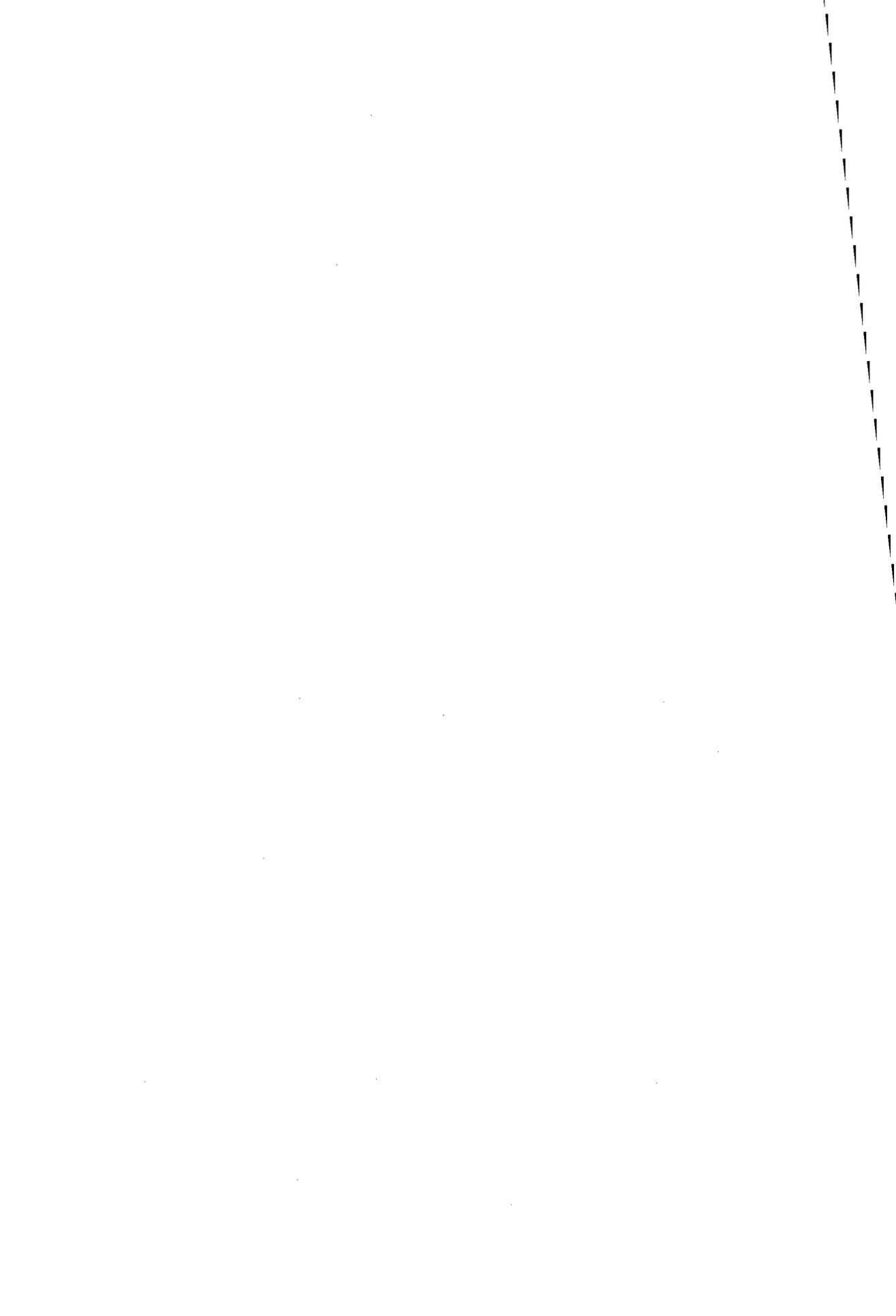
近年、福祉や治療の領域でレクリエーションやレクリエーション活動が積極的に取り上げられるようになったが、この領域におけるめざましい発展は、範囲を広くとらえることの必然性をもたらしたとも考えられる。身体的や精神的あるいは社会的に障害や不適応をもつ人々を対象としたとき、可能なかぎりその範囲を広くとらえる視点が求められたのであろう。そのことが今、一般的な領域に大きな示唆を与えているといえる。

3. 高等教育機関の理解の推進

新しい価値観の登場や価値観が確立される場合、多くは大学等の高等教育機関の取り組みによってリードされるのが通例である。レジャーやレクリエーションが大学等でどの程度の認識がなされ、具体的にどのような扱いがなされているのかが重要な問題である。人材の育成についても、大学等が社会をリードすることによって、その重要性や社会的立場を確立することができると思う。

すでに、体育・スポーツ系以外のいくつかの大学（学部）でも、関係者の理解と努力によってレジャーやレクリエーションに関する科目が正式な科目として位置づけられているが、その数はごくわずかであり専門家育成の新しい力になるまでには至っていない。

高等教育機関がレジャーやレクリエーションに今以上の関心を示し、専門家育成にも真剣な眼を向けることが必要であり、そのための働きかけも我々の課題の一つである。



日本レジャー・レクリエーション学会

第 26 回学会大会発表演題

日本レジャー・レクリエーション学会 第26回学会大会発表演題

■研究発表《A会場》N-101（1階）

□ 座長： 石井 允 9:30～10:30

A-01 「21世紀を展望したレジャー・レクリエーション“^{ムーブメント}運動”の課題と視点
～余暇能力（Leisurability）の開発と余暇化（Leisurelization）の実現を中心に～」

○鈴木 秀雄（関東学院大学）

A-02 「ヨハン・ホイジンガの近代文明批評のルーツに関する一考察」

○杉浦 恭（愛知教育大学）

A-03 「日本人のレジャーの捉え方に関する研究の試み

その1、研究の背景と目的、方法について」

○西野 仁（東海大学）

知念 嘉史（東海大学）

吉川麻里子（スコーレクラブ）

質疑応答

□ 座長： 西田 俊夫 10:30～11:30

A-04 「日本人のレジャーの捉え方に関する研究の試み

その2、中年夫婦、若年サラリーマン、大学生を対象として」

○知念 嘉史（東海大学）

西野 仁（東海大学）

吉川麻里子（スコーレクラブ）

A-05 「日本人のレジャーの捉え方に関する研究の試み

その3、大学体育学部生を対象として」

○吉川麻里子（スコーレクラブ）

西野 仁（東海大学）

知念 嘉史（東海大学）

A-06 「女子大学生の日常生活場面におけるレジャー経験の検討

～経験抽出法（ESM）を用いて～

○佐橋 由美（樟蔭女子短期大学）

□ 座長： 下村 彰男 11:30～11:50

A-07 「高校生の余暇活動に関する実態調査」

○寺嶋 文代（東京都立北多摩高等学校）

松浦三代子（東京女子体育大学）

質疑応答

□ 座長： 西野 仁 14:30～15:30

A-08 「社交ダンス実施者の意識に関する研究」

○竹内 正雄（星薬科大学）

A-09 「学外コース（乗馬）の生涯スポーツ化に関する授業の取り組みについて」

○上野 直紀（いわき明星大学）

鈴木 秀雄（関東学院大学）

五十嵐幸一（いわき明星大学）

A-10 「高齢化・福祉社会の新しい生涯スポーツ：バーンゴルフ（BAHN GOLF）

～バーンゴルフの楽しみ方（その2）～

○西田 俊夫（淑徳大学）

質疑応答

□ 座長： 杉本 文 15:30～16:10

A-11 「首都圏大学生の歩行歩数量

～ペドメーターの測定による分析～

○沼澤 秀雄（立教大学）

石井 允（立教大学）

鈴木 秀雄（関東学院大学）

片桐 義晴（早稲田大学大学院）

A-12 「スポーツ系専門学生における人生観・価値観について」

○廣田 治久（余暇問題研究所）

下田 由香（スポーツ・エデュケーション・アカデミー）

質疑応答

■研究発表《B会場》N-201（2階）（★印は実践発表）

□ 座長： 松浦三代子 9:30～10:30

B-01 「冬季キャンプ経験が参加学生の感性に及ぼす効果」

○針ヶ谷雅子（明治薬科大学）

B-02 「ネイチャースキー教室の参加者について

～野外活動経験と参加動機を中心に～

○野口 和行（慶應義塾大学）

桃井 泰彦（ネイチャースキー研究会）

B-03 「高齢者の余暇活動に関する一考察

～いなみ野学園アンケート調査をもとに～

○片岡 麻里（神戸YMCA学院専門学校ウエルネス研究所）

小泉勇治郎（神戸YMCA学院専門学校ウエルネス研究所）

山下陽一郎（神戸YMCA学院専門学校ウエルネス研究所）

質疑応答

□ 座長： 沼澤 秀雄 10:30～11:30

B-04 「WLRAとその世界会議の動向について」（★）

○山崎 律子（余暇問題研究所）

川向 妙子（東海大学）

高橋 伸（国際基督教大学）

栗原 邦秋（余暇問題研究所）

B-05 「“楽しさ”を中心とした大学体育授業の試みに関する基礎調査」（★）

○高橋 伸（国際基督教大学）

B-06 「フライングディスク競技アルティメットプレーヤーに必要な資質

～とくにハンドラーについて～」（★）

○手塚 麻美（中部大学女子短期大学）

質疑応答

□ 座長： 田中 伸彦 14:30～15:30

B-07 「こどもの遊びに関する一考察

～阪神大震災を通してみるこどものレクリエーション活動～

○小泉勇治郎（神戸YMCA学院専門学校ウエルネス研究所）

山下陽一郎（神戸YMCA学院専門学校ウエルネス研究所）

片岡 麻里（神戸YMCA学院専門学校ウエルネス研究所）

B-08 「震災ボランティアの社会学的研究（1）

～性別による分析～

○高見 彰（関西女学院短期大学）

山口 泰雄（神戸大学）

土肥 隆（神戸商科大学）

世戸 俊男（神戸YMCA）

B-09 「震災ボランティアの社会学的研究（2）

～参加者タイプによる分析～

○世戸 俊男（神戸YMCA）

山口 泰雄（神戸大学）

土肥 隆（神戸商科大学）

高見 彰（関西女学院短期大学）

質疑応答

□ 座長： 坂口 正治 15:30～16:10

B-10 「キャンプ・アーメックが東京YMCA長期キャンプに及ぼした影響」

○谷戸 一雅（余暇問題研究所）

高橋 和敏（余暇問題研究所）

B-11 「現代女子学生の健康意識について」

○生方 盈代（国立音楽大学）

音海 哲子（相模女子大学）

藤井 陽江（立教大学）

質疑応答

ムーブメント 21世紀を展望したレジャー・レクリエーション“運動”の課題と視点

～余暇能力 (Leisurability) の開発と余暇化 (Leisurelization) の実現を中心に～

○ 鈴木 秀 雄 (関東学院大学)

キーワード：レジャー・レクリエーション運動 (ムーブメント)、三次元論的活動分析器 (水槽) 論と料理 (金魚) 論、レジャー機能の振り子論、余暇の源流と現流、余暇能力 (Leisurability)、余暇化 (Leisurelization)、サマータイム (夏時間) 本質論と現実論とあるべき論、セラピューティックレクリエーション、アカウントビリティ (Accountability=責任) とアクレディテーション (Accreditation=信頼)、浮遊している潜在的余暇、カフェテリア型と処方型のプログラム形態

I. はじめに

自由裁量時間が増大する余暇社会にあって、豊かなゆとりある生活をしていくうえで個人が自身の余暇をどうマネージするかは、重要な課題である。お金さえあれば、仕事をしてさえいれば豊かになれるという時代ではない。自己の余暇管理や余暇利用については、いかに余暇能力 (Leisurability) を高めていくかが現代社会 (特に日本の社会) の中で求められている。

日常生活の中に存在しているのに気付かずにいる活動や、潜在化してしまっている活動を意識化し、それをレクリエーションに創り変えて“昇華させる”工夫をしていくことである。例えば、家族での「夕食の一時」、これを意識的にレクリエーション化し楽しさや豊かさそしてゆとりを加えるにはどうしたらよいのだろうかと考えたりすることである。これは生活機能からの離脱を図ることになり、余暇化 (Leisurelization) を可能にする。歓娛の状況を創り出す原点が生まれてくる。快追及のための努力をしなければ、日常生活の中で楽しさや喜びは生まれてこない。この意識化こそレクリエーションの自然発生的な誕生を可能にする。

レクリエーションに関するかぎり、活動の分析とは、その活動の価値や意義を評価するためのものではなく、自身にとってよりよいレクリエーションはどうあるべきかを知るためのもので、余暇能力 (Leisurability) を高めていくために理解しておくべきである。活動の分析としては、レクリエーション活動の三次元論的分析法 (資料③参照) でその時どきの活動を分析することができる。その三次元論的分析法を説明すれば次のとおりである：水槽 (レジャー) の中に棲む金魚 (レクリエーション) にあてはめることができる。ある活動を分析するとき、それが技術的にはどのようなものであるかを縦軸として、[レクリエーション技術 (Recreation technique) 系] にとり、楽しさやおもしろさの度合いを横軸 [レクリエーション状態 (Being recreation) 系] にとり、また高さ軸には人間活動領域 (Humanistics activity domain) 系を組み合わせれば、それら三つの軸の交わる点に金魚は位置していることになる。その金魚の位置こそが分析できるレクリエーション活動の内容ということになる。高さ軸である人間活動領域 (Humanistics activity domain) 系は三本柱からなり①あたま (Cognitive domain) である知的活動領域②こころ (Affective domain) である情緒的活動領域③からだ (Psychomotor domain) である神経・筋的いわゆる身体的活動領域である。これらの組み合わせや強調されている領域により活動内容に変化がある。縦軸の技術系を達成度、横軸の楽しさ喜びの状態系を歓娛度、高さ軸を、あたま、こころ、からだの柱がときに応じてそれぞれ④最大関与⑤中間的関与⑥副次的関与を示す領域関与度とすれば、三次元の達成度、歓娛度、領域関与度の総合判断として、レクリエーションの満足度を尺度化して測定することも可能となる。レジャー・レクリエーションがファジー (曖昧) に捉えられるものであるからこそ、明確にする意識化が大切であり、明確化の過程を経ることにより余暇能力 (Leisurability) を高めていくことができる。

II. 研究の目的

本研究は、地域協会、団体、機関において、本研究者自身が発題（講演、論文、基調講演、研修会で提言）した諸資料の分析をすすめ、レジャー・レクリエーション運動の課題を抽出したうえで、21世紀を展望した余暇能力（Leisurability）の開発と余暇化（Leisurelization）の実現を今後どうすべきかという指針の提供を計ろうとするものである。

III. 研究（資料）の方法（内容）と期間

1993年～1996年の期間に本研究者が自ら発表または講演した内容の分析によるもので、中心とした分析資料は次に掲げる①～⑧群の総体である：

- ①（社）横浜市レクリエーション協会発刊ニュース『レクリエーション横浜』第14号（1994年11月15日発行）「今レクリエーション指導者に求められているものは何か」、第15号（1995年4月1日発行）「現代レクリエーション実践”再考」、第16号（1995年9月1日発行）「レジャーとレクリエーションの関係を知る」、第17号（1996年3月31日発行）「レジャーとレクリエーションの関係を知る（その2）」
- ②平成7年度（社）横浜市レクリエーション協会主催事業研修会講演（1996年3月1日）「レクリエーション再考～そのファジー（曖昧）なるものへの挑戦～」
- ③『レクリエーション指導法 その理論と活動 ～レクリエーション的効果と治療的効果の並存を求めて～』（鈴木秀雄著、1996年3月20日誠信書房刊）
- ④神奈川県福祉部主催、障害者スポーツフォーラム基調講演（1996年3月24日）「セラピューティックレクリエーションの視点からみた障害者スポーツの課題とその将来」
- ⑤平成8年度（社）横浜市レクリエーション指導者養成講座（1996年5月24日）「レクリエーションとは何か」「現代社会におけるレクリエーションの課題」
- ⑥神奈川県福祉部プロジェクトレポート（1996年5月12日）「身体障害者スポーツに対する今後の取り組みの視点」「アカウントビリティ（Accountability=責任）とアクレディテーション（Accreditation=信頼）」
- ⑦第9期（平成8・9年度）専門委員・事業運営委員の委嘱並びに活動等の説明会、基調講演（1996年6月29日）「21世紀を展望した（社）横浜市レクリエーション協会の役割」
- ⑧横浜市野外活動指導者養成講座講義シリーズ（1993年～1996年）「余暇社会論」

IV. 考察及びまとめ

レクリエーション再考～そのファジー（曖昧）なるものへの挑戦～の中でも述べているように、レクリエーションとは、「単なる遊び（Mere play）から創造的活動（Creative activity）までを含む一連の広がり（spectrum & span）の中にあって①余暇（レジャー）になされ、②自由に選択され、③楽しみを主たる目的としてなされる活動（Activity）であり、歓娛（よるこび楽しむこと）の状態（State of being）をいう。」レジャーの中に明確にレクリエーションが存在していることがわかる。どのような状態であっても金魚（レクリエーション）は水槽（レジャー）の中に留まっている。水槽の外では金魚は棲息できない。レクリエーションのファジー（曖昧）なるもの（以下1～15）を明らかにすることにより、解決しなければならない課題が見えてくる：

- [課題 1]・・・外延と内包の曖昧さ（器と料理；水槽と金魚の関係）
- [課題 2]・・・概念の曖昧さ（単なる遊びから創造的活動までの一連の広がり）
- [課題 3]・・・条件の曖昧さ（余暇、自由で選択、楽しみが主たる目的）
- [課題 4]・・・段階の曖昧さ（くつろぎ、気晴らし、発達の、創造的、感覚超越的）
- [課題 5]・・・活動形態と活動内容の曖昧さ（表と裏、自然発生的と意図的・計画的）
- [課題 6]・・・個の技術と場の状態の曖昧さ（指導者の技術と参加者の雰囲気）

- [課題 7]・・・人が楽しむ時と人が楽しむ状態の曖昧さ(趣味の仕事化と仕事の趣味化)
- [課題 8]・・・楽趣時と楽趣動の曖昧さ(Being recreation と Doing recreation)
- [課題 9]・・・日常生活の中にある認識・意識の曖昧さ(概念化の甘さ、認識の甘さ、行動への影響)(イメージと現実の曖昧さ、金太郎飴的発想や部分抽出からの全体像の早合点的誤り、レクリエーション概念の一部限定的理解)
- [課題 10]・・・指導の曖昧さ(目的的和手段的,Being & Doing recreationとTherapeutic Recreation)、指導の中に隠されている目的と手段になっている活動
- [課題 11]・・・個人の快追及の曖昧さ(消費的形態と生産的形態)スコール(建設的活動)とメアプレイ(mere play=単なる遊び)の存在の理解の曖昧さ
- [課題 12]・・・レジャーとレクリエーションの関係の曖昧さ(ツーリズム的余暇案内、部分的楽しみ)(レジャー=出かけることの活動と、レクリエーション=交流活動形態(個人、並行、集団)の中の集団指導的内容の意味合い)
- [課題 13]・・・社会機能からの離脱、生活機能からの離脱、楽しみの機能獲得の曖昧さ(レジャーの三機能、休息休養、娯楽気晴らし、自己啓発自己実現)
- [課題 14]・・・理解できていない活動の三次元論的活動分析の曖昧さ
- [課題 15]・・・レクリエーション再考～そのファジー(曖昧)なるものへの挑戦～に対する啓発の曖昧さ

また余暇の源流(Leisure Class)と現流(Mass Leisure)の比較(図1、図2)や、余暇機能の捉え方(振り子の振幅の大きさとその要の位置(図3))から余暇能力(Leisurability)の開発と余暇化(Leisurelization)の実現をムーブメントとして展望([A]～[C])することができる:

[A]余暇の源流(Leisure Class)と余暇の現流(Mass Leisure)の比較からみたムーブメント展望

1) 源流(図1)

余暇に限られた者だけ(a)に存在(レジャー)し、
資質向上(c)を主とした活動(スコール)としての
レジャー

古典的レジャー

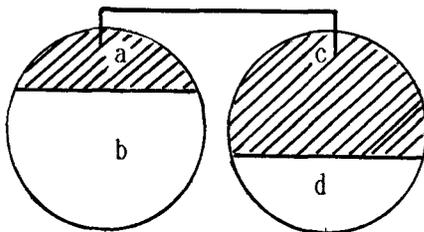


図1
(源流)

2) 現流(図2)

労働などを有する者(b)にも余暇が与えられ
大衆化の結果として単なる遊び(d=Mere Play)
が中心となったレジャー

現代的レジャー

(スコールの逆転現象)

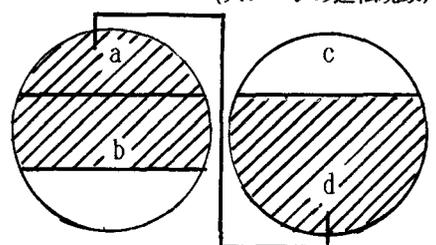


図2
(現流)

★ムーブメントの視点は、現状分析の上に立って余暇の認識と意識の向上をはかりつつ、その視点からプログラムを提供し、その結果として余暇そのものの存在価値や意義を高めていくこと。個人にとっての興味や関心から楽しむことを主たる“目的”として自由に選択され実施されるカフeteria型プログラムと役立つことを前提に“手段化”されて実施される処方型プログラムとのバランス(ストレスなどの解消や健康維持増進の立場からの実施であれば、この意味からは一面ではセラピューティックレクリエーションの視点である)を考慮することができる余暇意識(Leisure-conscious)や余暇認識(Leisure Awareness)が必要であり、そこに余暇能力(Leisurability)の高揚や開発が説かれる理由のひとつがある。

[B] 余暇の三機能の全般にわたる好ましい余暇活動による余暇能力 (Leisurability) の開発と余暇化 (Leisurelization) の実現からみたムーブメント展望 (図3)

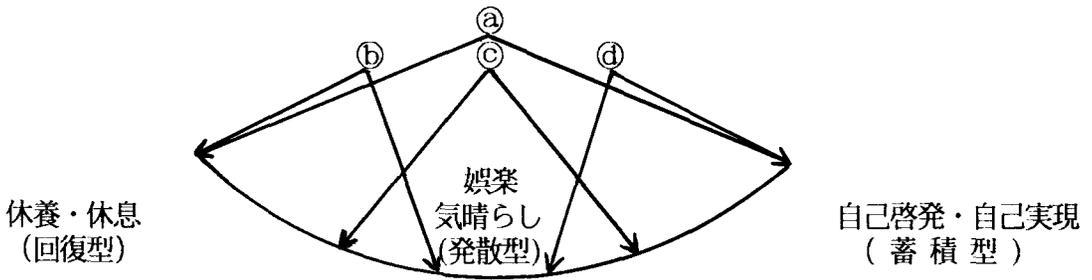


図 3 余暇の捉えられ方により余暇機能と活動領域の要のそれぞれの異なり (a~d).

- ① 本来の余暇の三機能として正しく捉えられるべき振り子の要と振り子の振幅 (理想・目的)
- ② 労働との対比として捉えられる余暇の機能 (産業社会学では余暇は労働力の再生産的考え)
- ③ レジャー産業が捉える場合の余暇の機能 (幅を広げつつも産業として余暇は消費経済的考え)
- ④ レクリエーション指導として捉えられる余暇の機能 (社会教育では余暇は自己実現的考え)

★ムーブメントの視点は、余暇に対する振り子の要を正しい位置①に置き、個人の振り子が幅広い振幅 (活動範囲の広さ) になる余暇支援と援助をすること。回復型、発散型、蓄積型のいずれの形態で余暇活動がなされたとしても、余暇機能の全体の中の重要な部分として捉えられていることが大切である。指導を中心に考え過ぎると、振り子の要が④になってしまう。

[C] 現代社会におけるレクリエーションの現状からみたムーブメント展望

- 1) 時代の先取りとしてのサマータイムなどに向けてのシミュレーション的役割を担う (余暇でもない労働でもない時間帯いわゆる潜在的余暇時間の実質的な余暇化の実現)
- 2) レクリエーションの活動分析《器 (水槽) 論と料理 (金魚) 論また三次元論的分析》による活動内容の把握と理解 (レジャー・レクリエーションの正しい理解に向けての支援)
- 3) 楽しさおもしろさの広がりや深まりのある活動の提供 → 余暇能力 (Leisurability) を向上させていく場づくり (楽しむ姿勢の大切さ、創造的なゆとりある時間利用に向けて)
- 4) 浮遊している潜在的余暇の引き寄せによる余暇の増加を可能にしていく → 余暇化 (Leisurelization) 支援 (浮遊している自身を余暇活動や余暇意識の中に組み込む支援)

★ムーブメントの視点は、個 (市民) の豊かさやゆとりに対する支援と援助をすること。そのためには市民ニーズに対応できる新しい形態の人材育成と確保を重要課題として取りくむこと。既存の団体、機関、また協会の生き残りや運営のための都合のよい運動 (ムーブメント) だけに将来の展望を全て委ねてよいわけでもない。むしろ中立的な立場から日本レジャー・レクリエーション学会としてもプロジェクトを組むなどして、その本質論を限定し、現実論とのギャップを明らかにし、あるべき論を見据えた21世紀に向かってのレジャー・レクリエーションムーブメント (理論展開と活動展開) の担い手としての役割を明確に果たすべきである。研究の範疇に留まっていたよいというものではない。研究を実社会で活かす姿勢こそが大切である。またレジャー・レクリエーションサービスそのものが団体や集団のみを中心的な対象として意図しているのではなく、むしろ個人、家族、小グループを中心とし、その延長線上に多くの人々の集まりが存在 (成立) しているのだと理解しておくべきである。

ヨハン・ホイジンガの近代文明批評のルーツに関する一考察

杉浦 森（愛知教育大学）

1. 発表の趣旨

オランダの歴史家ヨハン・ホイジンガ（Johan Huizinga 1872-1945）は1930年代に入ると近代社会を痛烈に批判するようになった。それはヨーロッパ社会が近代化の波の中で、その影の部分をクリックアップしてきたからである。ホイジンガの批判はナチズムの台頭を契機として、近代文明、さらには近代合理主義一般にまで及ぶ。その鋭い指摘は『朝の影のなかに』を始め、いくつかの著書に見ることができる。

歴史の記述的研究家であったホイジンガが、1930年代に入り、近代文明批評家として変貌を遂げていったのはなぜか。本研究はこの課題を明らかにすることを目的とする。

興味深いことに、ホイジンガは近代文明批評を行う数年前にアメリカを旅行している。その時に書いた日記には実に多くのアメリカに対する印象が記されている。ホイジンガはアメリカの何を見て、そこから何を感じ取ったのだろうか。果たしてホイジンガの近代文明批評と何らかの因果関係があるのか、本論で考察を試みたい。

2. 研究の方法

ホイジンガの近代文明批評のルーツを明らかにするには、まず、ホイジンガの近代文明に対する見解をまとめなければならない。次に、その見解が著された時期以前のホイジンガの言動を調べ、同じような指摘をしている箇所を探す。このプロセスをたどるには、ホイジンガが残した何らかの記述を頼りにするため、著書、日記、メモ書きなどを資料とする文献研究の方法をとる。

3. ホイジンガの近代社会観

ホイジンガはヨーロッパ社会の近代化に対して様々な批判を行っているが、それらは大きく二つにまとめることができる。

19世紀以降、経済的価値・物質的価値の追求が社会を支配するようになり、文化的価値・精神的価値の重要性が軽視されるようになったことに対する批判。

大衆社会の到来によって均質化した受け身の態度をもった人間が増えたことによる文化の画一化についての批判。

4. ホイジンガの近代アメリカ観

ホイジンガは1926年に初めてアメリカを訪れた。二ヶ月ほどの旅行であったが、東海岸から西海岸までアメリカを横断し、見聞したことを日記に書き留めている。

(1) アメリカの新聞について

ホイジンガはアメリカの新聞がおもしろおかしく書かれていることにまず興味を持った。しかし、デトロイトニュース新聞社を訪問したときの印象は、多くの資源、人間の能力が無駄に使われていることであった。創意に満ちた多くの人間が、莫大な原材料、労働力を浪費して、結局、興味本位の質の低い新聞しか出版していないことにホイジンガはショックを受けた。大衆の興味を引いて販売部数を増やせばよいといった利益優先の考え方が、

結果的に量の悪をはびこらせているとの印象をもった。

(2) 映画について

映画は高いレベルの人から低いレベルの人にまで同じ考え、同じ見方を提供する。これは民主主義という名の思考の画一化であると、ホイジンガは批判している。

また、巨額の制作費をかけている割には内容が貧困・単調であり、営利ばかりを追求している。さらに、映画は人々に低俗な思考を機械的にばらまくから、ついにはこの思考を極めて大きな重みをもった文化的規範の地位まで高めてしまうとホイジンガは述べている。

(3) 国民教育について

近代化の重要な要因の一つとして公教育の普及と教育の民主化が挙げられるが、ホイジンガはこのポジティブな側面を評価することよりも、むしろネガティブな面を主張している。一般教育の普及によって平均的な知識の量は各人多くなったが、断片化し、似通った知識をもつに留まる大衆は、深い精神性に根ざした熟慮・判断・創造性といったものを失った。その原因をつくる一例が、人間の神秘性をも消してしまうアメリカの大衆向け博物館教育であるとホイジンガは考えた。大衆一般に文化と接する機会を与えることはよいことであるが、それが浅薄な文化の理解と文化の商品化をつくり出してしまふ危険性をホイジンガは危惧していた。

(4) アメリカの浪費社会について

生活の豊かさをモノに求め、大量生産・大量消費を進めたアメリカは、結果的に多くの無駄をつくり出し、目にあまる資源の無駄遣いと浪費社会をつくった。繁栄の時代、「新時代」と言われた時期にアメリカを旅行したホイジンガには、この国は単なる浪費の社会と映ったのであった。

5. 考察

ホイジンガはアメリカ文化を、量が多いが質の伴わない文化、人々の心を安易に引きつける興味本位の文化、精神性の深さよりも表面的な理解を重視する文化と捉えている。

近代化の特性としての「平等」意識が、アメリカでは「皆と同じでありたい」という消極的な方向に働き、本来「平等性」と混同してはならない「均質化」を招くことになった。周りの人と同じ生活をしたいという人々の願望は、大量生産・大量販売のシステムを強固なものとし、社会生活の均質化を生むと同時に、経済的価値・物質的価値の追求に拍車をかけた。その結果として浪費社会ができたというのがホイジンガの認識であった。

ホイジンガのアメリカに対する以上の認識は、3.で述べたホイジンガの近代社会観とかなりの点で一致していることがわかる。また、ホイジンガの近代文明に関する批判的見解が、彼のアメリカ旅行日記とアメリカに関する評論以前には見られないことを加味し、次の結論を導き出すことが可能であると考えた。

ホイジンガの近代文明批評は、その起源を彼のアメリカ旅行とアメリカ研究に求めることができる。ホイジンガはヨーロッパに先駆けて、当時のアメリカを世界的な近代産業化の流れの中の最たるものとして捉えていた。そして、近代産業社会の波がヨーロッパをも巻き込み、物質主義社会と文化の画一化がヨーロッパ社会でも起こることは免れないことを予期し、アメリカ社会を念頭に置いて近代産業社会のネガティブな側面を、後半生をかけて批判的に記述していったのである。

日本人のレジャーの捉え方に関する研究の試み

その1、研究の背景と目的、方法について

○西野 仁（東海大学）、知念嘉史（東海大学）、吉川麻里子（スコーレクラブ）

I、はじめに

本研究は、日本人のレジャーの捉え方に関する調査研究を試みた3編の関連する研究の第1報であり、一連の研究に共通する背景と目的や方法について概説する。

1988年6月に政府は「労働時間短縮推進計画：活力あるゆとり創造社会の実現をめざして」を発表した。労働時間短縮のねらいは、国民生活にゆとりを生みだし、国民一人一人が、真の豊かさを実感できる活力あるゆとり社会を実現することにある。この基本計画にそって、完全週休二日制の普及促進、年次有給休暇の完全取得の促進、連続休暇の定着などの政策が打ち出され、実行に移されている。このような状況から、わが国は今、まさに「レジャーの新時代」を迎えつつあるととらえることができよう。ところで、「レジャー」ということばを、日本人は主観的にどう捉えているのであろうか。このレジャーの捉え方（コンセプト）に対する疑問が、本研究の基本的問題意識である。

II、レジャーを定義する際の二つの方法

歴史的にレジャーは、まず、「時間や活動」として客観的（objective）に定義され、途中から、「ある（心的）状況下における経験」として主観的（Subjective）な定義が追加された。北米において、1930年代以降、Lynd and Lynd, Szali, Chapin, Robinsonらによって、多くの生活時間調査（time budget survey）が実施されているが、それらは、レジャーを24時間から労働や生活必需時間を減じた残りの時間として捉えたり、スポーツや、テレビを見ること、読書、社交的活動などとして捉え、その実施時間や実施頻度を量的に扱ってきた。わが国においても、「時間と活動」というレジャーのパラダイムにそって調査研究が為されており、NHKの生活時間調査や、余暇開発センターの余暇行動調査は、その代表である。

しかし、テレビを見る行為が常にレジャーであるとは限らないし、逆に食事も生存のため以上のレジャー経験と捉えることができる。こうした「時間や活動」概念としてのレジャーに対して、de Grazia (1962), Iso-Ahola (1980), Neulinger (1981), Kelly (1990)らは主観的な状況によってレジャーを捉えることを主張した。de Grazia (1962)は、「レジャーは、ある活動がそれ自身のためにあるいはその目的のために行われる状況である」と定義し、Iso-Ahola (1980)は、「レジャーは、人の直感であり、活動の量や質からの推論の結果である。それゆえに、レジャーは、人が与えられた時間に参加する、実際のあるいはイメージされた活動を主観的にとらえたものである。」と述べている。Neulinger (1981)は、自由性と内発的動機によってレジャーを他の経験と区別することを提案し、Kelly (1990)は、「レジャーは、他から強要されない、自分で決定した、その経験に焦点をあてた行為である」と述べている。

III、一連の研究の目的と方法

レジャーを、経験している行為者自身の主観として捉えるようとする時、研究の方法論が問題となる。Shaw (1985)は、北米でレジャーがどのように主観的に捉えられているかの研究を改良したタイムバジェット法と、インタビューを併せて行った。しかし、これらの

方法は、経験を記憶に頼って思い出すことになり、その途中で、行為者の価値や態度によって回答が加工されやすい。経験をその時どう感じているかを的確に捉える方法が、容易には実用化されなかったが、CsikszentmihalyiとLarsonらは、Experience Sampling Method (経験標本抽出法)を開発し、経験の主観的意味をめぐる研究を推し進めた。

本研究を含めた一連の3つの研究に共通する目的は、「日本人はどのような経験を主観的にレジャーだと捉えているのかを、ESMを用いてデータ収集を行い分析する方法で明らかにできるかどうか試みることにある。具体的には、次のような過程をたどる。

- ① ESMを実施し日常経験の標本データを集める。
- ② その標本から、行為者が「レジャーだ」と認識する標本データと「レジャーではない」と認識する標本データを抽出する。
- ③ 「レジャーだ」と認識するデータと「レジャーではない」と認識するデータについて、それぞれ「活動の種類」「同伴者」「場所」「気分」と「その場面に対する態度や意識」の回答を集計し比較する。
- ④ 判別分析によって、「レジャー経験」と「レジャーではない経験」が、どの項目によってどの程度判別できるを検討する。

なお、本研究においては、「経験」を「人が直接に体験する事実」ととらえ、操作的にその場面での活動の種類、同伴者、場所、その時の気分、そしてその場面に対する態度や意識の面からそれを把握することとした。

《Experience Sampling Methodの概略》

ESMは、1970年代半ばにシカゴ大学のCsikszentmihalyiとLarsonらによって開発され、1980年代に改良と妥当性や信頼性が検証されはじめ、1990年代になって、日常生活経験調査に北米を中心として頻りに用いられるようになった。ESMは、われわれの刻々変化し続ける「日常生活経験」を母集団と考え、そこから異なった時刻での「経験の標本」をランダムに取りだし分析する方法である。具体的には、調査対象者にあらかじめ、ポケットベルとポケットベルが鳴った時に回答を自己記入する質問票を渡し、常時携帯してもらう。調査者は調査対象者の持つポケットベルを一日ランダムに5～10回程、4日から一週間程度連続して呼び出す。調査対象者は、呼び出されたら、自分で速やかに渡されてあった質問票の質問項目に答える。開発当時は、妥当性や信頼性をめぐる論議が盛んだったが、1980年代に後半には、その妥当性や信頼性に関する論文が発表され、1990年代に入り、ESMを用いた論文が多く発表されるようになった。わが国においては、ESMという語を用いた研究はいくつかある(渡植、山本、1993、日下、太田、西嶋、Danielson, 1994)しかし、CsikszentmihalyiとLarsonらとほぼ同じ方法を用いての研究は一般化しておらず、1993年来、ESMを用いた研究を続けている本研究者のグループの研究(西野、知念、吉川、1994)以外には、少なくともレジャー・レクリエーションの関連分野では研究論文や報告を見つけることはできなかった。

引用文献

- de Grazia, S. Of time work and leisure. New York: The twenty Century Fund. 1962
- Iso-Ahola, S.E. The social psychology of leisure and recreation. Dubuque, IO: Wm. Brown Company 1980
- Kelly, J.R. Leisure (2nd ed.). Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall, 1990

日本人のレジャーの捉え方に関する研究の試み

その2、中年夫婦、若年サラリーマン、大学生を対象として

○知念嘉史（東海大学）、西野 仁（東海大学）、吉川麻里子（スコーレクラブ）

I、はじめに

本研究は、日本人のレジャーの捉え方に関する調査研究を試みた3編の関連する研究の第2報であり、とくに、ESMを使って収集した行為者の主観によるデータを、集計・分析した結果が、矛盾なく解釈できるかどうかを検討することを目的とする。

II、研究の方法

本研究の目的を達成するために、調査に協力することを承諾した54名を対象に、ESM調査を実施し、収集した日常生活経験の中から、「レジャー経験」と「レジャーではない経験」を抽出し、集計分析した。なお、54名の抽出は無作為抽出ではない。理由は、ESMがはたして日本人に一般的に受け入れられるかどうか疑念があったからである。

1) 調査方法

Experience Sampling Method により、時々刻々変化する「日常経験」の流れの中から「経験の標本」をランダムに抽出した。

2) 調査票と調査内容

本調査では、西野が Larson らの開発した Experience Sampling Form を Larson の助言のもとに日本人向けに改良した調査票を用いた。内容は、ポケベルの呼出し受信時の活動の種類、場所、同伴者、気分の他に、その場面に対する態度や意識、つまりその経験は日常的か、それへの取り組みは真剣か、それは自分のためか、それは重要ななどについての質問が含まれている。活動の種類、場所、同伴者については自由記述を、気分とその場面に対する態度や意識については7段階のリッカートタイプの尺度を用いた。

3) 調査の実施

調査時期：1993年10月～12月

調査対象A：中年夫婦（38才～50才）男女22名（男11名、女11名）

B：若年サラリーマン（23才～27才）16名（男9名、女7名）

C：大学生（18才～23才）16名（男9名、女7名）

計：54名（男29名、女25名）

ポケットベルの呼びだし：7：30 am～10：30 pmの間にランダムな時刻に7回4日間（金曜日～月曜日まで）

回答数：総回答数：1910（79、3%）

ポケットベルの呼びだし後2時間以内に回答した数：1766（73、3%）

III、結果

1) レジャー経験と非レジャー経験

行為者がそれぞれの経験をどの程度レジャーとして捉えているかについては、「その活動をどの程度レジャーだと思うか？ それともレジャーとは別のものだと思うか？」という7段階の質問項目によった。「レジャーだと思う」に対して「まさにそのとおり」と「そのとおり」のどちらかに回答した経験をレジャー経験とし、「レジャー経験だとは思わない」に対して「まさにそのとおり」と「そのとおり」のどちらかに回答した経験を非

レジャー経験とした。結果は、レジャー経験が総日常経験の10、0%、非レジャー経験は49、2%だった。

2) レジャー経験と非レジャー経験の内容

(1) 活動の種類：主としてレジャー経験だと認識されている活動は、社交的活動、テレビやラジオの視聴、外出、スポーツ、読書、休息や気晴らしの活動であった。しかし、これらの活動も、非レジャーだと捉えられている場合もあった。主として非レジャー経験として捉えられている活動は仕事、学業、パートタイムジョブ、移動、食事、自分の身の回りの用事などであったが、それらの中には、時として、レジャーとして捉えられている活動があった。

(2) 場所：半数以上のレジャー経験は、レストランやレクリエーション施設や自然の中で行われている。約4%のレジャー経験は、職場でなされていた。

(3) 同伴者：家族、友人、ボーイ/ガールフレンドなどと一緒にいる時は、レジャー経験だという回答が非レジャー経験だという回答を上回った。逆に一人である時は、非レジャー経験がレジャー経験を上回った。

(4) ムード：表1は、レジャー経験と非レジャー経験におけるムードスコアの平均である。全ての項目において、有為な差が認められた。特にレジャー経験でスコアが高かった項目は、自由、安定、リラックス、幸せ、やすらぎであった。

表1 レジャー経験と非レジャー経験におけるのムードの平均と標準偏差

項 目	レジャー		非レジャー		項 目	レジャー		非レジャー	
	7←-----→1	MEAN S.D.	MEAN S.D.	MEAN S.D.		7←-----→1	MEAN S.D.	MEAN S.D.	
安定・いろいろ	5.76	1.23	4.81	1.39	リラックス・・・緊張	5.68	1.74	4.55	1.54
わくわく・退屈	5.13	1.31	4.08	0.90	満足・・・不満足	5.55	1.27	4.33	1.18
幸せ・・・不幸せ	5.65	1.23	4.25	1.06	やすらぎ・・・不安	5.62	1.26	4.28	1.11
嬉しい・・・嫌な	5.47	1.28	4.10	1.05	ひま・・・忙しい	4.43	1.41	3.58	1.37
自由・・・束縛	6.08	1.18	4.40	1.54	爽やか・・・重苦しい	5.08	1.50	4.06	1.16

(5) 経験場面に対する態度や意識について：非日常的で、自己選択した、義務的でない、好きな、重要ではない活動をレジャー経験として捉えている傾向が認められた。

3) レジャー経験と非レジャー経験の判別

SASプログラムを使って、レジャー経験と非レジャー経験の判別を試みた。ムード項目の第一主成分(ムード水準)と、自己選択度(その活動を自分で選んだか、他の人に指示されたのか)、欲求度(その活動をどの程度やりたいのか)、自由度(その活動はやらねばならないのか、やってもやらなくても良い活動か)、自己目的度(その活動は自分のためにやるのか、他人のためなのか)の項目を用いたところレジャー経験については84、18%を、非レジャー経験については、77、30%が正しく判別された。

IV、考察

これらの結果は、われわれの経験則に照らして十分に理解し得るものであり、また、ESMを用いた研究方法がおおむね適していることを示唆していると考えられる。

日本人のレジャーの捉え方に関する研究の試み

その3、大学体育学部生を対象として

○吉川麻里子（スコークラブ）、西野 仁（東海大学）、知念嘉史（東海大学）

I、はじめに

本研究は、日本人のレジャーの捉え方に関する調査研究を試みた3編の関連する研究の第3報であり、とくに、大学体育学部生が「レジャーと捉える経験は何か」、「レジャーと非レジャーとを区別する要因は何か」を探ることが目的である。特にNeulingerやKellyらが主張する「選択の自由性の高低」と「内発・外発的動機」の2つの軸により、レジャーと非レジャーを峻別しようとする考え方が、日本の体育学部学生にあてはまるか否かを、Experience Sampling Method を用いて収集した日常生活経験のデータをもとに検討した。

本研究において、次のような3つの仮説を設定した。

①大学生がレジャーと捉える経験は、「友人」と「自宅以外」で行う「外食」「カラオケ」「旅行」「ドライブ」のような「いつもとは違う」経験である。

②大学生は、その活動を選んだ「選択の自由性」が高く、その活動を行った動機が「内発的」である時、大学生はその経験をレジャーとして捉える。

③レジャーと非レジャーを判別する要因の一つには、経験中の気分が Positive（肯定的、あるいは積極的）であることが挙げられる。

II、研究の方法

上述の目的を達成するために、ESMを用いて、大学生の行動と心理を含めた日常経験に関するデータを収集し、集計・分析した。

1) 調査方法

ESMにより、母集団である「日常生活経験」から、「経験の標本」として異なった時点の経験をランダムに抽出した。

2) 調査票と調査内容

本調査では、Larson や西野が作成したESFを大学生に適用できるように項目内容を部分的に変更したものをを用いた。内容は、ポケットベルの呼出し受信時の活動の種類、場所、同伴者、気分、その経験場面に対する態度や意識であり、活動の種類、場所、同伴者については自由記述を、気分とその場面に対する態度や意識については7段階のリッカートタイプの尺度を用いた。

3) 調査の実施

調査時期：1995年12月

調査対象：性別層化無作為抽出による大学体育学部3年生40名（男女各20名）

ポケットベルの呼びだし：8:00am～11:59pmの間にランダムな時刻に7回1週間（木曜日から水曜日まで）

回答数：総回答数：1485（75、8%）

ポケットベルの呼びだし後2時間以内に回答した数：1318（69、0%）

III、結果

レジャー経験と非レジャー経験は、それぞれの日常生活経験をレジャーと捉えるかどうかの質問にたいする回答結果によって峻別した。

1) レジャー経験と非レジャー経験

大学生は、日常生活経験の14、5%をレジャー経験として、また37、9%を非レジャー経験と捉えている。

2) レジャー経験と非レジャー経験の内容

(1) 活動の種類：主としてレジャー経験だと認識している活動は、付き合い、麻雀、テレビゲーム、音楽を聴くなどであった。またテレビやラジオの視聴、食事、通学、休息、身の回りの用事などは、レジャーと非レジャーの両方と捉えられている。学業、アルバイトは、非レジャーととらえられており、スポーツも数は少ないが非レジャーと捉えられている場合があった。

(2) 場所：レジャー経験は、飲食店や娯楽施設、友人宅、郊外・自然で行われている。また、自室での経験は、レジャー経験と非日常経験がほぼ同数であった。

(3) 同伴者：家族と友人と一緒にいる時は、レジャー経験だという回答が多かった。逆に一人にいる時は、非レジャー経験がレジャー経験を上回った。恋人といる場合には、レジャー経験である方が多かったものの非レジャー経験と捉える経験も5%と多かった。

(4) ムード：表1は、レジャー経験と非レジャー経験におけるムードスコアの平均である。全ての項目において、有為な差が認められた。特にレジャー経験でスコアが高かった項目は、自由、リラックス、安定、満足などであった。

表1 レジャー経験と非レジャー経験におけるムードの平均と標準偏差

項 目	レジャー		非レジャー		項 目	レジャー		非レジャー	
	7←-----→1	MEAN S.D.	MEAN S.D.			7←-----→1	MEAN S.D.	MEAN S.D.	
安定・いらいら	5.70	1.32	4.54	1.78	リラックス・・・緊張	5.77	1.37	4.65	1.62
わくわく・退屈	4.58	1.59	3.61	0.96	満足・・・不満足	5.49	1.35	3.99	1.33
幸せ・・・不幸せ	5.43	1.30	4.08	1.24	おだやか・・・不安	5.28	1.31	4.41	1.49
嬉しい・・・嫌な	5.10	1.30	3.70	1.21	ひま・・・忙しい	4.34	1.47	3.66	1.49
自由・・・束縛	5.97	1.26	4.06	1.92	爽やか・・・重苦しい	4.90	1.18	3.70	1.24

(5) 経験場面にたいする意識について：非レジャー経験と比べ、より「自分で選んだ」、「気に入っている経験」をレジャー経験と捉える傾向が認められた。

3) レジャー経験と非レジャー経験の判別

SASプログラムを使ってのレジャー経験と非レジャー経験の判別は、「やらなければならないかどうか」と「気に入っているかどうか」の二項目では、レジャーについて86、91%、非レジャーについて77、15%を正しく判別している。しかし、ムード項目の第一主成分（Positiveな気分）と、第二主成分（ゆとり気分）と、「気に入っている」（経験に対する愛好度）、「いつもとは違う経験」（非日常性）の項目による場合は、レジャー経験については89、01%が非レジャー経験については、78、01%が正しく判別され、最も高い率であった。

IV、考察

これらの結果は、仮説については、ほぼ実証されたと考える。この研究においても、分析結果は、十分に理解し得るものであり、ESMを用いた研究方法がこの種の研究に適していることを示唆していると考えられる。

女子大学生の日常生活場面における レジャー経験の検討 -経験抽出法 (ESM) を用いて-

○佐橋 由美 (樟蔭女子短期大学)

経験抽出法, レジャーの主観的定義, 日常生活場面

【目 的】

近年、レジャーを特定の活動や非労働時間としての自由時間に限定することなく、より広く、動的にとらえようとするアプローチは主流になりつつある。

Neulinger(1974) や Kelly(1972) はこの先駆であり、レジャーを「知覚された自由」や「内発的動機づけ」などの鍵概念によって説明するモデルを提示した。

Iso-Ahola(1979a)(1979b) や Unger & Kernan(1983) は、Neulinger や Kelly が提示した知覚された自由や内発的動機づけなどの鍵概念が、レジャー状況を生じさせる最も重要な規定要因であることを明らかにし、モデルの有効性を示した。しかし、仮想のシナリオにより操作的に多様な状況が設定されているものの、その分析結果が現実場面を対象とした場合にも有効であるかどうかは明らかではない。

日常生活の様々な状況と主体の特性の相互作用のもとかたちづくられるレジャー出現のプロセスやその経験特性を動的に把握しうる有効な研究手法を探り、精通することが重要と思われる。

このような課題に示唆を与えてくれるのが、Shawの生活日誌による分析法や Csikszentmihalyi らの研究グループによる経験抽出法 (ESM) である。しかし、Csikszentmihalyi らの研究グループが行った一連の ESM 研究は、現実の生活場面より系統的にデータを収集するという意味で研究手法として優れたものであることは疑いないが、分析の対象が知覚された自由や内発的動機づけ、経験の感性的側面 (特にフローの要素) が中心で、“レジャー”の経験 (ある状況がレジャーであるか非レジャーかといった問題) を直接扱ってはいない。

Samdahl(1992) や Shaw(1984) によれば、レジャーの客観的定義づけを否定する結果として、レジャーの経験は、何時でも、何処でも、どのような活動においても生じるとしている。しかし、レジャーが生じる可能性が高い状況として、夕方、週末、特定の“レクリエーション活動”をあげている。また、友人や家族がその場に居あわせている場合にレジャーの出現はより一般的であるという。

本研究は、そのような知見を参考としながら、日常の生活場面を対象とし、現実の様々な状況……生活のリズム・サイクル、社会的文脈、活動のタイプ等の観点から……において、どのような状況のもとレジャーは出現するのか、レジャーの生起を導く状況要因を探ることがねらいである。また、状況に伴う心的状態もあわせて検討する。

【方 法】

対象: 調査対象は、女子短期大学生、1年生25名、2年生25名であった。

手続き: 現実の生活場面を広く対象とし、状況に則した経験のデータを抽出することを目的として、Csikszentmihalyi らの研究グループが開発した経験抽出法 (ESM) を適用した。この手法は、日常の経験全体から、様々な時点での経験のサンプルをランダムに抽出し分析するものである。具体的には、調査期間中、対象者が呼び出し装置と調査票を常時携帯し、呼び出しを受けたら、即座に

その時の行動や状況、心的経験の内容を記入するというものである。呼び出しは、ランダムに設定された時刻に行われ、1週間程度繰り返される。当調査では、呼び出し装置としてポケットベルを使用し、呼び出し時間を午前8時から午前0時までとした。前後する呼び出し時刻の間隔が、1時間以内とならないように呼び出し時刻を設定し、各調査対象ごとに異なるタイムスケジュールで、1日8回、7日間で計56回の経験抽出を行うよう計画した。データ収集は、平成7年11月～12月にかけて3回行われた。

回答率と分析データ： 分析データの採択は、調査用紙への記入が30回以上であること、すなわち、回答率53.6%という基準に従った。48人から2227回の有効回答が得られ、回答率は、57.1%～100%、平均回答率は、82.8%であった。

調査内容： 調査用紙は、信号受信時のA.時刻、B.場所、C.活動内容、D.社会的なコンテクスト、E.考え、F.自由と動機づけ、レジャー性の知覚、G.感情・気分、集中の程度、活動の困難さと自己の能力レベルなどの情報を得るよう構成されている。

レジャー性の知覚に関しては、Iso-Ahola(1979a, b)のレジャーラベリング尺度を参考とした。当該活動に対して「あなたのしていた活動をどの程度レジャー（レクリエーション、余暇活動）だと思いますか」の質問に対し、「全くレジャーでない（0）」から「完全な意味でのレジャーだ（10）」の11段階尺度で評定する。

感情・気分は、15項目のSD尺度（7段階）によって調査された。因子分析の結果、「活動性」と「感情」の2因子が確認され、各因子に高く負荷する項目を選択し、各項目得点を単純加算することにより、各因子得点を合成した（得点範囲1～7）。感情因子を構成する項目は「悲しい～しあわせな」「イライラした～愉快的」「ゆううつな～はればれとした」であった。

その他、場所、活動内容、社会的コンテクスト、考えていたことがらなどは、自由記述形式であり、回答内容を通覧した後、分類、コード化を行った。

【結 果】

表1は、抽出した場面を、曜日、時刻、場所、社会的相互作用の状況、活動、自由の知覚の観点より分類し、各状況間で、レジャー性の知覚度や心的状態がどのように異なるのか、比較した結果である。レジャーラベリング尺度、感情因子の標準得点（右行）は、各個人の全回答の平均値、標準偏差をもとに、個々の得点を標準化したうえで、各カテゴリーごとの平均値を算出したものである。

まず、レジャーの経験は、学業を中心とした一週間の生活リズム・サイクルを反映しているようである。月曜日において最もレジャーが生じる可能性は低く、週末日曜には、最も高い頻度でレジャーが生じるようであった。しかし、土曜日に、レジャー出現頻度が低い点は、Sandahl(1992) Shaw(1984)の報告と異なり、また予想に反する結果であった。

また、1日の生活リズムという観点からみると、抽出された活動がレジャーと表現される可能性が高いのは、夕方以降であり、午後10時以降、就寝前の2時間に、レジャーの生じる可能性が最も高くなっていた。「感情」の得点が、レジャースケールの得点と呼応し、変動している点が注目される。

場所に関する回答の分布は、自宅、学校へのかたよりがみられた。全報告の半数近くを占める自宅での活動がレジャーとみなされる可能性が高い。「友人宅」も、レジャーが生じる重要な状況といえそうであるが、観測数が少ないため断定はできない。自宅において、レジャー経験の頻度が高いことは、手軽で気安い日常的レジャーへの志向の強さを示しているよう。しかし、感情は、肯定的とはいえ、自宅での日常的レジャーに伴う充足感は、さほど高くないと予想される。

レジャー状況の知覚は、活動のタイプと強く結びついているようである。Sandahl(1992)は、活動のタイプが、レジャーか非レジャーかの判別に最も影響力をもっていることを報告しているが、本分析はそれを支持する結果であった。レジャーの知覚は、活動カテゴリーごとに顕著に異なっており、その差は、上述の分析でみられた変動よりも大きなものであった。

注目すべきは、「学業」が、完全に非レジャーの状況とみなされ、感情も極めて否定的である点である。また、学生という立場であれば、義務ではなく自由を楽しんで行えるはずの「アルバイト」にも、まったくレジャー的要素を認めていないようであった。加えてアルバイトは、最も気ののらない否定的な経験ととらえられていた。「会話・交際」「マスメディア接触」「外出・娯楽」は、予想どおり、レジャーの文脈であった。また、「睡眠・休息」や「食事」など、通常維持的活動に分類される活動は、レジャーと見做される傾向があった。

表1 様々な状況におけるレジャーの出現と心的状態

曜 日	度数 %	レジャーレベルの尺度平均		感情因子平均	
		粗データ	z-score	粗データ	z-score
月曜	305 (13.7)	4.73	-0.14	4.22	-0.06
火曜	311 (14.0)	5.19	-0.03	4.13	-0.14
水曜	334 (15.0)	4.77	-0.13	4.27	0.07
木曜	348 (15.6)	5.56	0.10	4.25	0.01
金曜	323 (14.5)	4.83	-0.13	4.24	-0.02
土曜	315 (14.1)	5.52	0.08	4.37	0.11
日曜	291 (13.1)	6.23	0.27	4.29	0.04
	2227 100.0	5.25	0.00	4.25	0.00
時 刻					
8:00- 9:59 a.m.	272 (12.2)	4.65	-0.19	4.07	-0.17
10:00-11:59 a.m.	290 (13.0)	4.25	-0.32	4.14	-0.13
12:00- 1:59 p.m.	291 (13.1)	4.20	-0.30	4.14	-0.11
2:00- 3:59 p.m.	293 (13.2)	4.81	-0.11	4.15	-0.08
4:00- 5:59 p.m.	278 (12.5)	5.31	0.04	4.18	-0.05
6:00- 7:59 p.m.	274 (12.3)	6.11	0.25	4.47	0.22
8:00- 9:59 p.m.	277 (12.4)	6.33	0.32	4.44	0.18
10:00-11:59 p.m.	252 (11.3)	6.61	0.39	4.45	0.18
場 所					
自宅	983 (44.1)	6.42	0.31	4.41	0.12
友人宅	16 (0.8)	6.38	0.54	5.90	1.16
学校	461 (20.7)	3.36	-0.58	4.01	-0.17
車上 (移動中)	232 (10.4)	4.85	-0.11	4.17	-0.08
屋内(パブリックスペース)	299 (13.4)	5.08	0.02	4.08	-0.09
屋外	156 (7.0)	5.19	-0.00	4.37	0.08
その他	80 (3.6)	3.40	-0.35	3.95	-0.29

表1

	度数 %	リジャーレベリング 尺度平均		感情因子平均	
		粗データ	z-score	粗データ	z-score
相互作用の状況（誰と）					
一人	886 (39.8)	5.78	0.11	4.25	-0.07
家族	333 (15.0)	6.69	0.41	4.41	0.23
友人	157 (7.0)	5.11	-0.02	4.45	0.20
親しい友人	299 (13.4)	6.10	0.27	4.62	0.36
教師と学生	279 (12.5)	2.09	-0.89	3.79	-0.35
面識のない人	72 (3.2)	3.83	-0.23	3.86	-0.16
クラブ・サークルの仲間	32 (1.4)	6.31	0.17	4.76	0.45
アルバイト関係の人	136 (6.1)	3.41	-0.49	3.82	-0.44
その他	33 (1.5)	6.06	0.33	4.47	0.24
	2227 100.0	5.25	0.00	4.25	0.00
活動内容					
睡眠・休息	216 (9.7)	6.61	0.40	4.48	0.21
食事	150 (6.7)	6.53	0.31	4.76	0.54
身の回りの用事	177 (7.9)	4.69	-0.18	4.24	-0.08
仕事（アルバイト）	162 (7.3)	2.90	-0.59	3.71	-0.54
学業	358 (16.1)	1.97	-0.93	3.81	-0.39
家事	67 (3.0)	6.01	0.09	4.25	-0.10
移動	359 (16.1)	4.48	-0.21	4.10	-0.15
会話・交際	175 (7.9)	7.19	0.55	4.67	0.37
マスメディア接触	310 (13.9)	7.87	0.73	4.54	0.27
外出・娯楽	106 (4.8)	7.98	0.85	4.74	0.48
スポーツ	9 (0.4)	5.44	0.01	4.19	0.18
趣味・教養・文化的活動	88 (4.0)	4.42	-0.18	3.86	-0.27
その他の自由時間活動	50 (2.2)	5.76	0.08	4.19	0.05
	2227 100.0				
知覚された自由*					
自由	948 (45.3)	7.23	0.51	4.65	0.40
拘束	715 (34.2)	2.39	-0.76	3.71	-0.52
消極的	203 (9.7)	5.83	0.30	4.19	-0.04
自由／拘束	227 (10.8)	4.90	-0.15	4.27	-0.03
	2093 100.0	5.19	-0.02	4.24	-0.04

※『自由』：「それをしたかったから」 『拘束』：「しなければならなかったから」
『消極的』：「他に何もすることがなかったから」 『自由／拘束』：「したかったから」
と「しなければならなかったから」の二者選択

高校生の余暇活動に関する実態調査

○ 寺 嶋 文 代（東京都立北多摩高校）

松 浦 三代子（東京女子体育大学）

キーワード：高校生 自由時間 遊び 小遣い アルバイト

I 調査の目的

近年の青少年は自己中心的で他人のことや地域社会の動向などには無関心なものが多く、社会性の欠如がしばしば指摘されている。東京都生活文化局が昭和51（1976）年以来、3年に1回のインターバルで行ってきた「東京都青少年基本調査」の昨年度調査では東京都に住む青少年の社会性の程度の差は年齢と人間類型による差が最も大きいことが明らかにされた。この基本調査は第1回調査から青少年を4つのタイプに分けて分析の軸にしてきた。4つのタイプとは、コツコツ型、ふわふわ型、イライラ型、ゆうゆう型の4つであるが、そのうちコツコツ型は最も社会性が高く、イライラ型が最も低いことが明らかにされた。調査が始まった20年前はコツコツ型の青少年が最も多かったのが、調査を重ねるたびに減少し、第5回調査から最も多くなったのがイライラ型の青少年である。イライラ型の特徴が人間嫌いにあることも示唆的である。要するに、東京に住む青少年の傾向をみると、この20年の間に人間嫌いの傾向が強いイライラ型の青少年が増えており、それにつれ青少年の社会性の欠如を指摘する声も次第に高くなった。この調査では、青少年の日常生活についても調べ、社会性の程度との関連を検討している。それによると、現代の大都市青少年の7割が自分の個室をもち、3割が自分専用の電話とパソコンをもち、半数が自分専用のテレビをもち、6割がレンタルショップを利用しており、7割が専用のテレビソフトをもち、8割が専用の雑誌を購読している一方、会って話す人が1日平均4人不足であり、クラブやサークルへの参加率に至っては3%にも満たないという生活状況であることが明らかにされている。

青少年の余暇問題について考えると、平成8年4月から「学校週5日制」（第2、第4土曜日の休日）が導入され、青少年の自由時間が増大した。高校期に入ると自由時間の過ごし方に個性が現れてくる。その原因については、家庭環境・友人関係・アルバイト生活・大人の疑似体験等、やゝもすると目的を失い生活態度の混乱を招く。また、青少年の非社会的行動（問題行動）の分析からみて青少年が自分だけの関心の世界にとじこもり自分だけの快適さ、楽しさを先行・追求し、社会との関わりを避け、積極的に関わろうとしない状況がある。

今回、東京都立の全日制高校・定時制高校の生徒を対象に自由時間の過ごし方を調査・分析することにより、高校生の余暇活動の支援の一助とするものである。

II 方法と対象

- 1) 調査においては、都立の全日制7校、定時制11校、計18校を抽出し調査を依頼した。これらの内訳は、表1のとおりである。
 - 2) 調査期日は、平成8年5月1日～5月31日
 - 3) 調査は、調査票を各校に送付し、任意の時間に集団記入式で実施した。回収率は100%
- ㊦ 文中における空欄は無回答を意味する。

である。女子は「本や雑誌」が49.6%、「飲食」42.1%、「着るもの」42.1%、「遊び」34.8%と男子と比較すると高い率を示している。これは女子の小遣いの使い方と自由時間の過ごし方とが重複していることがわかった。男子の小遣いの使途は、比較的「趣味」に使われている傾向がみられた。定時制では68.7%が「空欄」である。

IV まとめ

(1) 青少年の自由時間の望ましい使い方として 家庭環境・地域社会の場の提供と共に、自分の余暇や「自由時間」をどのように作りだすか。自分にとって意義ある使い方をしていくか、青少年の大切な課題でもある。

(2) 青少年の社会的・自然的体験の不足から「遊び」の内容が乏しい。今後の課題は自由な時間をどのように過ごしていくか。時間を有効に利用し、計画性や実行力を育くむことである。

(3) 余暇活動に判断しかねる未記載「空欄」が何であるか追求する必要がある。

(4) 週5日制が導入された当初は、土曜日はお昼すぎまで寝ていたり、友達とどこかへ遊びに出掛けたりと時間の無駄使いばかりしていた。しかし、5日制に慣れてからは、土曜日をボランティア活動に参加したり、部活をしたりして、ただ学校にいて授業を受けているだけでは得られない何かを覚えてくれた。これからはく読書・小旅行・映画・演奏会・家族とのんびり」と自由時間を過ごしていきたい。という実例もあった。

(5) 自由の望ましいライフスタイルに合わせて、スポーツ・読書・野外活動・ボランティア活動等についても、自分で創意・工夫して積極的に参加できるように支援していきたいものである。

表 1

	校数	区部	市町	普通科	職業科	男子	女子	合計
全日制	7	5	2	4	1	315名	368名	683名
定時制	11	4	7	9	2	599名	255名	854名

表2 自由時間の過ごし方

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	他	空
全日男	40.3%	3.2%	1.9%	45.7%	0.0%	41.0%	0.0%	12.1%	20.0%	39.7%	0.0%	0.0%	13.7%	0.0%	0.0%	0.0%	62.5%	0.0%	0.0%	17.8%
全日女	64.4%	1.1%	9.2%	33.7%	0.0%	1.6%	2.4%	0.0%	64.1%	48.6%	0.0%	0.0%	10.3%	0.0%	0.0%	0.0%	63.9%	0.0%	3.5%	8.4%
定時男	39.4%	1.2%	3.3%	48.6%	0.0%	28.4%	0.0%	2.8%	15.2%	27.7%	0.0%	0.3%	9.2%	1.7%	0.0%	0.0%	43.7%	0.0%	2.8%	67.1%
定時女	58.8%	7.8%	22.0%	50.2%	0.8%	11.0%	0.8%	2.4%	54.5%	32.2%	1.2%	4.7%	20.8%	0.4%	0.0%	0.8%	48.2%	0.0%	6.3%	42.4%

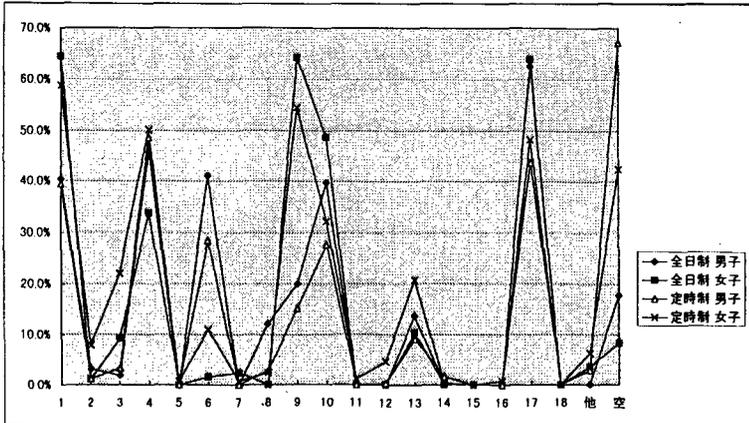


表 3 遊びについて

順位	全 日 制		定 時 制	
	男子(N=315) %	女子(N=368) %	男子(N=599) %	女子(N=255) %
1	テレビゲーム54.6	空欄 59.2	空欄 51.8	カラオケ 55.7
2	ゲームセンタ38.4	カラオケ 48.6	テレビゲーム44.9	その他 31.4
3	スポーツ 31.7	その他 42.1	ゲームセンタ39.1	ゲームセンタ29.0
4	カラオケ 18.7	映画 30.7	その他 21.5	テレビゲーム21.2
5	空欄 18.1	テレビゲーム16.0	カラオケ 21.0	映画 13.7
6	その他 14.6	ゲームセンタ14.9	スポーツ 5.3	スポーツ 5.9
7	スポーツ観戦 6.3	スポーツ 10.1	バイクに乗る 3.3	スポーツ観戦 5.5
8	バイクに乗る 3.2	スポーツ観戦 2.4	映画 3.0	バイクに乗る 1.6
9	映画 2.5		スポーツ観戦 2.5	パソコン 1.6

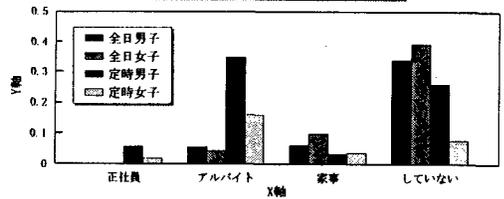
「した」割合(複数回答)

仕事について(全体)

	正社員	アルバイト	家事	していない
全日男子	0.0%	5.7%	6.3%	34.1%
全日女子	0.0%	4.4%	10.1%	39.4%
定時男子	5.8%	35.1%	3.4%	26.0%
定時女子	1.9%	16.2%	3.8%	7.8%

表 5

表 5-① 仕事について(全体)



どんな遊びをしていますか。 表 4

番号	項目
1	ゲームセンター
2	映画
3	テレビゲーム
4	カラオケ
5	スポーツ観戦
6	観劇
7	バイクに乗る
8	パソコン
9	スポーツ
10	野外活動
11	その他
12	空欄

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	その他	空欄
全日制男子	38.4%	2.5%	54.6%	18.7%	6.3%	0.0%	3.2%	1.3%	31.7%	0.0%	14.6%	18.1%
全日制女子	14.9%	30.7%	16.0%	48.6%	2.4%	0.0%	0.0%	0.0%	10.1%	0.0%	42.1%	59.2%
定時制男子	39.1%	3.0%	44.9%	21.0%	2.5%	0.2%	3.3%	0.0%	5.3%	0.0%	21.5%	51.8%
定時制女子	29.0%	13.7%	21.2%	55.7%	5.5%	0.8%	1.6%	1.6%	5.9%	0.8%	31.4%	0.4%

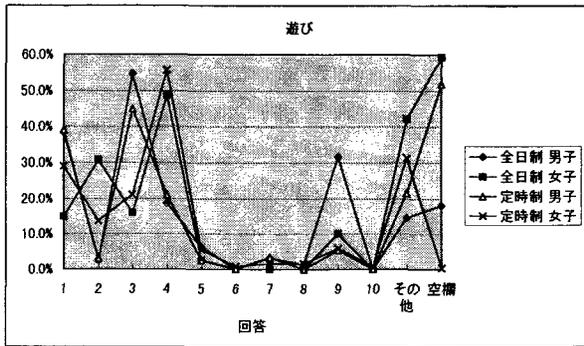


表 6 アルバイトの理由について (%)

(1)アルバイトしている理由	全 体	全日制	定時制
I 自分の小遣いのため	7 0 . 8	8 2 . 6	6 8 . 9
II 家計を助けるため	6 . 2	2 . 9	0 . 2
III 学費のため(進学のため)	7 . 0	1 . 4	7 . 8
IV 働きたいから	7 . 8	1 1 . 6	7 . 1
V その他	1 1 . 3	2 3 . 2	9 . 4
	(N=503)	(N=69)	(N=434)
(2)アルバイトしていない理由	全 体	全日制	定時制
I 働くところがない	3 0 . 7	1 1 . 6	6 4 . 3
II 働かなくてもよい	1 7 . 9	1 8 . 3	1 7 . 1
III 働きたいが親が反対する	9 . 0	1 2 . 5	2 . 8
IV 学校から禁止されている	1 0 . 7	1 6 . 5	0 . 3
V 勉強やクラブ活動があるため	2 2 . 1	3 2 . 7	3 . 1
VI その他	1 7 . 9	1 4 . 9	2 3 . 1
空欄	4 . 8	1 . 0	1 1 . 5
	(N=788)	(N=502)	(N=286)

表 7 小遣いの使い道について (%)

順位	項 目	全体 (N=1537)	男子 (N=914)	女子 (N=623)	全日制 (N=683)	定時制 (N=854)
1	本や雑誌	4 6 . 4	4 4 . 2	4 9 . 6	6 6 . 3	3 0 . 4
2	空欄	3 9 . 2	5 0 . 2	2 3 . 0	2 . 2	6 8 . 7
3	飲食	3 5 . 4	3 0 . 9	4 2 . 1	5 2 . 9	2 1 . 4
4	着るもの	2 7 . 9	1 8 . 3	4 2 . 1	3 3 . 8	2 3 . 2
5	遊び	2 6 . 5	2 0 . 8	3 4 . 8	2 8 . 4	2 4 . 9
6	趣味	1 3 . 5	1 8 . 1	6 . 7	1 0 . 8	1 5 . 6
7	貯金している	8 . 0	7 . 7	8 . 7	4 . 1	1 1 . 2
8	学用品	3 . 5	0 . 5	7 . 9	5 . 9	1 . 6
9	アクセサリ	1 . 2	0 . 0	3 . 0	0 . 6	1 . 8
10	ペット	0 . 3	0 . 0	0 . 6	0 . 0	0 . 5
11	コンサート	0 . 3	0 . 0	0 . 6	0 . 0	0 . 5
12	映画	0 . 2	0 . 0	0 . 5	0 . 0	0 . 4
13	その他	0 . 0	0 . 0	0 . 0	0 . 0	0 . 0

「した」割合(複数回答)

社交ダンス実施者の意識に関する研究

竹内 正 雄(星薬科大学)

社交ダンス、中高年者、健康
はじめに

近年、科学文明の発達により、社会全体が日常生活においても、仕事の上においても、身体を動かさずに生活ができるような便利な社会になっている。一方では、「運動と健康」について多くの研究が進められて来ており、成果は多くの論文と成って報告されている。^{1~5)} そのことから今日では、健康・体力づくりを目的として中高年者の間でウォーキングやジョギングなどスポーツが盛んに行なわれるようになってきた。

こうした社会状況を踏まえて、本研究では、ここ数年の間に多くの中高年者に人気を得ている社交ダンスがどのような意識で行なわれているかを質問紙法を用いて検討した。

調査方法

- 1) 調査対象：対象者は、鎌倉市社交ダンス協会に加盟しているダンスサークルの会員男子97名、女子160名の合計257名である。
- 2) 調査期間：1996年2月である。
- 3) 調査方法：質問紙を本人に直接配布し、後日回収した。(回収率87.9%)
分析の手法は単純集計、クロス集計によるものである。

結果と考察

ダンス実施者の年齢構成(図1)は、男女とも50.60歳代が最も多く、男子60歳代は40.2%、50.70歳代は22.7、23.7%であった。女子は60歳代41.9%が最も多く、次に50歳代の34.4%であった。50.60歳代になると子供たちも手がかからなくなり、自分の趣味や健康づくりの

一環としてダンスの練習などで家をあけられる余裕ができる年代と思われる。30.40歳代は男女とも10%以下と非常に少なかった。平均寿命の伸びとともに、高齢化社会が進み、高齢者の健康・体力やスポーツ、レクリエーションの問題も重大な社会的関心事となってきた⁶⁾。ことから、ゲートボールの普及と同様、高齢者の社交ダンス実施者も今後ますます多くなっていくのではないかとと思われる。

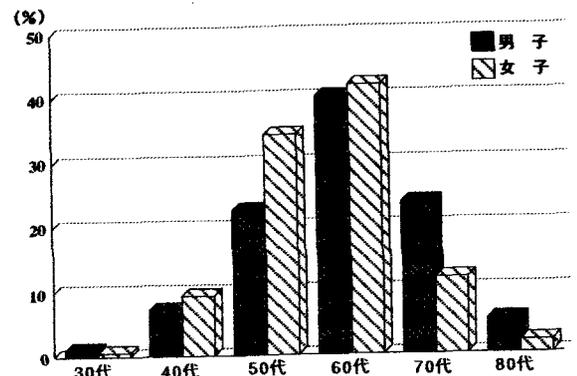


図1 ダンス実施者の年齢構成

ダンス練習にはダンス教室での個人練習方式とサークルでの団体練習方式の二方式がほとんどである。男子の約半数の者は個人と団体の両方で練習をしている。一方、女子は個人練習は160名中29名であり、他は全て団体練習であった。

ダンス経験年数(図2)についてみると、団体練習は男子4~6年が最も多かった。女子は1~3年の者が38.8%、4~6年が32.7%であった。10年以上続けている者は男子22.2%、女子12.9%であった。個人練習は男子10年以上が多く、女子は1~3年が多かった。

ダンスを始めた動機(図3)は、男女とも「健康のため」が最も多く、男子36.0%、女子

31.7%で全体のほぼ1/3を占めていた。次に多かったのは「運動不足解消のため」が男子18.5%、女子18.2%であった。著者⁷⁾の調べた10年前の結果は、男子の第1位「友達との交流のため」、「踊れなくて不便を感じた」がいずれも35.7%であった。今回のこの二つの設問の回答は11.6%と1.1%で前回より非常に少なかった。女子は今回も10年前の結果と同様、「健康づくり」が最も多かった。しかし、10年前は60%であったのが、今回は31.7%と数字は半減していた。

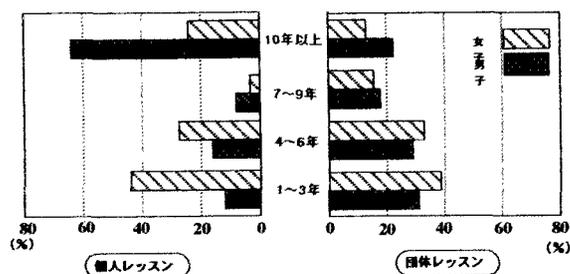


図2 ダンスの経験年数

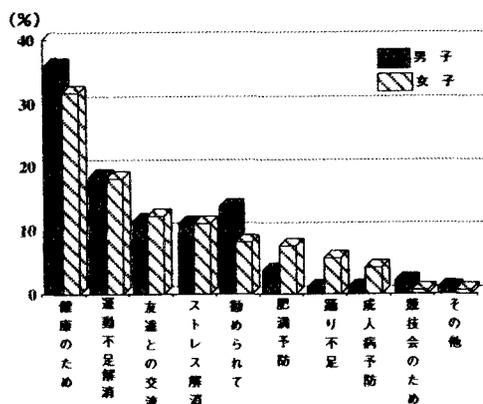


図3 ダンスを始めた動機 (複数回答)

近年、健康づくりのために、いろいろなスポーツが行なわれているが、ランニングやジョギングが手軽に沢山の人のによって行なわれている。しかし、時には新聞紙上にみられるように、ランニング中の事故も散見される。例えばランニングが苦しかったり、楽しいものでなくても、健

康のためにと頑張るといふところもみうけられる⁸⁾。その点、社交ダンスは池間^{9,10)}が述べるように「踊る喜び、楽しみに満ち、燃える心を身体で表現する。」などからも分かるように楽しみながら身体を動かすことができ、相手とコンタクトして踊るものであるから、相手の体力に合わせて無理をしないことから危険が少ない。

ダンスを始めて精神的に良かった事は何か(図4)についてみると、男女とも20.1~22.6%が「友達が増えた」と答えた。10年前も同様、「友達の輪がひろがった」が男女とも第一位であった。ダンスを始めた動機の「友達との交流のため」は男女とも11.6~12.3%であったが、ここでは男女とも2倍に増えていた。次に多かったのは男子の「社会的になった」、「日常生活が楽しくなった」、「ダンスが生き甲斐になった」が10%であった。女子も男子同様、「日常生活が楽しく」、「そして「ダンスが生き甲斐になった」と答えている。長い人生を楽しく、また生き甲斐となるダンスは今後益々中高年者に親しまれるスポーツになると思われる。

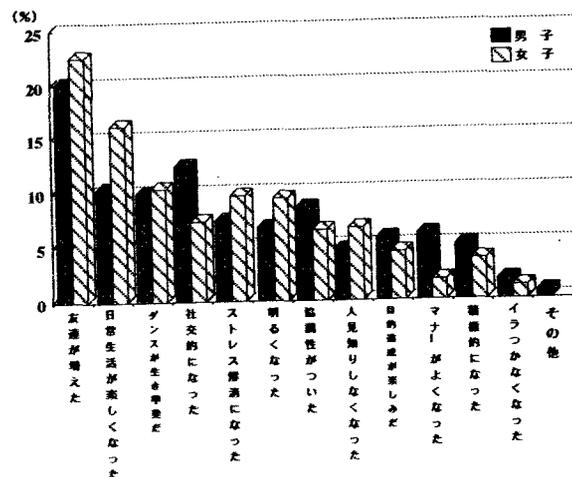


図4 ダンスを始めて精神的に良かったこと (複数回答)

ダンスを始めて身体的に良かった事は何です

か(図5)についてみると、「姿勢が良くなった」が最も多く、男子は45.1%、女子は41.9%でほぼ半数近くの者が認めている。社交ダンスは他のスポーツと違い、男女がお互いに組んで踊るので姿勢が悪いことは相手の領分を侵すことになり、自分のバランスを崩すばかりではなく、相手のバランスを崩すことにもことになるので姿勢は最も正しいバランスで踊らなければならないことから、姿勢が良くなったと感ぜられるのは当然のことと思われる。

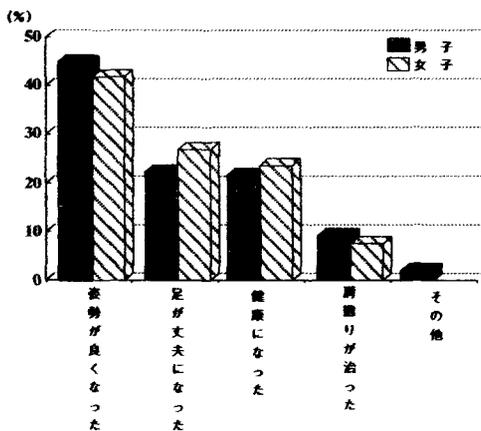


図5 ダンスを始めて身体的に良かったこと (複数回答)

次に多いのは男女とも「足が丈夫になった」22.7、27.0%、「健康になった」男子21.5%、女子23.7%の順であった。10年前の結果は「健康になった」は男子21.4%で今回とまったく同じであった。女子は13.3%で今回の方が約10%高い値を示した。ダンスを始めた動機は「健康のため」が男子36.0%、女子31.7%であるので健康を目的としてダンスを始めた動機の者が多いが数年後の結果、「健康になった」と答えた者は減少しており、動機と結果の数は一致していなかった。

ダンス以外に定期的に運動を行なっているかどうかについて見ると(図6)週に1.2回行なう者は男子19.8%、女子28.8%である。ダンス以外に運動は特に行なっていない者は男女とも

60~70%であり、日常生活の中での運動は唯一ダンスだけの者が多かった。

煙草の害については平山¹¹⁾によって喫煙と癌との関係が報告されている。健康のためにダンスを踊る者の喫煙やアルコールについて見た。

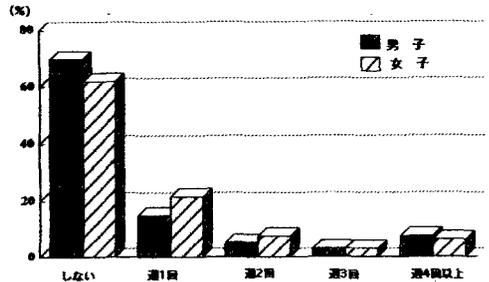


図6 ダンス以外の運動頻度

煙草(図7)についてダンス実施者と全国平均と比較すると女子のダンス実施者は5.6%、全国平均19.7%よりも吸う者が少なかった。男子は全国平均と比べるとダンス実施者24.7%であり、全国平均の約1/3の喫煙者であった。このように喫煙者が少ないのは健康のためばかりではなく、口臭などダンスのときの相手に対する気遣なども考えられる。

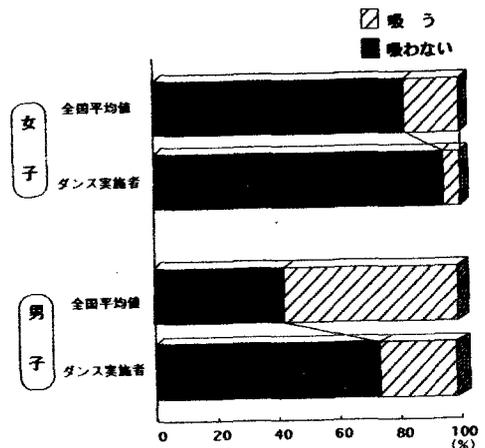


図7 ダンス実施者と全国平均値の喫煙の割合

飲酒(図8)について見ると、女子は全国平均と比べるとダンス実施者は20%ほど飲酒者が

多かった。男子は逆にダンス実施者の方が全国平均よりも飲酒者が少なかった。

ダンス実施者の健康状態（図9）について見ると男子は「非常に健康」、「まあ健康」と答えた者が70.1%、「普通」が22.7%、両方を合わせると92.8%が普通以上であった。女子も男子と同様に普通以上の健康状態の者は95.1%であった。

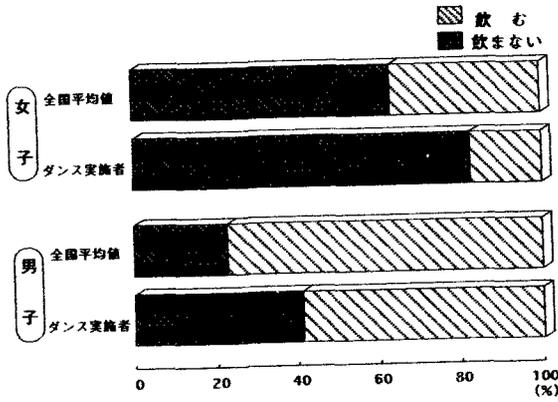


図8.ダンス実施者と全国平均値の飲酒の割合

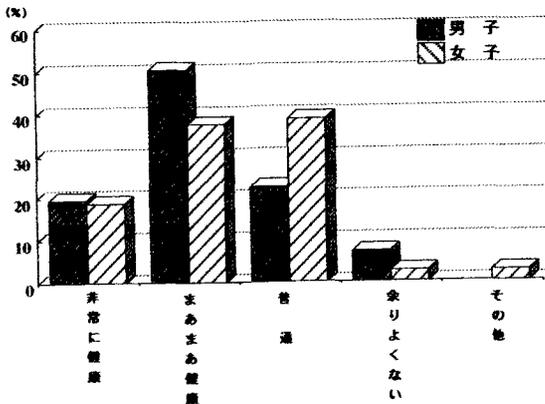


図9.現在の健康について

結論

社交ダンス実施者を対象とした質問紙法調査によって、ダンスを始めた動機、ダンスの効用、健康状態等について回答を求めた。

その結果は次の通りであった。

1) 社交ダンスを始めた動機は、男女とも「健

康のため」が第一位であった。

2) 社交ダンスを始めて良かったことについては、精神的には男女とも「友達が増えた」が第一位であり、第二位は男子「社会的になった」、女子「日常生活が楽しくなった」であった。

身体的な効用については、男女とも「姿勢がよくなった」が第一位であった。

参考文献

- 1) 佐藤祐造：肥満を解消するための運動、体育の科学、Vol.40,3月号、199-203、1990
- 2) 紅露恒男：老化防止とスポーツ、からだの科学、166号、53-56、1992
- 3) 目崎 登：女性の健康とスポーツ、からだの科学、166号、57-60、1992
- 4) 白山正人：こころの健康とスポーツ、からだの科学、166号、61-64、1992
- 5) 辻 博明：老いを防ぐための運動、体育の科学、Vol.40,3月号、204-207、1990(6)
- 6) 金崎良三、徳永幹雄：高齢者のスポーツに関する社会心理学的研究—ゲートボールの実態と効果について—、レクリエーション研究、第9号、1982
- 7) 竹内正雄：中高年者の社交ダンスに関する研究—参加者の意識とその運動強度について—、レクリエーション研究、第18号、62-67、1987
- 8) 山川 純：最近の健康づくり、体育の科学、Vol.32、1982
- 9) 池間博之：ヨーロッパに見る社交ダンスの歴史1、ダンスファン7号、1986
- 10) 池間博之：歩き踊ることの研究、日本女子体育大学 中高年体育研究室、1996
- 11) 平山 雄：「予防ガン学」新宿書房、1977

学外コース（乗馬）の生涯スポーツ化に関する授業の取り組みについて

○上野直紀（いわき明星大学）

鈴木秀雄（関東学院大学）

五十嵐幸一（いわき明星大学）

生涯スポーツ化、馬さばき、余暇活動動機、学外コース

I はじめに

『レジャー白書'96』⁽¹⁾の平成7年における余暇活動からみると、経済不況によりレジャーへの関心はやや低下の傾向にあるが、年齢別にとらえてみると、若い層では男女とも非日常空間でのスポーツやアウトドア型のレジャーへの潜在需要が高い。高年齢層になると全体的にこの潜在需要の数値は低くなり、創作活動や文化的活動への潜在需要が高くなる。高年齢層の余暇活動へのニーズも文化的な側面が重点を占め、多様化していることがわかる。

余暇活動におけるスポーツ部門の活動種目は、昭和50年代の前半から半ばにかけて急速に参加率を伸ばし、昭和62、63年あたりから再び上昇傾向を示した。いわゆるバブル景気と消費好調のもとで、参加率を伸ばし、そのバブル崩壊後は、多くの種目で参加率は減少傾向にある。ただ、余暇意識は“仕事よりむしろ余暇の中に生きがいを求める”人が全体の10.6%と前年より2.1ポイント増え、“仕事は要領よくかたづけて、できるだけ余暇を楽しむ”の23.9%と合わせた“余暇重視派”が減少傾向にあることがわかる。

日本人の余暇動機（余暇に求める楽しみや目的）では“友人や知人との交流を楽しむこと”が第1位を占め、以下、“心のやすらぎを得ること”が8年間（1987年～1995年）で常に上位を占め“自然に触れること”という余暇活動動機が増えている。⁽²⁾

前出の白書によれば、余暇活動への参加、消費の実態は、乗馬の参加人口は60万人であり、余暇活動に占める乗馬活動の参加希望率は全体の5.7%であり、前年（40万人）より増加していることがわかる。

近年、リゾート地などで自然の中でのスポーツ活動が目立つようになってきた。日常生活は、ともすれば見失いがちな自然の潤いや自身を取り戻したいという人間性回復の動きの中で乗馬活動への志向もその一つと考えられる。

大学での学外コース（乗馬）は、1994年より体育実技Ⅱ（学外集中コース）に設置され、地域の特性を生かし、学生のニーズに合わせた形態でのコースの一つとして実施されている。

道具を利用して行うスポーツの場合、ほとんどは自身の意志を持って行うものであるが、乗馬は、生命ある動物を利用するところに特徴があるのはいうまでもない。大自然の中で走り、跳び、自由に動き回る馬の本能を発揮させ、人馬一体で喜び、楽しむスポーツである。馬場での訓練後（常足、速足、軽速足、駈足）、野外騎乗として連馬で指導者の指揮通りに活動するスポーツとして何ものにも代えがたい価値を有するものである。

乗馬は、性別、年齢、体格、体力、運動能力等に依存することなく、生涯スポーツ⁽³⁾として誰もが楽しむことができる可能性をもっている。それだからこそ、運動の日常生活化及び運動の世代を越え、あるいは世代をまたがった形態で実行することができる生涯スポーツ化を実現できるスポーツ活動の一形態ともいえるのである。

Ⅱ、本研究の目的

本研究では、学外コースとして各選択種目が設置されている中で、大学卒業後も身体活動を続けることができる種目（生涯スポーツ化活動）の一つとして“乗馬”が開講されており、授業への取り組みにあたっての実践カリキュラム（乗馬プログラム）のよりよい方策を模索する中で、季節の風に吹かれ、心ゆくまで自然との一体感を体験し、自然の懐に飛び込む楽しさ、きびしさを知り、馬の背に揺られながら自然景観に恵まれた場所での授業展開をさらに生涯スポーツ化にするための要因を明らかにすることにある。

また、馬の特性を知り、人馬一体となってさまざまな活動を合宿（4泊5日）によって各自が意図的、計画的に目的、目標をバランスよく達成させる重要な実践の場としての学外コース（乗馬）となっている。まさに受講生が乗馬を通して体験するさまざまな要因を確認し、生涯スポーツ化を意識した学外コース（乗馬）により個人の生活や行動にどのような変化を与えることができるか、また、乗馬の体験という活動の広がりから、生涯スポーツ⁽⁴⁾の実践という深まりのある活動へ、すなわち生涯スポーツ化への具体的提供を図る為の一つの地域特性を生かした活動に意義づけ（要因の明確化）を目的としたものでもある。

Ⅲ、研究の方法

本研究は、平成6～7年度に実施された授業（学外コース：乗馬）の実態分析と授業への取り組みに総括的な検討を加え、生涯スポーツ化への要因の明確化を図る視点から質問紙法を用いて分析した。

検討対象：いわき明星大学体育実技Ⅱ：学外コース（乗馬）受講生

調査期間：平成6年～平成7年（2ヶ年）

検討方法：質問紙法による調査

- ①各年度毎の課題（2ヶ年、4コース、4泊5日）
- ②実習帳、各個人別日誌（100名）
- ③課題聞き取り調査（実施期間中：100名）
- ④事前授業提出レポート（100名）

以上の内容について精査した。

Ⅳ、結果・考察

学生から得られた生涯スポーツ化に対する意義づけ（要因1～要因4）の明確化が以下のよう
に得られた：

○生涯スポーツ化に対する要因1

～現代社会における動物と人間との関係～

- ①動物との共生や共存をはかる精神の涵養
- ②動物との直接接触から生まれる先入観と現実とのギャップの認識（理解）
- ③動物の全体的な世話をすることによる生き物としての特性の理解

○生涯スポーツ化に対する要因 2

～馬の特性に対応した馬さばきの理解による不安（恐怖感）の解消～

- ①馬の特質の理解
- ②馬の特質を理解した上での心理的な準備

○生涯スポーツ化に対する要因 3

～乗馬の初歩技術⁽⁵⁾の分析的理解～

- ①騎乗準備 イ、無口、頭絡をつける
ロ、引き馬
ハ、馬具の装着
ニ、乗馬
ホ、下馬
- ②騎乗技術 イ、基本姿勢、馬上体操
ロ、扶助
ハ、4種類の歩様
a)常足
b)速足
c)軽速足
d)駈足
ニ、歩様の変換

③野外騎乗

④馬の管理

○生涯スポーツ化に対する要因 4

～自然、人間、動物との融合～

- ①乗馬の楽しさ、面白さの充実
- ②多様な交流を実現する
- ③関係する事象との交流を深める

V、まとめ

本学における学外コース（乗馬）に参加した学生の多くに積極的な参加がみられた。特に女子学生に希望が多く、受講希望者全体の8割（120名中96名）を越えており、乗馬といえどもかなり活発化し、生涯スポーツ化しつつあるといえる。学外コース履修後、毎回、乗馬クラブに入会する学生も複数に及んでおり、昨年、受講生25名中9名が乗馬クラブに入会（34%）、その中には現在、馬場馬術競技の選手となっている学生や卒業生もあらわれている。

現代社会におけるスポーツは、ニュースポーツの台頭により多種多様であり、従来の大学体育の領域では計り知れない程の広義にわたる活動範囲となっている。

従来の大学体育は、高校体育の延長といった要素もあり、ある部分では現代の学生のニーズに対応できないままである。現代社会における若年層のスポーツ志向は、与えられた課題に対して自分が努力するスポーツは敬遠され、誰にでもすぐにできて楽しめるスポーツが受け入れられているようである。これは、スポーツが簡単に非日常の世界を体験できる手段として用

いられているためであり、“簡単に、楽しく、かっこよく”ということが、若年層に受け入れられる物事の基本を成しているといえなくもない。

その意味においても乗馬は、馬に触れた瞬間から非日常的な体験ができ、基本的な乗馬技術もそれほど難しいものではないことが、若者のスポーツ志向に合致しているといえよう。また、折しも、自然志向、アウトドア志向が盛んに説かれていて、自然の中で活動することが、一種の流行となっている。馬に乗るという行為とアウトドア（自然）という二つの要因が若者をひきつけ、“するスポーツ”としての乗馬を成立させたといえよう。

乗馬の生涯スポーツ化に対する要因として、

- ①現代社会における動物と人間との関係
- ②馬の特性に対応した馬さばきの理解による不安（恐怖感）の解消
- ③乗馬の初歩的技術の分析的理解
- ④自然、人間、動物との融合

があげられるが、これらの積極的理解を進めることができるカリキュラム（プログラム）を作成することは、乗馬に対する先入観や誤ったイメージを修正し、また、逆に動物を甘く見ることなどによる行動からの事故を未然に防ぐことに有用であろう。

単なる流行としての乗馬ではなく、将来にわたって継続できる“スポーツとしての乗馬”を具現化するためにも、より安全で楽しい生涯スポーツ化としての乗馬が実現されるべきである。

なお、実践活動内容の報告については、スライドプレゼンテーションにより、その実態を明らかにする。

〈引用文献〉

- (1) 駒余暇開発センター編『レジャー白書'96』1996 pp.43-52
- (2) 前掲書 pp.16-17
- (3) 鈴木秀雄「生涯スポーツの意味 (The Meaning of Life Time Sports)」
『日本大学櫻門体育学研究』第25集 1991 pp.26-27
- (4) 前掲書 pp.27-29
- (5) 全国乗馬倶楽部振興協会『Let's Enjoy Riding (初心者のための乗馬テキスト)』
1995 pp.12-56

〈参考文献〉

- 瀬理町芳雄『FIRST RIDING 乗馬をはじめよう』高橋書店 1995年6月
山口佳男『楽しい野外乗馬』北海道新聞社 1995年7月
村上捷治『乗馬ブック』山海堂 1993年
平田 隆『土、日で覚える乗馬』同朋舎出版 1993年8月
鈴木秀雄『セラピューティックレクリエーション』不味堂 1995年1月

高齢化・福祉社会の新しい生涯スポーツ： バーンゴルフ（BAHN GOLF）

—— バーンゴルフの楽しみ方（その2） ——

○西田俊夫（淑徳大学）

バーンゴルフ バリアフリースポーツ 生涯スポーツ レジャースポーツ

I. はじめに

ヨーロッパで誕生したバーンゴルフは、子供からお年寄りまで身体的ハンデのあるなしにかかわらず実践できるスポーツである。誰もが参加できる、バリアフリーのニュースポーツを前回の小田原大会で紹介をした。特に、バーンゴルフの歴史とヨーロッパの実状を把握しながら、日本バーンゴルフ協会の設立目的・意義を示し、これからのバーンゴルフを発展・普及させていくための出発点を述べてきた。

そこで今回は、バーンゴルフの楽しみ方としてバーンゴルフコースや用具、基本ルールなどについて述べることにする。

II. バーンゴルフコースについて

コースには、1ショットコースと2ショットコースの2種類がある。各コースには承認された障害物が置かれ、ゲーム性を高めている。

1) 1ショットコースとは

1コースの長さが約6メートルあり、フレームは鉄製で面は薄いコンクリートを使用している。ベテランのプレーヤーは、18コースを21ショットでフィニッシュしている。

2) 2ショットコースとは

1コースの長さが約10～12メートルあり、プレーヤーは、そのコースを2ショットでフィニッシュするのを基準としている。ベテランのプレーヤーは、18コースを35ショットでフィニッシュしている。このコースには、次の2種類がある。

① フィルターコース（スウェーデンコースともいわれている）

フレームは、松の木の美しい木目を生かした圧縮材、面にはフィルターを使用している。

② コンクリートコース

フレームは、コンクリート製、面はコンクリートやエターニトを使用している。

III. 用具について

1) 使用ボール

ボールは、カラフルで美しいゴム製やプラスチック製のものでその種類は数百種類ある。

プレーには好みのボールを選択して使用し、ゲームや競技ではハード、ミディアム、ソフト等の3～5種類の指定ボールの中から、コースにあったボールを使いわけてプレーをする。ただし、1ホールに1個のボールを選ぶことができる。

2) クラブ

基本的には通常のゴルフパターと同じであるが、パターのクラブヘッドに厚さ3～5mmのラバーを貼ってプレーをする。

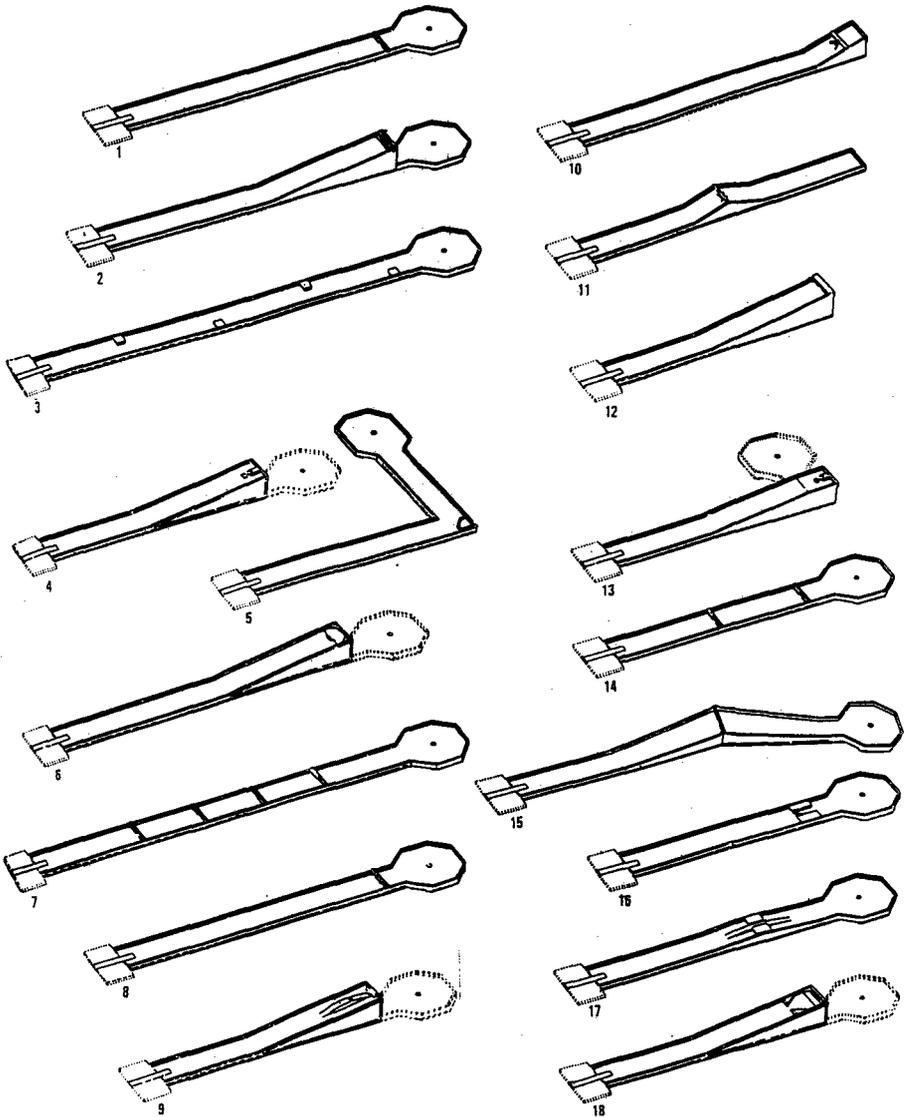
これはショットのばらつきやカットなどのテクニックを発揮するためである。

ラバーの硬さはいろいろで、コースの難易度や気象条件等を含め、自分にあったものを選択してプレーをする。車イスに乗ってショットする場合はシャフトの長いものを使用する。

Ⅳ. パーンゴルフコースの18ホール

Aタイプの18ホールのコースは、次の内容です。

- ・レギュラーコース ・ジャンプコース ・L字コース
- ・スパイラルコース ・ボトルネックコース ・トンネルコース
- ・マウントコース ・ブリッジコース ・マルチブルグリーンコース



VI. バーンゴルフの基本フォームについて

①足の位置

足、腰、肩はゲーム（打つ）方向と並行位置であること。

②クラブのグリップ

手を重ねるようにし、上部の手は少し強めに握る。左右どちらの手が上になるかはあまり問題にならない。

③ショット

ショット又はスウィングは初め約40～60cmに引く。そうして真っ直に打ち、打ったときにクラブが膝の高さより低くすること。

ショットする瞬間は頭を静止すること。

ボールは常に手で持ち上げて移し、決してクラブや足ではいけない。

VII. バーンゴルフ場の施設について

公認コースはAタイプの18ホール又は12ホールである。

必要面積として、18ホール1,500 m²～2,000 m²、12ホールでは800 m²～1,500m²必要となる。

VIII. 国際バーンゴルフ協会加盟国及び加盟希望国について

1996年4月現在、国際バーンゴルフ協会の加盟国は21ヶ国、加盟希望国は13ヶ国である。加盟国及び加盟希望国は、次の通りである。

1) 加盟国

①スウェーデン

②オーストリア

③スイス

④ドイツ

⑤チェコスロバキア

⑥フランス

⑦ベルギー

⑧オランダ

⑨イギリス

⑩ノルウェー

⑪フィンランド

⑫デンマーク

⑬リヒテンシュタイン

⑭ギリシャ

⑮イタリア

⑯ルクセンブルグ

⑰ポルトガル

⑱ソルベニア

⑲マルタ

⑳アメリカ

㉑日本

2) 加盟希望国

①ブルガリア

②ブラジル

③中国

④ハンガリー

⑤インド

⑥イスラエル

⑦リトニア

⑧ポーランド

⑨ロシア

⑩サウス・アフリカ

⑪スペイン

⑫オーストラリア

⑬アラブ首長国連邦

首都圏大学生の歩行歩数量 ～ペドメーターの測定による分析～

○沼澤秀雄（立教大学）
石井允（立教大学）
鈴木秀雄（関東学院大学）
片桐義晴（早稲田大学大学院）

キーワード：生活内容形態、歩行歩数、運動量、ペドメーター、Leisurability(余暇能力)

I. はじめに

日常生活の中で人間の基本的な動きである「歩く」という動作は、現代人の生活様式の変化から近年減少している傾向にある。^{1, 2, 3)}

年代別に歩行歩数をみてみると、ペドメーターを用いた子供の測定において、1日あたり幼稚園児、小学生では7260～27600歩という値が報告されており、活動的な子供とそうでない子供では個人差が大きいことがわかる。^{4, 5)} 中学生、高校生では11060～19800歩であり、運動クラブに所属しているかどうかの影響が著しいようである。⁵⁾ 成人の歩行歩数に関しては30代でみると7828歩、40代で7738歩、50代で7574歩、60代で6188歩という統計値が示されており、男性は女性より10%程度歩数が多い、男女ともに加齢に伴って歩数の減少傾向がみられる。^{2, 3)} 大学生の歩行歩数に関しては、バス通学の学生が6670歩、近くに下宿している学生が4320歩、アルバイトをしている学生が12410歩という報告がある。⁵⁾ また、地方の学生で運動クラブに所属しているものについては8100～8560歩であったという報告もあるが⁷⁾ 最も一般的であると思われる自宅から首都圏の大学に通学している学生の歩行歩数の資料は少ない。

これらのことから、一部の私立高校に通学している生徒を除けば、高校までの段階では自宅から学校までが比較的近いために歩行歩数の多い少ないは学校生活のなかで身体を動かす活動をするか否かに影響されていると思われる。しかし、大学生になると自宅からの遠距離通学、アルバイト、サークル活動などで社会人なみに生活が多様化してくるために1日の歩行歩数もそれにとまって変動することが予想される。⁶⁾ 特に学生時代はほとんどの者が人生で最も健康なからだを保持している年代であるために、スポーツを志向している学生を除いて、健康に対する意識が低く、自ら身体を動かすようなライフスタイルを作れないことが考えられる。そこで本研究では、現在の首都圏大学に通学する学生の歩行歩数を測定することで望ましい運動量が確保されているかを検証し、社会に出て余暇時間の有効活用として、健康や体力の保持・増進を積極的に考えるときに必要となる資料提供を目的とした。

II. 方法

〔ペドメーターによる歩数の測定および分析〕

被検者は首都圏近郊の私立大学に所属する、社会人入学の学生および一般学生である。歩行歩数の計測にはペドメーター（カロリーカウンターセレクト2 スズケン社製）を用いた。この機器は上下方向の加速度に対してカウントする原理になっており、平常の生活内容における歩行歩数の測定について適する精度を有しているといえる。被検者には1週間の期間で自宅をでるときにペドメーターをベルトに装着し、その日の帰宅までの歩数を記録するよう指示した。また、1日の生活内容を併せて記入させた。

Ⅲ. 結果および考察

1. [大学での授業の出席のみによる歩行歩数の限定化]

学生生活において、身体活動をともなうようなアルバイトやサークル活動を行っていない学生を抽出し、月曜日から日曜日までの1週間の歩行歩数を集計した。図1は其中で典型的なパターンを示した25歳の社会人入学女子学生の測定値である。これを見ると明らかに体育実技の授業を行った日は授業のみの日と比較して約4000歩、別のキャンパスで開講される授業のために通学距離が延長した日が約2000歩、歩行歩数が多い結果となっている。このことは主体的に学生生活の中でクラブやサークル活動に参加したり、アルバイトをするなどの社会での活動がない場合には、大学生においても学校の授業形態がその人の運動量に直接影響を与えていることがわかる。

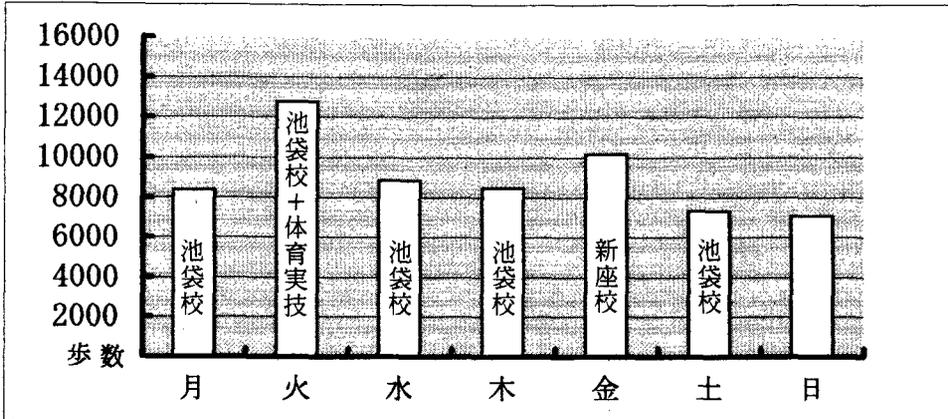


図1. 首都圏大学生の1週間の歩行歩数

2. [通学手段や生活内容の違いによる大学生の歩行歩数の増加]

測定の対象となった被検者は関東近辺から通学している者がほとんどで、1時間から1時間30分程度の時間をかけて通っているものも少なくない。表1は通学手段や生活内容による歩行歩数の違いを示している。本研究では、電車で通学している学生の1日の歩行歩数が平均で9050歩となり、先行研究(波多野)⁵⁾での地方大学男子学生を測定した値を約1000歩上回った。また、同じような条件で測定した大学周辺に下宿している学生やアルバイトをしている学生の測定値はほぼ同様な数値を示した。一方、様々な活動内容によって1日の歩行歩数に違いがみられ、散歩や買い物などは普段の運動量の不足を補うに足る比較的多い歩数を示している。表2は社会人入学男子学生の1週間の歩行歩数をみたもので、大学に足を運ばない日曜日を除けば1日平均が8000歩で、その中に占める通学時の割合は行き帰りで約75%に達している。これらのことから通学が運動量の確保に重要な役割を果たしている。

3. [1日に必要な運動量を満たすための歩行歩数の獲得]

厚生統計協会がまとめている『国民衛生の動向』によれば、⁷⁾ 日本人の日常生活は全体として身体活動量が低下しつつあり、食事によるエネルギー摂取量は相対的に過剰傾向を示している。このことが高血圧症、糖尿病、高脂血症等の成人病といわれる有病率を増加させ、国民の死因の約4分の1を占める虚血性心疾患と脳血管障害に結びついている。人間の基本的な動きである“歩く”という動作は運動不足を解消させ、これらの疾病の予防に役立っている。¹⁾ 厚生省は1日に必要な運動量の目安として、1日1時間、歩数にして1万歩を提唱している。その根拠になっているものは運動不足に起因する心臓病の多発する生活様式が、そうでない場合と比較して、300~900キロカロリーに相当する運動量が少ないことである。⁸⁾ 成人男子で少なくとも300キロカロリー一分を消費するための歩行は1秒間に2歩の速歩で消費カロリーが1時間約270キロカロリーであるので1日1時

表1. 通学手段や生活内容の違いによる大学生の1日の歩行歩数

	測定日数	平均値 (歩)	標準偏差 (歩)	最大値 (歩)	最小値 (歩)
<通学形態>					
電車で自宅から通学	140	9050.0	2413	15329	3521
下宿から通学	29	5118.4	2415	9898	1181
<生活内容形態>					
アルバイト	43	12611.6	3998	24956	3217
自宅で静養	32	3731.3	1790	7561	1007
大学で体育の授業	14	13788.0	3891	23449	8214
散歩	5	13346.6	3176	18207	10210
ダンス	3	11576.3	1316	13351	10205
買い物	3	15780.0	8065	26111	6430
家事	4	3007.5	1218	4635	1312
トレーニング	4	16421.5	4871	23421	9981
サイクリング	2	13921.5	1875	15796	12047
風邪 (病床)	3	225.0	99	347	105

歩数 (歩)	%	
0~ 999	+++	1.1
1000~ 1999	+++++++	2.5
2000~ 2999	+++++++	5.3
3000~ 3999	+++++++	5.0
4000~ 4999	+++++++	5.3
5000~ 5999	+++++++	6.0
6000~ 6999	+++++++	6.8
7000~ 7999	+++++++	10.7
8000~ 8999	+++++++	8.5
9000~ 9999	+++++++	12.1
10000~ 10999	+++++++	8.9
11000~ 11999	+++++++	5.0
12000~ 12999	+++++++	6.0
13000~ 13999	+++++++	6.0
14000~ 14999	+++++++	2.8
15000~ 15999	+++++++	2.5
16000~ 16999	++++	1.4
17000~ 17999	+++	1.1
18000~ 18999	+++	1.1
19000~ 19999	+	0.4
20000~ 20999	.	0.0
21000~ 21999	.	0.0
22000~ 22999	.	0.0
23000~ 23999	++	0.7
24000~ 24999	+	0.4
25000~	+	0.4

N = 281

1日に1万歩以上歩いた日の割合 36.7

1日に1万歩以上歩かなかった日の割合 63.3

図2. 首都圏大学生を対象にした1日の歩行歩数量の分布

表2. 1日の歩行歩数に占める通学時歩数の割合

	自宅-大学(歩)	%	学内(歩)	%	大学-自宅(歩)	%	1日の歩数(歩)
月曜日	3437	37.0	2214	23.8	3647	39.2	9298
火曜日	2698	37.2	1806	24.9	2753	37.9	7257
水曜日	2884	35.8	2191	27.2	2978	37.0	8053
木曜日	2723	35.8	1796	23.6	3079	40.5	7598
金曜日	3576	36.7	2272	23.3	3892	40.0	9740
土曜日	2554	35.6	1684	23.5	2936	40.9	7174
日曜日							1533
平均値	2978.7	36.4	1993.8	24.4	3214.2	39.3	8186.7

間、歩数で1万歩ということになる。1万歩を基準に検討すると本研究で対象になった被検者群は歩行歩数量の分布(図2)から63.3%の測定日について十分な運動量を確保していなかったということがいえる。

4. [運動量を確保するための生活プラン(生活内容形態)の創造]

大学生活の中でアカデミカルに知識や技術を身につけることは欠かせないことであるが、時間的に余裕があるこの時期こそ様々な活動に参加して、豊富な身体的経験を積むことも重要なことであると考えられる。活動的な生活様式を作り上げ、習慣化していくことは社会に出てからの健康の維持増進、さらに余暇活動の充実のために大切である。そのためには自らの日常生活の活動量を把握し、生活様式を見直すことが望ましい。本研究の対象になった学生は、自宅から通学している者やクラブあるいはサークル活動などで身体活動を行っている者は比較的運動量が確保されているものの、大学周辺に下宿し通学している者は歩行歩数が少なく、1日に必要な運動量を満たしていないことが明確になった。この様な学生は生活様式の中に何らかの身体運動をとまなう活動を積極的に見つけていくことが必要である。また、休日や授業が無い日の過ごし方についても、通学している日と比較して歩行歩数が少ない場合が多く、普段の運動量の不足を補えていないことが示された。社会人入学学生の場合では休日においても自宅での家事などの仕事があるため、余暇時間を休養にあてることが多く活動量が激減している。余暇時間の使い方のいゆる余暇能力(Leisurability)を高めることについては積極的休養(軽い運動を取り入れる等)を含めて今後の検討が必要であろう。

IV. まとめ

- 1、大学の体育実技の授業が学生の運動量を増加させている。
- 2、通学が運動量の確保に重要な役割を果たしている。
- 3、大学周辺に下宿している者は運動量が少なくなりがちであることを示している。
- 4、運動量確保の観点から身体的余暇活動(Physical Recreation)を考えていく必要がある。

《引用文献》

- 1) 青木純一郎「歩と走の比較文化～ウォーキングはなぜモテる～ 生理学的見地から」『みんなのスポーツ』1996、Vol.18、No.8、PP18～19
- 2) 厚生省保健医療局健康増進栄養課「平成4年国民栄養調査結果の概要」『厚生指標』1994、Vol.41、No.6、PP44～50
- 3) 厚生統計協会 第2章健康増進、2.国民栄養の状況。(厚生指標臨時増刊)『国民衛生の動向』1995、Vol.42、No.9、PP95～98
- 4) 栗田憲昭「運動量をめぐる現場の問題点」『体育の科学』1979、Vol.29、PP61～65
- 5) 波多野義郎「ヒトは1日何歩あるか」『体育の科学』1979、Vol.29、PP28～31
- 6) 小野三嗣監修『ウォーキングエクササイズ』1995、大泉書店、PP112～115
- 7) 厚生統計協会 第2章健康増進、1.健康増進対策。(厚生指標臨時増刊)『国民衛生の動向』1991、Vol.38、No.9、PP88～92
- 8) 波多野義郎「子どもの至適運動量？」に答えて『体育の科学』1979、Vol.29、PP66～68

スポーツ系専門学校生における人生観・価値観について

○廣田 治久 (余暇問題研究所) 下田 由香 (スポーツ・エデュケーション・アカデミー)

キーワード：人生観 価値観 スポーツ系専門学校

I 緒言

現代社会のさまざまな状況下の中にあつて、今後の安定・発展のためには若者に対する期待は少なくないところである。そのことは、当然レジャー・レクリエーションの分野においても、その新たな発展や成熟、国際化など多方面においても、次世代を担う若者に対して同様の期待が寄せられている。しかるに、次世代の担い手である若者がどのような人生観・価値観をもっているのか、その実情を把握しておくことは重要なことに考えられ、そのために、全国規模の青少年を対象とした意識調査などが従来から行われてきた。

しかしながら、従来にみられる調査は、ごく一般青少年を対象としたものが多く、特定の立場にある青少年の人生観・価値観などの状況については、それらの結果からの推定に頼らざるを得ない。

そこで、本研究では、スポーツ系S専門学校生を対象に、全国調査と比較しながら、その特性を把握しようとした。なぜならば、スポーツ系専門学校生は今後のレジャー・レクリエーションでの活躍が期待され、その特性を把握することは大いに意義のあるものと考えられるからである。

II 本研究の目的

本研究では、スポーツ系専門学校に通う学生を対象に

①意欲②自信③熱中④生き方⑤生き甲斐の5項目について

1)全国調査との比較検討

2)性別間の比較検討

を行い、スポーツ系専門学校生の人生観・価値観の特徴、実状を明らかにすることを目的とする。

III 研究方法

- 1. 調査対象： スポーツ系S専門学校生 200名 (男子：114名 女子：86名)
- 2. 調査期日： 1996年 4月19日
- 3. 調査方法： 質問紙による集合調査法 回収率：100%
- 4. 質問項目： 5項目65問

Q1	意欲	「これだけは若いうちにやっておきたいこと」	(17問)
Q2	自信	「自信のある領域」	(12問)
Q3	熱中	「学校生活での熱中事」	(9問)
Q4	生き方	「生き方や考え方」	(18問)
Q5	生き甲斐	「生き甲斐を感じる時」	(9問)

各質問項目は、「青少年と活力—青少年の活力に関する研究調査報告—」

総務庁青少年対策本部編 昭和60年8月30日発行

「働くことの意識」調査報告書

(財)社会経済生産性本部 (社)日本経済青年協議会

平成6年6月30日発行

から、本調査に合わせた修正を加えて用いた。

5. 回答形式： Q1からQ4については複数回答、Q5については単数回答で回答を求めた。

6. 分析方法： 単純集計による比較

IV 結果

S校で行った調査結果に全国調査を踏まえながら、その概要、および考察を加える。

① —これだけは若いうちにやっておきたいこと—

「技術や資格を身につける」が81.0%と最も多く、ついで「趣味や楽しいことを存分にやる」(72.0%)「人間関係を豊かにする」(68.5%)「友人を得る」(63.5%)の順で上位を占めている。総務庁の行った全国調査を見ると「友人を得る」「人間関係を豊かにする」「技術や資格を身につける」「趣味や楽しいことを存分にやる」が上位を占めている。しかし、項目は同じもののその順序に違いが見られた。そのほかには、S校生では全国に比べて支持する割合の多いものに「いろいろな経験をする」「お金をもうける」「冒険する」「外国へ行く」「根性を身につける」「恋愛をする」があげられる。

男女間を比べると、その割合がわずかながら女性が男性を上回っている項目が全体に多い。逆に男性が大きく女性を上回っている項目は、「お金をもうける」(男性：57.0% 女性：41.9%)「体力をつくる」(男性：39.5% 女性：24.4%)であった。

② —自信のある領域—

S校生において自分の自信ある領域として最も多く支持されたのは、「その気になれば何でも人並みにできる」(51.0%)であった。「身近に悩みや心配事はない」(45.0%)「苦しいことに耐える力はある」(44.0%)「高校時代スポーツは上手」(42.0%)「交友関係を広げる」(41.1%)であった。全国と比べると「健康や体力には自信がある」「その気になれば」「交友関係」「身近に悩み」「苦しいこと」と上位5項目に変わりはないものの、その順位の点で違いが見られた。全国とS校で最も支持に差のあったものは「健康体力」で、全国58.8%、S校37.5%であった。

男女間では、男性が「苦しいこと」「高校スポーツ」「その気になれば」の順で、女性が「その気になれば」「身近に悩み」「交友関係」の順であった。

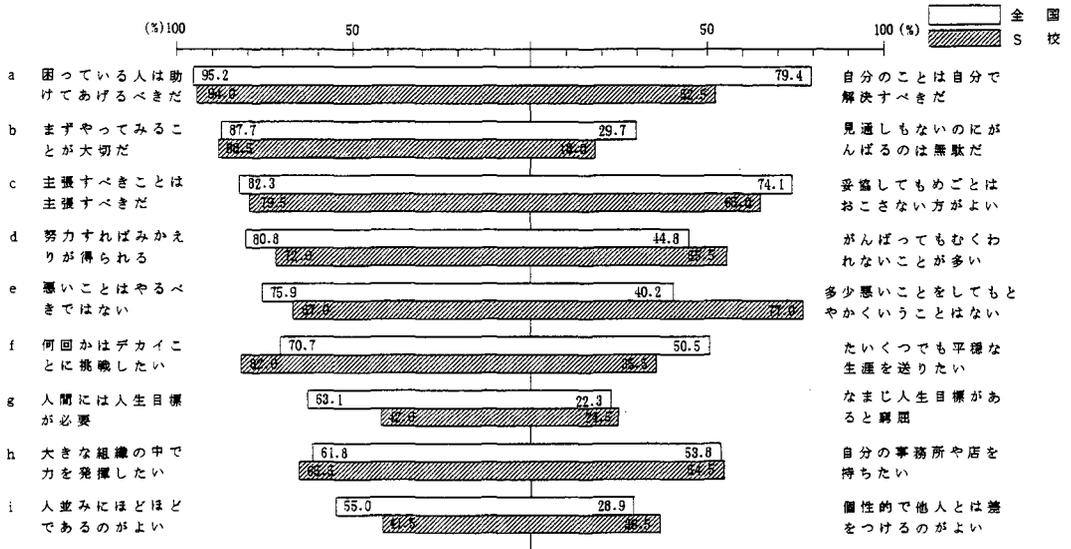
③ —学校での熱中事—

学校での熱中事については、「友人や先輩とのつきあい」(61.5%)「日頃の授業や講義」(46.0%)「就職のための勉強」(45.5%)「アルバイト」(44.0%)の順で占めている。男女の比較では、上位の項目は変わらないが、その順位の違いが見られた。各項目での割合は、男性に比べて女性に高い支持が得られている。

全国調査と比較すると、S校生で上位にあった「授業や講義」「就職のための勉強」「アルバイト」が全国ではそれぞれ24.5%、19.6%、11.9%と低い。逆に全国では、「クラブ・サークル」(37.2%)が2番目であったが、S校では、14.5%の低い割合になっている。

④ 一生き方や考え方一

18項目の通常相反すると考えられる項目を対にし、9つの組み合わせをつくった。



<図-1> ④生き方・考え方

- a 「困っている人は助けてあげるべきだ」は、S校生、全国ともに高い割合を占めているのに比べて、「自分のことは自分で解決すべきだ」は全国79.4%に対して、S校生52.5%と低い。
- b S校生、全国共に「まずやってみることが大切だ」の積極的な姿勢が高く、逆に「見通しもないのにがんばるのは無駄だ」の消極的意見は少ない。とくに、S校生にその傾向が大きい。男女間では、消極的意見に対して女性の指示が高い。
- c 「主張すべきことは主張すべきだ」「妥協してもめごとはおこさない方がよい」S校生、全国ともにその割合は高いが、男女間では、「主張すべき」については女性の支持が高く、「妥協して」については男性が高い。
- d 「努力すれば見返りが得られる」はS校生、全国とも7割を越える支持があるものの、「がんばってもむくわれないことが多い」については、5割程度に低い。男女間では、「努力すれば」に対して女性に8割以上の支持があり、「がんばっても」については、男性に高い割合である。
- e 「悪いことはやるべきではない」はS校生、全国ともに高いが、「多少の悪いことをしてもとやかくいうことはない」ではS校生が全国を大きく上回っている（S校生：77.0% 40.2%）。また、女性は「悪いことは」に対しても、男性よりも高い支持を示している。
- f 「何回かはデカイことに挑戦したい」は7割以上の支持があり、特にS校生に高い。「退屈でも平穏な生涯を送りたい」は、全国が50.6%に対して、S校生は35.5%と低い。男女間では「何回かは」が同程度に対して、「たいくつでも」は男性3割、女性4割と女性に高い支持が見られた。

- g 「人間には人生目標が必要だ」は全国が63.1%に対して、S校生は42.0%と低い。
「なまじ人生に目標があると窮屈」は両者ともに差がなく、2割程度と低い支持であった。男女間では両項目ともに、男性の支持が高い。
- h 「大きな組織の中で力を発揮したい」、「自分の事務所や店を持ちたい」の2つの項目に対して、S校生、全国ともあまり大きな差はみられなかった。但し、男女間に「自分の事務所」に関して男性68.4%、女性36.0%の大きな差が見られた。
- i 「人並みに程々であるのがよい」は、S校生41.5%と全国に比べて低く、「個性的で他人とは差をつけるのがよい」は、S校生36.5%と全国に比べて高い割合であった。特にS校男子にはその傾向が高い。

⑤ 一生き甲斐を感じるとき一

どんなときに1番生き甲斐を感じるかの問いに対して、「スポーツや趣味に打ち込んでいるとき」(26.0%)「友人や仲間とつきあっているとき」(21.5%)「親しい異性といるとき」(10.0%)の順であるが、全国では、「友人や仲間」(38.7%)「スポーツや趣味」(24.5%)「親しい異性」(22.6%)の順になっている。特に、「友人や仲間」については顕著な差が見られた。男女間では、女子の順序が全国のものと同様の順序であった。

V まとめ

全国調査との比較：

- 1) 技術や資格、趣味の分野に対する意欲が高い。
- 2) 全国と自信を持っている項目に大きな差はないが、健康体力面に対して自信がやや低い。
- 3) 学校では、全国と同様に交友関係に熱心であるが、その他の方面にも高い傾向が伺える。
- 4) 自助努力が全国に比べて低く、多少のことなら悪いことともといった考え方がやや高い。
平穏よりも挑戦していきたい考え方、個性的であることを望む傾向が高いが、その反面具体的な目標を決めかねている。
- 5) 全国に比較して、趣味やスポーツに打ち込んでいるときに生きがいを感じている傾向が高い。

性別間の比較：

- 1) 男女ともに専門性や趣味・楽しみ、人間関係に対する意欲の高さは変わらなかった。
女性は友人や経験を積みたいという傾向が男性に比べ高いが、男性はより現実的な「お金」「体力」にたいする意欲が女性に比べ高い傾向が見られる。
- 2) 男性は忍耐力や運動能力に対する自信が比較的高く、女性は経済面の安定や対外的な交友に自信を持つ傾向が伺える。
- 3) 全体として、男性に比べ女性の方が学校に対しての熱心さが高いようである。
- 4) 女性は、努力に対して正当な評価を求める傾向が高い。それに比べて男性は、その逆の傾向がやや見える。また、そのためか、女性に比べ自分の事務所や店を持つといった自立を考える傾向が高い。

以上のようなことから、スポーツ系専門学校生の人生観・価値観の一端を伺うことができた。しかし、より詳しくその実状を探っていくためには、データをもとに全国との比較検証の必要性を感じざるを得ない。

冬季キャンプ経験が参加学生の感性に及ぼす効果

針ヶ谷 雅子 (明治薬科大学)

キーワード：感性，冬季キャンプ

1. 研究の背景・目的

「感性」とは、広義には「価値あるものに気付く感覚」ということができるが、単なる受け身の能力ではなく主体的な働きを持つと言われている（片岡，1990）。感性が豊かであれば、心が敏感に活発に働くので、自分が生きていることを実感し、意欲や生き生きとした態度が生まれるであろう。また、自己実現の過程においても、感性は不可欠なものである（上田，1969）。感性は人間の根本にあり、人間はその働きにより人間の全体性を発揮し調和を保ちながら、自己を豊かにし、人間関係を形成し、価値づけ・意味づけをしているのである。故に、感性を解放し育てていくことは、教育において原点となることであるといえよう。キャンプ活動においては、「自然」、「他者」、「自己」などとの関わりを、直接体験によって得ることができる。その様なキャンプ活動の特色から、キャンプ経験によって、特に「自然」に対する感性や「生命」、「人間」に対する感性を養うことができると考えられる。

冬の自然はさまざまな観点で夏季と異なり、参加者に新しい体験・気づきをもたらすため、感性を育む機会として、多くの可能性があると考えられる。夏季の長期キャンプ経験が、参加児童・生徒の感性を向上させるという結果を示した研究はあるが、冬季キャンプについての研究は非常に少ない。

本研究は、冬季キャンプ経験がキャンプ参加者の感性に与える効果について検討することを目的とした。

2. 方法

調査は、平成8年2月および3月に福島県楡原湖のキャンプ場で実施された、4泊5日の「武蔵丘短期大学冬季野外活動実習」に参加した大学1年生79名（1期39名，2期40名）に対し、キャンプ直前、キャンプ直後、キャンプ終了2ヶ月後の計3回実施した。

感性の測定には、感性に関して記述された文献およびキャンプ経験のある者の自由記述から項目を抽出し、独自に作成した26項目からなる感性測定尺度を用いた。また、この尺度は主因子法による因子分析により、4因子を得ている。事象の背景にある見えないエネルギーやつながりを見る感性に関する「事象の背景・つながり」因子、自然の美しさなどに対する感性に関する「自然」因子、自分、その他の生命に対する感性に関する「生命」因子、人間の感情などに対する感性に関する「人間」因子の4つである。得点は4段階評定で算出した。そして、感性の変化を検討するために、3水準（キャンプ直前、キャンプ直後、キャンプ終了2ヶ月後）の1元配置分散分析および多重比較を行った。

3. キャンプの概要

キャンプ参加者は、生活班として7～8名の班に分けられたが、活動はこの班を解体して行われた。食事は生活班が交代で作り、全員で会食した。宿泊は基本的にキャビンを利用したが、希望者は雪洞やテントによる雪中泊を行った。主なプログラムは、XCスキーを利用したツアー、自然観察、リュージュ遊び、雪洞・イグルー作り、スノーシアター（雪

の劇場作りとそれを利用したナイトパーティー), マインドクロッキー (雪中で1人の時間を過ごす) などであった。

4. 結果と考察

感性全体およびすべての因子において, キャンプ直後に1%水準で有意な向上が見られた。また, 感性全体および「事象の背景・つながり」因子, 「自然」因子, 「生命」因子においては, キャンプ終了2ヶ月後にもその効果が持続された。(表1, 図1)

冬季キャンプにおいては, さまざまな事象に対して直接触れることが多いため, 五感を働かせることにより感覚が研ぎ澄まされ, 反応が敏感になった結果, 感性が高まったと考えられる。特に, 冬季特有の雄大な雪山や広々とした雪野原, また, 雪上の足跡や食痕などの動物が存在する形跡や樹木の冬芽などに触れたことが, 自然の美しさや偉大さ, 生命の強さなどに気付くきっかけになったと推測される。また, 直接体験による経験は, 間接体験による経験と比較してより強く印象に残るといわれているが, 冬季キャンプにおける活動は, そのほとんどが直接体験であるため, キャンプ終了2ヶ月後まで安定した感覚として心に残ったと考えられる。

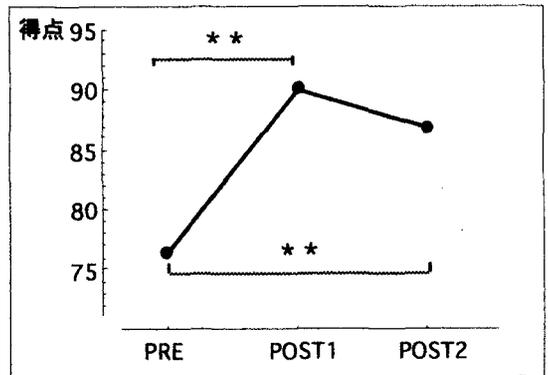


図1 感性得点の変化

表1 感性および各因子の変化

調査時期	PRE		POST1		POST2		分散分析 PREPOST	多重比較		
	M	SD	M	SD	M	SD		1	2	3
感性	76.48	11.67	90.15	8.87	86.78	10.01	***	**	**	n.s.
事象の背景	30.25	6.3	37.75	4.79	36.23	5.16	***	**	**	n.s.
自然	13.97	2.08	14.94	1.45	14.96	1.43	***	**	**	n.s.
人間	11.99	1.95	14.37	1.39	13.64	1.66	***	**	**	*
生命	13.42	2.44	15.59	2.24	14.93	2.55	***	**	**	n.s.

※1=PRE:POST1 2=PRE:POST2 3=POST1:POST2 *= $p<.05$ **= $p<.01$ ***= $p<.001$

5. 結論

調査の結果, 以下のことが明らかになった。

- 1) 冬季キャンプに参加した大学生の感性は, キャンプ直後に向上し, キャンプ終了2ヶ月後にもその効果が持続された。
- 2) 因子ごとにみても, すべての因子においてキャンプ直後に向上し, 「事象の背景・つながり」因子, 「自然」因子, 「生命」因子ではキャンプ終了2ヶ月後までその効果が維持された。

本研究では, 冬季キャンプ経験により参加した大学生の「感性」が向上することが明らかになった。「感性」は, 人間の精神的な健康を支える根本的な要素であり, 生涯にわたり求めていくものである。感性を豊かにし, さらに価値観を育てていくためには, 実感となる体験が必要であり, キャンプはその体験を提供する重要な機会である。プログラムや参加者の年齢, 性別の違いを考慮した検討が今後の課題となった。

ネイチャースキー教室の参加者について — 野外活動経験と参加動機を中心に —

○野口 和行（慶應義塾大学）

桃井 泰彦（ネイチャースキー研究所）

キーワード：ネイチャースキー、野外活動経験、参加動機

1. はじめに

ネイチャースキーは、1994年に桃井によって提唱された新しい冬の自然活動である。ネイチャースキーは歩きやすいスキーで気ままにのんびりと雪の森を歩いて自然を楽しむという活動である。従って、タイムや距離、技術を競うものではなく、雪の森を満喫しながら自然を感じ、感動するという人間の情動の部分に訴えかけることによって環境に対する具体的な行動の変化を生み出していくということを目的としている。

ネイチャースキーで使用する用具は、雪の森の中を自由に歩き回るために新たに開発されたものである。従来のクロスカントリースキーよりも幅広く、身長より10～20cm短いスキー板、軽くて歩きやすい軽登山靴のような靴、楽にかかとの上がる締具を使用するため、森の中でも取り回しが良く、楽に歩くことができるように作られている。

日本では、高度経済成長による生活の急速な変化による文明病の問題や育ち方の変化による様々な弊害が問題となっている。これは生活が急速に「自然離れ」を起こしたために本来自然と同じメカニズムで動いている人間の身体が歪みを起こしているためと考えられる。また、近年大きな問題となっている環境破壊の観点からも、今後我々がライフスタイルの見直しをする必要があるといわれている。そこで新しい行動を起こすための動機付けとして、ネイチャースキーの目的である自然を感じ、感動するという人間の情動の部分に訴えかけていくことは大変重要なことであると考えられる。

そこで、本研究はネイチャースキー教室参加者を対象に現在までの野外活動経験、参加動機、受講後の感想に関する質問紙調査を行い参加者の特性や参加動機を明らかにすることによって、ネイチャースキー普及のためのフィードバック情報を得ることを目的とする。

2. 研究の方法

本研究では、1996年2月から5月にかけて実施された（財）森林文化協会、国立妙高少年自然の家、及びネイチャースキー研究所で主催されたネイチャースキー教室の参加者252名を対象に教室終了後直接配布による質問紙調査を実施した。

質問内容は、参加者の基本的属性（5項目）、他の野外活動経験（19項目）、自由記述による参加動機、自由記述による受講後の感想であった。

参加者の基本的属性及び野外活動経験については単純集計及びクロス集計を行った。自由記述による参加動機及び受講後の感想については内容による整理・分類を試みた。

3. 結果の概要

1) 参加者の属性について

参加者の性別は、男性91名（36.1%）、女性161名（63.9%）であった。年齢別に見ると、50代女性52名（20.6%）、60代女性35名（13.9%）、40代女性32名（12.7%）、60代男性32名（12.7%）となり、女性、特に40代以上の中高年の女性の参加が多くなっている。

参加者の職業別に見ると、会社員65名（25.8%）、自営業24名（9.5%）、教員25名（10.0%）、主婦69名（27.4%）、学生（7.5%）、定年退職32名（12.7%）であった。

参加者の住所別に見ると上位5位は東京都111名（44.0%）、神奈川県46名（18.3%）埼玉県22名（8.7%）、千葉県22名（8.7%）、新潟県13名（5.2%）であった。

以上のことから、参加者は、関東在住の子育てが終わった中高年の女性、定年後の男性が中心となっていることが見受けられる。

2) 参加者の野外活動経験について

参加者が今までに行ったことのある他の野外活動について見ると、半数以上が経験したことのある種目として、ハイキング208名（82.5%）、日帰り登山200名（79.4%）、ゲレンデスキー189名（75.0%）、小屋泊登山161名（63.9%）、キャンプ（オートキャンプを含む）135名（53.6%）があった。経験した回数別に見ると、経験回数1回～5回の種目としては、小屋泊登山92名（36.1%）、ハイキング90名（35.7%）、ゲレンデスキー88名（35.0%）があり、経験回数11回以上の種目としては、ハイキング84名（33.3%）ゲレンデスキー77名（30.6%）、日帰り登山76名（30.2%）があった。

半数以上が経験したことのあるハイキング、日帰り登山、ゲレンデスキー、小屋泊登山について年齢別にクロス集計を行うと、40代から60代では、ハイキング、日帰り登山、小屋泊登山において、各年代の70%以上が経験していた。キャンプでは20代及び30代の70%以上が、ゲレンデスキーでは20代及び30代の90%以上が経験していた。

3) 参加動機について

参加動機に関する自由記述から369項目を抽出し、内容に従って整理・分類した。1番多かった項目は自然に関する項目（118）であった。さらに細かく分類すると、「木や草の名、アニマルトラッキングなどを知るために」等の自然観察に関する項目（33）、「リフトから見る森や林に入っていきたくて」等の森に関する項目（34）、「身近に自然と接したい」等の自然とのふれあいに関する項目（30）、「雪景色を見てみたかった」等の雪に関する項目（21）があった。

次に多かった項目はスキーに関する項目（76）であった。さらに細かく分類すると、「ゲレンデスキーにあきたらないものを持っていた」等のアルペンスキーへの疑問に関する項目（18）、「普通のスキーよりはきやすいかと思って」等の用具への興味に関する項目（13）「クロスカントリースキーとの違いを体験したかった」等のクロスカントリー・テレマークスキーとの比較に関する項目（11）、「クロスカントリースキーに以前から興味があったので」等の歩くスキーへの興味に関する項目（10）等があった。

以下、「普段行けないような場所に入っていくことができる」等の歩くことへの興味に関する項目（63）、「自分のペースでできる」等のゆとり、自由に関する項目（32）、「普段なかなかできないことなので」等の新たな経験に関する項目（22）、「運動不足の解消」等の運動・健康に関する項目（17）、「年齢に関係なく楽しめる」等の年齢に関する項目（11）、「新しい自然の楽しみ方を紹介したいと思ったので」等の新しいプログラムとしての期待に関する項目（10）等があった。

また、受講後の感想としては、「ゆっくりと自然にとけ込めること」、「今まで見てごしていた小さなものにまで目を向けることができた」、「人間も自然の一部だということを実感した」等があった。

高齢者の余暇活動に関する一考察
 -いなみ野学園アンケート調査をもとに-

○片岡 麻里 小泉 勇治郎 山下 陽一郎 (神戸YMCA学院専門学校福祉研究所)

1. はじめに

労働時間の短縮が進み、余暇時間が増大し、「いかに余暇時間を過ごすか」ということが「生活の質向上」のために重要な位置を占めているということは、現在では周知の事実である。また、人生80年の時代を迎えることによって、人生における余暇時間は、増大したといえる。そこで、高齢者の余暇活動の重要性や、必要性について、様々な研究がなされ、高齢者にとって、余暇活動が必要かつ、「生活の質向上」のために欠くことのできないものであることは、確認されている。

そこで今回は、行政が、高齢者を対象に開設しているシルバーカレッジの一つである、兵庫県加古川市の兵庫県いなみ野学園で行われた、「ひょうご長寿のまつり」において、高齢者の余暇活動の実態を調査するために、アンケート調査を行った。本調査では、余暇活動を、スポーツ、文化、教養、ボランティア活動に区分し、その活動内容を質問すると同時に、旅行についての質問を行った。

2. 調査方法

1995年11月に行われた、兵庫県いなみ野学園の「ひょうご長寿のまつり」に参加していた人を対象に、聞き取り式アンケート調査を行った。このイベントは、一種の学園祭のようなものであり、いなみ野学園の周辺の住民も参加しているものである。

調査項目は次の通りである

属性	年齢	a.40歳代	b.50歳代	c.60歳代	d.70歳代	e.80歳代	f.90歳以上
	性別	a.女性	b.男性				
	就労	a.仕事をしている		b.仕事をしていない			
	世帯構成	a.一人	b.夫婦	c.親子	d.三世代	e.その他	
	住居	a.一戸建て	b.マンション	c.その他			
	健康状態	a.大変よい	b.まあまあ良い	c.普通	d.あまり良くない		
		e.全く良くない					
	精神状態	a.大変よい	b.まあまあ良い	c.普通	d.あまり良くない		
		e.全く良くない					
余暇活動	a.スポーツ活動	(記述)	→スポーツを始めた理由				
	b.文化活動	(記述)	a.体力維持・向上				
	c.教養活動	(記述)	b.医師の指導により				
	d.ボランティア活動	(記述)	c.スポーツが好きだから				
	e.その他	(記述)	d.ストレス解消				
余暇活動をしていて良かったこと	(記述)						
旅行について	一年以内に		a.旅行をした	b.旅行をしていない			
	国内旅行	行き先	日数	費用	(記述)		
	海外旅行	行き先	日数	費用	(記述)		

3. 結果と考察

集団の特性

	女 性		男 性		合 計
	働いて いる	働いて いない	働いて いる	働いて いない	
40歳代	5	6	12	1	24
50歳代	2	7	7	1	17
60歳代	3	29	9	18	59
70歳代	1	23	4	24	52
80歳代	0	2	1	6	9
90歳代	0	0	0	1	1
合 計	11	67	33	51	162

余暇活動状況

スポーツについて

	女 性		男 性		種目（複数回答）	
	回答 あり	回答 なし	回答 あり	回答 なし		
40歳代	6	5	3	10	ニュースポーツ	37
50歳代	5	4	3	5	グランドゴルフ	14
60歳代	11	21	16	11	ゲートボール	16
70歳代	11	13	13	15	ベタンク	4
80歳代	1	1	3	4	その他	3
90歳代	0	0	0	1	ジョギング、ウォーキング	14
合 計	34	44	38	46	体操	6
					ダンス	7
					水泳	4
					その他	27

文化、教養活動について

	女 性		男 性		内容（複数回答）
	回答 あり	回答 なし	回答 あり	回答 なし	
40歳代	3	8	1	12	絵画 21（水墨画など）
50歳代	1	8	1	7	学校 19（いなみ野学園など）
60歳代	15	17	14	13	音楽活動 18（コーラスなど）
70歳代	7	17	12	16	書道 13
80歳代	1	1	3	4	工芸 12（陶芸など）
90歳代	0	0	0	1	手芸 7
合 計	27	51	31	53	園芸 7
					俳句、短歌、川柳 4
					お茶、お花 4
					読書 3 写真 3 その他 7

文化活動及び、教養活動については、その分類が曖昧であったため、あわせて集計を行った。文化、教養活動及びスポーツ活動をあわせて、なんらかの活動を行っているものは、全体の80%であった。年齢別に見た参加状況は、文化、教養活動については、60歳代以上の参加の割合が増えている。活動内容については、スポーツ活動では、ニュースポーツを行っているものが多く、ついでジョギング、ウォーキングが多かった。これは、特別な技術や、過去の経験を必要としない種目であるためと考えられる。また、スポーツを始めた理由は、「体力維持・向上」50件、「スポーツが好きだから」21件、「医師の指導により」3件、「ストレス解消」2件、であった。文化、教養活動については、活動内容は、絵画、書道など、いなみ野学園での講座内容とほぼ同じであった。このことから、いなみ野学園へ通っている高齢者が、そこでの講座を受講し、そのまま余暇活動として行うようになったと考えられる。

余暇活動をしていて良かったことについて（複数回答）

人間関係 友達ができたなど	43	楽しい とにかく楽しいなど	9
健康、体力 体力向上など	25	生き甲斐	5
活動そのものの効果 技術の向上など	13	その他	5
精神効果 ストレス解消など	11		

「余暇活動をしていて良かった点を書いてください。」という質問に対し、おおむね上のような回答が得られた。複数回答のものもあるため、回答数の多少による判断は正確ではないが、100人の回答者中の約半数が「人間関係」についてあげている。また、スポーツを始めた理由の65%が体力の維持向上であるので、「健康、体力」に関することは、「活動そのものの効果」といえるかもしれない。しかし、活動内容が、必ずしも、スポーツ活動ではなかったので、独立した項目をもうけた。「精神効果」を「健康、体力」に含むと考えれば、数の上では、余暇活動の効果は、「人間関係」と「体力、健康、精神」が大半を占める。この結果から、余暇活動の効果は、活動内容そのものより、人間関係や体力など、「生活の質向上」に密接な関係があると考えられる。また、今回のアンケートでの余暇活動内容と、余暇活動による効果とをあわせて考えると、活動そのものは個人活動であっても、活動を通してのつながりが重視されているようである。このことより、現在の高齢者にとって、いなみ野学園のような、余暇活動のきっかけとなるような活動と、活動の場の提供は、「生活の質向上」に対して、有効に働きかけているといえる。

旅行について

国内旅行行き先（複数回答）

	女 性		男 性		海 外 旅 行
	旅行 した	してい ない	旅行 した	してい ない	
40歳代	9	2	9	4	0
50歳代	7	2	6	2	1
60歳代	28	4	25	2	12
70歳代	19	5	26	2	8
80歳代	2	0	7	0	1
90歳代	0	0	1	0	0
合 計	65	13	74	10	22

温泉	29
遠方	25 (沖縄、北海道など)
近郊	25
山陰	21
九州	16
四国	7
その他	

平成8年4月の『レジャー白書 '96』によると、平成7年の余暇活動の参加希望率は、男女ともに国内観光旅行であった。また、平成7年の余暇活動参加人口では、国内観光旅行が2位となっている。今回の調査でも、「この一年間に旅行をしましたか」という質問に対して約85%の人が「旅行をした」と答えた。旅行への参加の割合は、6、70歳代で高くなっている。また、旅行先については、温泉と答えた人がもっとも多く、それ以外でも、地名から判断して温泉地であると判断するものを含めると、50件にも上る。旅行日数については、「2日」がもっとも多く52件で、ついで「3日」が27件であった。費用についてはばらつきがあるものの、概ね1～5万円程度であった。この結果は、いわゆる老人会などの1泊旅行への参加の結果であると考えられる。

旅行は、非日常的な体験ができるという点でリフレッシュ効果のある余暇活動であるため、高齢者のみならず、多くの年代層で余暇活動の中心となる活動であり、参加希望率の高い活動である。中でも海外旅行は、潜在需要（参加希望率から現在の参加率を引いたもの）の高い活動である。これは、どの年代層にも共通している。今回の調査でも、国内旅行参加者数に比較すると、海外旅行の参加者数は非常に低い。このことから、今後海外旅行への参加を希望する高齢者層が増加することが考えられる。そうなったときに、高齢者が安全に海外旅行するためにどのようなことが必要となってくるのかを考える必要がある。

4. まとめ

今回は、高齢者を対象とした兵庫県いなみ野学園の学園祭で、余暇活動に関するアンケート調査を行った。調査の結果、いなみ野学園での活動は、高齢者にとって余暇活動を実際に行うための重要なきっかけとなっていると考えられる。また、余暇活動は、人間関係に対して良い影響を与えるなど、「生活の質向上」にとって重要な意味を持っていることが、本調査でも明らかになった。

旅行に関しては、60歳代以上の約90%が一年以内に旅行をしたと答えており、国内旅行に関しては、そのほぼ全員が体験していることから、今後も旅行に対する需要は確実に増加すると考えられる。

WLRAとその世界会議の動向について

○山崎 律子（余暇問題研究所） 高橋 伸（国際基督教大学）
川向 妙子（東海大学） 栗原 邦秋（余暇問題研究所）

キーワード： レジャー、レクリエーション、WLRA、WLRA世界会議
はじめに

日本の国際化が叫ばれてから、久しい年月が過ぎようとしている。最近では情報網の急激な発達により、政治・経済・社会・科学・研究などの分野において、その国際化が進んできた。しかしながら、レジャー・レクリエーションあるいは観光においての実践的側面での国際化は実現しているが、それらの研究分野における国際交流は、必ずしも進んでいないのが現状である。

本報告は、上記の問題をふまえ、レジャー・レクリエーションに関する国際組織としての世界レジャー・レクリエーション協会（World Leisure and Recreation Association—以下WLRAと略す—）に着目し、その概要と世界会議の動向を、参加の経験を基にして紹介しようとするものである。したがって、本報告の具体的目的は、①WLRA設立の経緯およびその性格の把握、②世界会議（第1回より第4回まで）の内容分析、および③それらの問題点と今後の課題への対応などである。

WLRA設立の経緯

International Recreation Association—IRA—（WLRAの前身）が正式に米国ニューヨーク州法に基づき、非営利団体として発足したのは、1956年10月3日である。理事として各国から35名が就任した。会長は英国パベンハム卿（Lord Luke of Pavenham）、総主事にはトーマス・リバーズ（Dr. Thomas E. Rivers）になった。日本からは、当時の日本レクリエーション協会会長加賀山之雄が理事および副会長として就任した。

このIRA設立に至ったのは、1952年、当時全米レクリエーション協会（NRA）の副専務理事であったリバーズが、熊本県で実施された全国レクリエーション大会に、NRAの代表として出席したことが始まりといわれている。

その帰途リバーズは、13か国を訪問し、各国の指導者とレクリエーションの考え方や将来の協力体制について話し合った。その結果、1953年には、NRAの一部門として、国際レクリエーション・サービス部が設置され、リバーズがその担当となった。その後も彼は各国を訪問し、レクリエーション分野における国際組織設立の必要性、交換プログラム、各国の中心組織設立の必要性などが確認された。

これらの情報から、1956年第38回全米レクリエーション大会開催時に並行して、国際レクリエーション会議開催がNRAによって提唱された。国際援助の一環として米国国務省も協力した。期日は1956年9月30日から10月5日、場所は米国フィラデルフィアのホテル・ベルビュー・ストラトフォードであった。会議のテーマは、「Creative Use of Leisure Time」であり、33か国から2,000人を越える参加者があった。日本からも西田泰介と松原五一が、日本レクリエーション協会から派遣された。

このように、IRAの設立は、米国の第2次世界大戦後の国際援助とNRAの強力な働き掛け、およびリバーズの献身的努力によって達成されたことが明らかである。

IRA設立後の主な活動

IRA設立後のその主な活動は次のとおりである。

- 1960年代・・・各国への指導者の派遣、レクリエーション・プログラムの紹介と推進、各国のレクリエーション協会設立のためのノウハウの提供と援助、ベトナム難民サービス、世界レクリエーション会議（大阪市）を日本レクリエーション協会と共催（1964）、国連 UNESCO でIRA を NGO 団体に認可
- 1970年代・・・レジャー憲章の制定、地域協会設立推進（ヨーロッパ・レジャー・レクリエーション協会設立-ELRA）、専門委員会設立（INTERCALL-INTERCALIX）、専門委員会中心の国際会議開催、Robert O. Wilder 会長就任（1972）、国際レクリエーション協会（IRA）の名称が世界レジャー・レクリエーション協会（WLRA）と変更（1973）、国際余暇研究会議（横浜市）開催に協力（1978）、Thomas E. Rivers 逝去（85歳-1977）、Tom and Ruth RIVERS 奨学金プログラム設定
- 1980年代・・・WLRA Bulletin が WLRA Journal に変更、事務総長 William Cunningham から Nelson Melendes に交替、ラテンアメリカ・レジャー・レクリエーション協会（ALATIR）設立、研究委員会設立、国際研究会議開催、事務総長 Cor Westland に交替・事務局もカナダ・オタワに移転、機関紙季刊 World Leisure and Recreation 発刊、経営委員会設立、第1回世界レジャー・レクリエーション会議開催（カナダ）
- 1990年代・・・WICE 設立、特別委員会設置（女性問題・HIV/AIDS 問題）、世界会議をほぼ定期的で開催（第2回～4回）、地域協会年次大会開催に協力、ワイルダ-会長逝去（1996）、副会長 Christine Quijano-Caballero（フランス・女性）が会長代行

世界会議の概要

第1回世界会議

「自由時間、文化そして社会」

- 期日： 1988年5月16日（月）～5月21日（土）
- 場所： カナダ・アルバータ州レイクルイーズ シャトー・レイクルイーズ
- 主管： アルバータ大学
- プログラム概要： 開会式、リセプション、晩餐会、總會、閉会式
シンポジウム、各委員会基調講演、研究発表分科会
コロンビア氷河バスツアーなど
- 参加国／者： 32か国・・・315名 日本から28名参加
- 研究発表数： 教育委員会関係 43題 日本から1題
研究委員会関係 52題 日本から1題
情報委員会関係 シンポジウム 日本から発題
経営委員会関係 シンポジウム 日本から発題
- 基調講演： 「レジャーとその環境」「レジャーと情報化社会-その夢と現実」
「自由時間と教育-今後10年の政治的課題」「レジャー：その意味」
「観光とレジャー：その将来」など

第2回世界会議

「レジャーおよび観光—社会と環境の変化—」

期日： 1991年7月16日（火）～7月19日（金）
 場所： オーストラリア・シドニー市 キングスゲート・ホテル
 主管： シドニー工科大学
 プログラム概要： 開会式、リセプション、晩餐会、総会、閉会式
 基調講演、研究発表分科会、分科会ミーティング
 ワイン試飲会・ブッシュダンス、ハーバー・クルーズなど

参加国／者： 24か国・・284名 日本から29名参加
 研究発表数 16か国・・109題 日本から3題

発表分野／題数： 国立公園・観光・野外レクリエーション分野・・・18
 女性とレジャー分野・・・11
 教育・トレーニング分野・・・9
 研究分野・・・28
 マネージメント分野や・・・15
 観光分野・・・28

第3回世界会議

「レジャー・観光・環境—人類発展の課題—」

期日： 1993年12月5日（日）～12月10日（金）
 場所： インド・ジャイプール市 ビルラ講堂／クラークアマー・ホテル
 主管： インド・レジャー研究協会（ILSA）
 プログラム概要： 開会式、リセプション、晩餐会、総会、閉会式
 基調講演、研究発表分科会、委員会ミーティング
 市内観光、インド芸能観賞会

参加国／者： 約30か国・・約300名 日本から3名参加
 研究発表数： 129題
 全体で11分科会があり、それぞれの分野で基調講演と研究発表が実施された。

第4回世界会議

「21世紀に向けての自由時間と生活の質」

期日： 1996年7月15日（月）～7月19日（土）
 場所： 英国ウェールズ州カーディフ市 パークホテル／市庁舎
 主管： カーディフ大学、チェルテンハム&グロセスター大学
 プログラム概要： 開会式、リセプション、創立40周年記念晩餐会、総会、閉会式
 各委員会・特別委員会基調講演、各委員会ミーティング、研究発表
 分科会、シンポジウム
 テクニクエスト・バスツアー、国立博物館リセプション

参加国／者： 約35か国・・約350名 日本から12名参加
 研究発表数： 33か国・・228題 日本から2題発表
 観光問題、女性とレジャー、高齢者とレジャーなど30のテーマに分かれた分科会で研究発表が実施された。

WLRAの推移および世界会議の特徴

WLRA設立から40年経た推移の特徴および現在まで4回開催された世界会議の特徴を概観すると次のようになる。

1) WLRA設立時の1950年から1960年代にかけては、米国による経済的・教育的・人的援助が、IRAを通して各国のレクリエーション運動に大きな影響を及ぼした。日本においてもフォークダンスや音楽などの分野の指導者派遣を受けた。またインド・コロンビア・韓国などの協会設立をみた。このようにIRAの1960年代の活動は、レクリエーション運動の中心的組織づくり、プログラムの充実期として特徴付けられる。

2) 1970年代は、国連との関わりをはじめ、時代の要請に応じて、ヨーロッパやラテン・アメリカなどの地域レクリエーション協会の設立、情報関係や指導者教育関係の専門委員会の設置、レジャー需要に応じた体制づくりなど、社会的認知を果たす時期であった。

3) 1980年代は、各種専門委員会活動が活発化し、それによって専門化が進み、理論的研究の要請が強くなった。各国のレジャー・レクリエーション研究者が多く参加するようになり、国際的会議の必要性も高くなった。とくに社会学・社会心理学系の研究者が多くなったのも、この時代の特徴といえよう。

4) 1990年代に入ると、シドニー、ジャイプール、カーディフと世界会議も定期的を実施されるようになった。その内容も専門委員会を中心に展開されてきた。またマネージメント、エイズ問題、女性に関する問題などにも積極的に関わりをもつようになった。また観光と環境の問題も多く取り上げられてきた。

5) もともと国際会議開催の要請は1932年に遡る。ロスアンゼルス・オリンピック大会開催一週間前に第1回世界レクリエーション会議が開催されたのは周知のことである。以来この会議も3回で中断した。この会議の主要な人物は、やはりトーマス・リバーズであった。世界大戦後も1964年の大阪での会議や1980年開催のブリュッセルの会議などは、世界会議ではあったが、定期的を実施する運びにはならなかった。したがって現在では、レイクルーズの会議からが、WLRAとしての世界会議として位置付けられている。

6) 全4回の世界会議に通じていることは、テーマの設定が、時代の要請を受けていることで、それによって研究発表の演題も時宜を得たものとなっている。参加国は約30か国であり、300～400名規模の会議である。会議の公用語が英語であるためか、参加者も圧倒的に英語圏が多い。アジア諸国からの参加は現在のところ微々たるものである。また発表者については、開催国からの発表が最も多く、全体の約30%を占める。一般的に常時多く発表する国は、米国、カナダ、英国、オーストラリア、オランダ、ニュージーランドなどの諸国が挙げられる。

今後の対応と課題

1) 日本のレジャー・レクリエーション界において、WLRAの存在がいまだ認知されていない。したがって学会をはじめ関係団体の積極的加盟・協力が期待される。

2) 発表についても、外国語で行うため、日本人にとってはきわめて負担となることは事実であるが、国際理解・国際交流の立場から積極的な発表実現が望まれる。

3) アジア人の参加は少なかったが、それでも各国からの参加がみられた。21世紀を考える時、日本もこうした努力を現在から更に培うべきものと痛感させられた。

「楽しさ」を中心とした大学体育授業の試みに関する基礎調査

○ 高橋 伸（国際基督教大学）

キーワード： 楽しさ、大学体育、生涯スポーツ、レジャー教育

1. はじめに

大学における教育改革の必要性が論じられている今日、大学体育授業の改革も当然のことながら、その在るべき姿を模索している。そこで問題となるのが、大学における体育の目標とそれを達成するための方法をいかに定めるかということになる。

各大学によって、その目的は決定されるべきものではあるが、従来までは運動、健康・体力づくり、スポーツ活動などの技術および方法の修得に力点が置かれていた傾向が見受けられる。換言すれば、高等学校までの体育の延長線上にあったといえよう。

しかしながら、時代の要請もあり、生涯スポーツの必要性が叫ばれている現代においては、運動や健康・体力づくりに関してはその習慣化、スポーツ活動についてはその生活化が、より重要な課題となってきた。したがって大学体育においては、卒業後社会人となつてから、個々人が大学体育で得られた経験を、いかに継続できるかにその目標を定める必要があると思われる。すなわちレジャー教育の一環として、その視点からの目標と方法を設定することが、課題解決への手掛かりと考えられる。

今回の報告は、以上の問題意識から「好きになる」と「楽しい」というキーワードに着目し、体育授業の中に、その要因をいかに取り入れていくかを検討しようとするものである。これらの心理要因は、多様かつ複雑な外発的動機と内発的動機によって形成され、両側面からのアプローチが必要となることはいうまでもない。しかしながら、その一端をも把握できるとすれば、運動の習慣化とスポーツの生活化への手掛かりが得られるものと思われ、今後の大学体育の在り方とその指導に貢献できると認識するものである。

2. 本報告の目的

本報告は、全体構想のもとに、その基礎的事実を把握しようとし、次の項目についての調査を実施し、その結果の概略を報告しようとするものである。

- 1) 体育・運動・スポーツ、および「走る」「泳ぐ」ことについて好き・楽しいの度合いを、受講前と受講後と比較する。
- 2) 楽しさを規定すると思われる個人の態度、運動への反応、目標、教師、成績、授業への評価を受講前と受講後と比較する。
- 3) 上記の項目の男女差の検討。

なおここでいう全体構想とは、基礎事実をもとに抽出された重要と思われる要因について、それを満たすべく計画された授業（実験群）とそれと対比できる授業（統制群）を実施して、当初の目的を達成しようとするものである。

3. 本報告の方法

- 1) 調査対象： 大学新入生（1年次）男子 46名 女子 131名 計 177名
- 2) 調査期日： 事前調査・・・1996年4月第2・3週（授業初日）
事後調査・・・1996年6月第3週（授業最終日）

- 3) 調査場所： I 大学体育館
- 4) 授業設定： BASIC コースで、内容は長距離走および長距離泳（時間泳）、70分授業を8～10回実施。目標を「活動を楽しむ」に設定した。
- 4) 調査項目： ・体育・運動・スポーツなど好き・楽しい16項目5段階チェック
・体育授業全般についての30項目5段階チェック
- 5) 分析方法： 5段階の分布割合と平均得点の比較検討

4. 結果

1) 好き・楽しい項目の事前・事後比較

事前における体育・運動・スポーツ・距離走・距離泳の好きの度合いは、一般に運動やスポーツについては約70%の支持率があるが、体育については44%～64%に止まる。また距離走・距離泳については約14%から37%の支持率となっている。事後の調査においては、すべての項目に支持率の向上がみられるが、とくに体育と距離泳では、平均スコアで0.5ポイント以上の上昇があった。

また上記の項目に対する楽しさの度合いは、事前で運動・スポーツに対して80%以上の支持があるが、体育は45%～55%に止まっていた。また距離走・距離泳については13%から27%であった。事後調査においては、楽しさの全般の度合いも向上をみせた。その中でも距離走・距離泳は、平均スコアで0.5ポイント以上の向上があった。

2) 体育授業全般項目の事前・事後比較

授業への態度での事前・事後比較では、平均スコアで0.8ポイントの上昇をみた。運動への反応（体力や運動能力への自信）については、上昇はみられるものの有意差は認められなかった。教師への印象については、大幅な支持率を得た。授業目的や内容および成績の方法についての理解度は高くなっており、自身にとって有用であったとの支持回答は半数から2/3に上昇した。体育授業の支持率は約10%上がり、82%～88%となった。授業内容に不満を示した者は、男子で20%、女子で30%の減少となった。

3) 男女差の検討

男子の標本数が46名と、女子の約1/3に止まっているため、男女の比較は必ずしも妥当とはいえない。したがって参考程度に止めることとするが、事前調査においては、顕著な差がみられないものの、多少の差がみられた項目は、態度、成績への関心であった。授業中男子は女子よりもリラックス傾向が強いことも認められた。女子は男子よりも苦痛に感じているようである。それぞれ平均スコアで0.4ポイントの開きがみられた。成績への関心は女子が高い傾向を示しているが、受講後の調査ではそれらの差が少なくなっている。この傾向は、他の項目についても認められることが分かった。

5. 考察と今後の課題

今回の基礎調査で得られた結果は、いわば高校時代までに経験した体育イメージと特定の大学体育授業経験との対比と換言できる。全般的に受講前よりも受講後にプラス反応があったことは認められるが、それが果たして目標設定によるものか指導効果によるものかは断定できなかった。今後は、当初の構想に従って、今回得られた結果の中から判別できる事項を追求し、より精度の高い方法を開発したい。

フライングディスク競技

アルティメットプレーヤーに必要な資質

—— とくにハンドラーについて ——

手塚 麻美（中部大学女子短期大学）

キーワード：フライングディスク、アルティメット、ハンドラー

1. はじめに

アルティメット(ULTIMATE)は、直径27cm、重さ170gのフライングディスクを使った競技で、「究極」を意味し、総合的な運動能力が要求されるスポーツである。アルティメットは、1967年にアメリカの高校生が考案したスポーツで、毎年、世界大会が開催され、我国では、1975年に協会が設立されて以来、今年で全日本アルティメット選手権大会も21回目を迎える。

1992年には、アジアで初めての世界選手権大会が栃木県宇都宮市で開催され、全日本ナショナルチーム・オープンが世界第3位、レディーズは、強豪アメリカ、スウェーデンを降し、みごと世界チャンピオンに輝いた。

現在では、50を超える大学の体育科目として採用されており、今後更に、学校体育の中で普及していくスポーツと考えられる。

1995年には、第29回国際スポーツ団体総連合の総会において、世界フライングディスク協会の正式加盟が承認され、「ワールドゲームズ」への出場も可能となったことから、益々脚光を浴びるスポーツといえる。

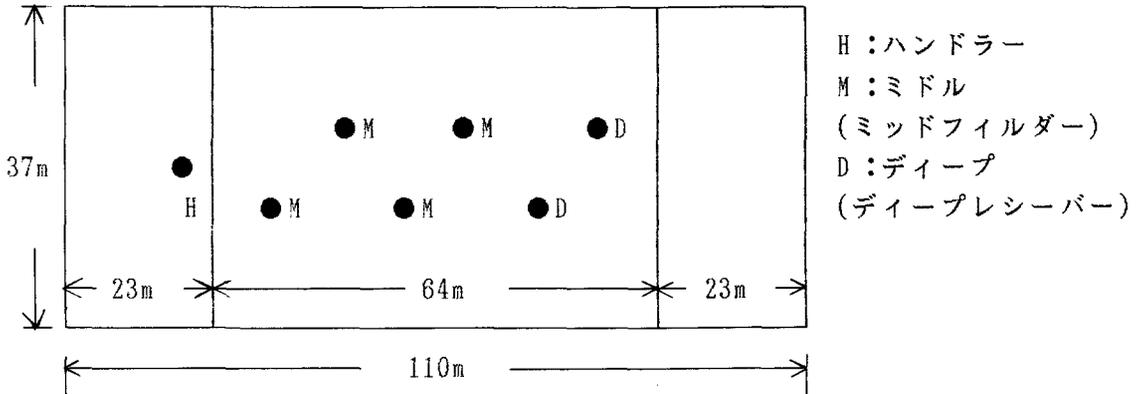
しかし、国内でのアルティメットに関する報告は大変に数少ない為、今回は、本学のフライングディスククラブTeamCUJCの指導に当たってきた経験の中で、他に類例を見ない程、ハンドラーとしての才能を持ち合わせ、チームの勝利に大きく貢献してきた選手との出逢いを基に、アルティメット競技におけるハンドラーの資質について報告したい。

2. ハンドラーの役割

アルティメットは、1チーム7人の選手からなる2チームが得点を争う競技で、味方同士がディスクをパスしながら相手チームのエンドゾーンに向かって攻め、そのエンドゾーン内でディスクのキャッチに成功するとポイントとなる。流れるようなスピード感溢れる競技内容は、まさに究極のスポーツであり、チームの勝利は、メンバー全員の総合力によって決まる。個々に求められる能力は、走力・持久力・ジャンプ力・精神力などが挙げられ、また技術面では、スロー力・キャッチ力・戦術等が欠くことのできない要素として挙げられる。中でもハンドラーは、アメリカンフットボールにおけるクォーターバックとしての役割を果たし、チーム全員の技術力や精神力の全てを理解した上であらゆる攻撃の場面に

対応できる戦略能力を持ち、実行に移すことができなければならない。ハンドラーはどんな状況においてもコート内のすべての動きを瞬時に、それも的確に判断しなければならない。チームが苦しい場面に追い込まれた時に、その流れを変えることができるのもハンドラーとしての技量といえ、チームの中でアルティメットに関する総合能力に最も長けているプレーヤーを起用している。

<アルティメットコート> オフェンス方向→ →



Team CUJCのオフェンスポジション (オフェンスセットでのハンドラーの位置) 一般的には3H-2M-2Dのオフェンスポジションをとるチームが多いが、Team CUJCは1H-4M-2Dのオフェンス体型をとっている。

3. ハンドラーに必要な資質

・責任

ハンドラーの役割に伴う責任を自ら果たそうとする。誰よりも試合に備えるための時間を惜しむことなく費やし、コーチの考えを統合して選手に伝えることができる。また、チーム全体と自分自身のことを常に掌握している。ハンドラーとしての仕事に責任を持ち、それを誇りに思える。

・研究心 (技術向上の意欲)

時間の許す限り、試合のビデオを繰り返し見ながら研究を重ね、自分達のチームが少しでも有利に戦うことのできる材料を見つけ、考え出すことができる。相手と同じことをやっていたのでは勝つことはできないと考え、相手よりも常に先んずるための努力を惜しまない。

・記憶力

ハンドラーには優れた記憶力が備わっていなければならない。過去に対戦した相手との状況・結果を記憶し、その時の経験を基に同じ様な状況に陥った場面では、少しでも早く

自チームに有利な展開になるよう記憶していることを呼び起こすことができなければならない。その為には、ビデオ研究を繰り返し、レポートやノートなどから多くのアイデアをインプットしておく必要がある。

ハンドラーが必要とする多くの資質が重なり合って、その役割を果たそうとするからこそ、当然頭脳は多くのことを記憶し、それによりどんな状況でも瞬時に判断を下すことのできる能力を高めていけるのである。

・集中力

どんな窮地に追い込まれても冷静で、その時に合った最良の判断を下すための集中力を必要とする。それを一瞬でも欠いた時には、スローミスが起り、味方に対して適切な声やスローが出なかつたりする。また、ポーチに入ったディフェンスにつかまったり、オフエンスやディフェンスがかたまっている場所へスローを出したりすることも、ディスクをリリースするまでの瞬間の集中力に欠けているといえる。

・目標を明確に設定（計画性）

年間の試合スケジュールに合わせ、目標を設定する。試合に対する目標と、そこへ到達するまでの月々の目標を明確にし、個人として、またチームとして達成できているかどうかのチェック機能をチームの中で設けている。その為には、あらゆる状況や相手を想定した練習を繰り返し、実際の試合では予想外に起きるものはないという自信に代えられるくらい目標を達成する努力と時間が必要である。

・完璧を求めること

完璧を求め、日々の練習を繰り返すことで、自信やチームワーク、冷静な判断等を得ることができる。練習は、できないことをできるようにし、不安を自信に変えていく場であるというプラス思考を持ち、一度できたことは試合の場面でもできると考え、成功を重ねていくことで大きな自信が培われていくのである。

ハンドラーは、どんな状況に置かれても、冷静さを欠く余裕はなく、興奮して我を忘れるようなことがあつてはならない。冷静さを失い、あるいは自信を失うことは、その場面での集中力やハンドラーが持ち合わせている多くの資質までも失ってしまうことにつながる。たとえ窮地に立たされたとしても、決して冷静さを失わないように、練習を通して多くの成功を得ていくのである。その例として、ハンドラーの持つスローイングの技術には、目を見張るものが多く、ゲームを見ているプレーヤーにも想像がつかないところへ当然のようにスローを出したり、困難な状況に置かれたときに、ハンドラーからの一本のスローが試合の流れを変えることもしばしばある。こうした技術の習得は、毎日の練習の中でイメージ通りにスローが出るまでは納得しない、ハンドラーとしての責任ある姿といえる。

・成功から自信へ

ハンドラーに限らず、練習で得た多くの成功は、自信という宝物へとつながっていく。しかし、ハンドラーは、絶対不可欠な自信を得ることはもちろんのこと、それを誰よりもチーム全体に伝えていかなければならない。アルティメット競技の中で、ハンドラーに自

信が見えないということはチームにとって勝敗に関して致命的であり、ハンドラーとチームのバランスは、根深いものである。

・分析能力

ゲームの始まりから、ハンドラーはコート内で起きている全てのことを察知し、その状況を分析し、自チームの採るべき行動を判断しなければならない。相手の変化に対応し、弱点をとらえ、今自分達が何をすれば良いか、その時に合った戦略をたてる能力や自チームが置かれている状況やその事実を容認し、柔軟な思考で作戦を変更する能力をも持たなければならない。

・競技価値観

ハンドラーには、多くの資質が必要とされることを明らかにしてきたが、全ての根底にあるものは、アルティメット競技に対する価値観であり、心からこのスポーツを愛する気持ちである。

4. 実践報告

アルティメットは、メンバー全員の総合力で勝敗が決まるスポーツであるが、チームを勝利に導くためにハンドラーの持つ役割は大きく、多くの資質が必要であることがわかった。それらのほとんどが後天的な努力によって培うことのできるものであるが、誰もがハンドラーとしてコートの中で活躍できる訳ではない。むしろ、その才能の多くは、天性持ち合わせたセンスによって開花されていくといってもよい。それくらい、これまで出逢った多くの選手の中でハンドラーとしての資質を持ち、その力を発揮することができたのは限られたプレーヤーだけであった。

今回の報告は、これまでの指導経験から明らかにしたもので、将来のアルティメット競技の一助としたい。

<参考文献>

- 手塚 麻美・渡邊 明子 「中部大学女子短期大学におけるフライングディスクの指導例」
—とくにTeam CUJCを対象としたアルティメットに関して—
中部大学女子短期大学紀要・言語文化研究第4号 1993年
- 手塚 麻美 「中部大学女子短期大学におけるスポーツ実技の役割」
—とくにスポーツ実技Aの授業について—
中部大学女子短期大学紀要・言語文化研究第7号 1996年
- 手塚 麻美 「Team CUJC」 中部大学女子短期大学GAZETTE
- 日本フライングディスク協会アルティメット委員会他著
「フライングディスク入門」 アルティメットのすすめ
タッチダウン

こどものあそびに関する一考察

— 阪神大震災を通してみるこどものレクリエーション活動 —

○小泉勇治郎・山下陽一郎・片岡麻里

1. はじめに

1995年1月17日午前5時46分に発生した阪神大震災は6279名の死者（兵庫県知事公室消防防災課）、行方不明2名（96年7月24日現在）と多くの負傷者を出し、そして家屋の全壊・半壊など人々の生活を大混乱におとしいれた。今なお多くの人達がテントで暮らし、仮設住宅に入居した者の中から、特に一人暮らしの高齢者の死亡や、アルコール依存症患者の増加、子供も含めたPTSD問題などが継続して起こっている。

兵庫県は神戸市をはじめ各市からの土地の提供を受け仮設住宅を建設し、家を失った人達の住居として提供している。しかしながら仮設住宅を取り巻く様々な問題も起こっている。例えば、遠隔地にあり入居する者がいなかったり、ショッピングセンターが仮設外にあり利便性に問題があったり、また、夏暑く、冬寒い、隣家の物音が聞こえたりといった問題から、老人の孤独死や新興宗教、悪徳商法の潜入など深刻な問題も起きている。

さて、仮設住宅はほとんどが市内の公園に建設されており、2年の期間とされているが、実際はその期間を越えることが決定的であり、仮設の撤去をめぐるトラブルも予想される。見方を全く変えて、公園本来の目的から考察してみると、「都市公園法」第1条には都市公園の健全な発達を図り、もって公共の福祉の増進に資することを目的としており、「都市公園法施行令」には住民一人当たりの都市公園の敷地面積の標準を6平方メートル以上と決めている。1986年の神戸市民の公園面積は9,97平方メートル（都市緑化年表）であったが、今回の震災によりそのほとんどの公園が他の目的に使用され、本来の公園の目的を果たしていないと言える。

本研究では神戸における公園の実態と、それに伴って子供の遊びにどのように影響を及ぼしているのかを考察してみた。

2. 研究の目的

本研究では震災により公園がどのように使用されているのか、また、子供たちが公園をどのように位置付けているのかを探り、本来あるべき公園の姿を探求する事を目的とした。

3. 研究の方法

国土地理院平成7年5月16日発行1万分の1緊急修正版地形図において、「公園」および「緑地」をマークし、その利用形態を調査するとともに、市内小学生にアンケートを実施し、公園の利用について状況調査を行った。（1995年10月）また、約半年後被害の最も大きかった神戸市長田区を中心に再度公園調査を行い、小学生に対して聞き取り調査を再実施した。

4. 結果および考察

おおむね公園の利用形態として次のように分類される。（1995年10月時点）

- 1、そのまま公園としての機能を残している。
- 2、行政の仮設住宅地として使用されている。

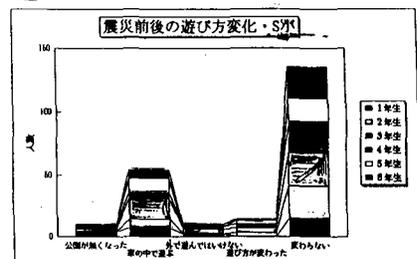
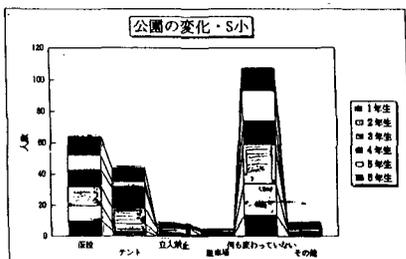
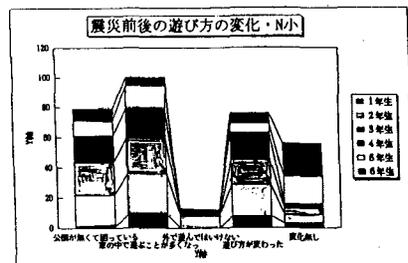
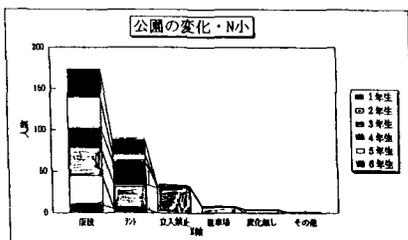
- 3、仮設住宅として一部使用されており、駐車場としても使用されている。
- 4、テント村として使用されている。
- 5、ガレキ置き場として使用されている。
- 6、小学校の仮設校舎として使用されている。
- 7、仮設住宅とテント村の混在利用がなされている。
- 8、立入禁止となっている。
- 9、ホームレスのたまり場となっている。
- 10、その他

(緑地帯を利用して、飲食店、診療所、ボランティア基地、資材置き場、駐車場などの利用がみられる)

市内公園を調査した結果、次のような利用形態に分類できる。

- (1) 都市公園法施行令第2条の1に定める都市公園(児童公園)は敷地面積が狭く、且つ遊具等があり仮設の建設が無理であることから、そのまま残っている。しかしながら、被害の大きかった神戸市西部の長田区ではこの様な公園にも小規模な仮設を建設している。
- (2) 都市公園法施行令第2条の2および3に定める都市公園にはほとんど仮設が建てられている。
- (3) 都市公園法施行令第2条の4に定める都市公園はガレキ置き場として使用されている。
- (4) 震災の被害が大きい公園は復旧作業が後回しとなり立入禁止となっている。
- (5) 仮設が建っていないくてもテント村、駐車場あるいは倉庫として使用されている。
- (6) 緑地は何らかの利用がされている。

また、市内2校(被害の少なかった地区の学校と被害の大きかった地区の学校)のアンケート調査の結果は、(1995年11月実施)



以上のことが調査により判明した。このことにより、

- (1) 公園としての機能が約50%制限されている。地区によってはもっと高いところもある。
- (2) この結果、最も身近にある子供の遊び場が奪われているといえる。
- (3) しかしながら、市内公園を調査してみたが、ほとんどの公園で子供の遊ぶ姿を見なかった。
- (4) 3について、小学生アンケートを実施し分析したところ、公園で遊ぶ機会が震災後減っていることが分かったが、圧倒的に自宅で遊ぶ割合が多いことが分かった。しかしながら震災被害の大きかった地区の子供たちにとっては公園がなくなって困っている者が多い。
- (5) 公園の利用主体を考察してみると、遊具が設置されている公園を利用する乳幼児、就学前の子供たちとその親、簡単なスポーツをするための小学校低学年の層である。また、早朝のラジオ体操グループ、ジョギング層なども含まれる。

震災後1年6ヶ月が経過し、復興・復旧作業が行われある程度の(テント村の撤去、緑地の整備、資材置き場の整理等)子供の遊び空間が戻ってきつあるが、特に長田区においてはその傾向が見受けられない。それは、震災復興計画が住民に受け入れられていないことに起因しているものと思われる。1996年5月再度長田地区の子供たちにアンケートを実施したところ、(被験者26名)

* あなたは阪神大震災より前、いつもどこで遊んでいましたか？

公園	・・・	21人	空き地	・・・	1人
自分の家	・・・	1人	友達の家	・・・	2人
ゲームセンター	・・・	5人			

* あなたは阪神大震災後、どこで遊んでいますか？

公園	・・・	18人	空き地	・・・	2人
自分の家	・・・	3人	友達の家	・・・	2人
ゲームセンター	・・・	3人	その他(母の田舎)	・・・	1人

* 阪神大震災後、近くの公園はどうなりましたか？

仮設住宅が建っている	・・・	22人
テントが建っている	・・・	8人
何も変わっていない	・・・	1人

* 阪神大震災後の前と後と比べて変わったことはありますか？

いつも遊んでいた公園などがなくなって困っている	・・・	9人
家の中で遊ぶことが多くなった	・・・	3人
家の人に外で遊んではいけないと言われる	・・・	3人
遊び方が変わった	・・・	4人
あまり変わらない	・・・	7人

* その他・・・立入禁止になっている

建物が多くなった
変な人が増えた

5、結論

震災により特に被害の大きい旧市街地のほとんどは、地球環境が全く様変わりしてしまっ
た。野球やサッカーなどのスポーツ・レクリエーション活動をする広場がきわめてすくな
くなったうえ、遠く離れた仮設住宅等に移転せざるをえず、友達とも離れてしまい、これ
までの地域のつながりが途切れてしまった。さらに、地域活動の担い手である青少協の育
成委員や青少年団体の指導者も被災した者が多く、活動が思うにまかせない状況となっ
た。加えて、復旧・復興の過程で、パチンコ店やテレフォンクラブ等いわゆる風俗営業関連業
種の立ち上がりが早いということもあり、青少年への悪影響を憂慮せざるをえない。
こどもが安全に遊ぶことのできる場所が震災によって少なくなってきており、受験戦争の
激化やファミコンゲームなどのより、屋外で遊ぶ子供が減り、小子が拍車をかけ子供同
士のふれあいの機会が減ってきている。

今後、震災復興を子供の遊びの側面からとらえてみると、

- (1) 住区基幹公園の整備、市民公園の拡充
- (2) スポーツ・レクリエーション施設の整備
- (3) 安心でゆとりある住宅・住環境の形成・住民参加の公園の整備
- (4) 防災拠点としての公園の整備
- (5) 自宅で遊ぶ子供たちのありかたについて、子供の身体的発達、人間関係の側面から
研究していく（地域に子供を呼び戻す）
- (6) 学校開放をする（学校と公園の一体型）
- (7) 学校教育自体を考え直す（合校論の検討）

6、参考文献

- 1、「共に生きる」社会、「共に遊ぶ」文化を求めて、
1995、11 日レク21世紀レクリエーションビジョン委員会
- 2、第三次神戸市青少年育成中期計画案
- 3、第四次神戸市基本計画
- 4、神戸市復興計画
- 5、「レクリエーション事典」前川峯雄他、不味堂出版、1986、4
- 6、「レクリエーションの基礎理論」池田 勝他、杏林書院、1989、6
- 7、「キッズブレース」——子どもと公園——日本住宅会議・関東会議編 ささら書房
1990、6
- 8、新潟日報1995、10、12付け記事「室内でわずか1～2時間」

震災ボランティアの社会学的研究 (1)

- 性別による分析 -

○高見 彰 (関西女学院短期大学)、山口 泰雄 (神戸大学)、土肥 隆 (神戸商科大学)、
世戸 俊男 (神戸YMCA)

キーワード：阪神・淡路大震災、ボランティア、期待と満足、イメージ

1. はじめに

阪神・淡路大震災のあと、阪神地区全体では、1995年1月からの3カ月で延べ117万人のボランティアの参加があり、被災地ではボランティア活動に対して、「若者がボランティアとしてよく働いた」「日本はボランティア活動の新しい時代に入った」「生きることは人とかわり合うことだと実感した」「ボランティア元年を迎えた」等々多くの社会的な注目を集めることとなった(高田裕之,1995)。その後、関西地区の大学においては、「ボランティアと社会的ネットワーク」など、多くのボランティアに関する講座や一般市民を対象とした公開講座が開設され、震災を機にボランティア活動を単位認定の対象とするようになった。また、兵庫県教育委員会では、震災で県立高校11校が避難所となり、ほとんどの学校で在校生がボランティア活動に参加したことから、1996年度から「ボランティア実践」といった選択科目を置くことを発表した。

このようにボランティア活動に関する制度化が進んでいる反面、震災の後、ボランティアは、「なぜ、自ら活動に参加したのか」、「何を考え、行動したのか」、「活動により、どのような影響を受けたのか」など、ボランティア自身の動機や意識、および態度変容に関しては、ほとんど知られていない。

本研究の目的は、阪神大震災において活動したボランティアの参加動機と活動に対する意識や態度変容の構造を明らかにし、ボランティア活動の活性化と組織化に向けての基礎資料を得ることにある。本研究においては、以下の研究問題(research problems)を設定し、性別による分析をすすめることでその解明を試みた。

- 1) 「ボランティアはどのようなきっかけで参加したのか？」
- 2) 「ボランティアはどのような動機で参加したのか？」
- 3) 「日常生活においてボランティア活動や規範行動をどの程度行っているのか？」
- 4) 「ボランティアは何を期待して参加したのか？また、活動参加により期待は達成(満足)されたのか？」
- 5) 「参加者はボランティア活動に対して、どのようなイメージをもっていたのか？また、活動参加によりイメージはどのように変容したのか？」
- 6) 「ボランティアは何を感じ、考えたのか？」
- 7) 「参加者の属性(性別、職業)により、参加動機や期待及び満足には違いがあるのだろうか？」

2. 研究方法

1) 調査対象

本研究の調査対象者は、1995年2月26日から8月27日にかけて「阪神大震災復興協力キャンプ」(日本YMCA同盟主催)に参加したボランティア1,004名で、回収した質問紙のうち有効票は1,002票(無効票2票)であった。

阪神大震災復興協力キャンプ(以後、ワークキャンプと略す)は日本YMCA同盟が主催し、5泊6日(原則)の日程で阪神地区に滞在し、ボランティア活動を行ったものである。

2) 調査方法

調査の方法は、質問紙を用い集合法により実施した。研究目的を達成するために、事前事後調査法(pre-post survey)を適用した。すなわち、ワークキャンプ初日におけるオリエンテーション直後に質問紙の前半部である事前調査を記名で実施し、ワークキャンプ最終日の活動後に質問紙の後半部の事後調査を実施した。データ分析には単純集計、クロス分析および記述統計を用い、性差による違いを検証するためにカイ二乗検定とt検定を適用した。

3) 調査項目

研究問題を検証するために、内閣総理大臣官房広報室(1983)、全国社会福祉協議会(1990)、山口ら(1989)、長ヶ原ら(1991)の先行研究を参考にし、8要因群19項目から構成される質問紙を作成した。質問紙における調査項目の内容とカテゴリーは表1に示す通りである。

表1 調査項目の内容とカテゴリー

要因群	項目	カテゴリー
属性	回答者の属性	1.性別 2.年齢 3.職業 4.居住地
動機	参加のきっかけ	1.友人・知人 2.新聞雑誌を見て 3.テレビ・ラジオから 4.所属団体を通じて 5.市町村の広報誌を見て 6.YMCAのポスターやチラシをみて 7.その他
	意志決定 参加形態	1.自分一人で決めた 2.友人と決めた 3.家族と決めた 4.所属団体を通じて決めた 5.その他 1.春・夏休み利用 2.年休を利用 3.ボランティア休暇を利用して 4.授業の一部 5.仕事の一部 6.その他
	参加動機 (26項目)	1.非常にあてはまる 2.まああてはまる 3.どちらともいえない 4.あまりあてはまらない 5.全くあてはまらない
ボランティア 経験	日常の規範行動 (9項目) ボランティア活動の頻度 (8項目)	1.していない 2.ときどきしている 3.かなりしている 4.いつもしている 同上
ボランティア 活動へのイメージ	活動イメージ (18項目) 事後のイメージ	SD法による形容詞対 (7段階尺度) 同上
キャンプへの 期待と達成	期待内容 期待した内容に関する達成	1.非常にあてはまる 2.まああてはまる 3.どちらともいえない 4.あまりあてはまらない 5.全くあてはまらない 同上
ボランティア活動 の内容と満足度	活動内容 活動満足度 (参加者との交流・地域のひととの交流・ワークキャンプの運営・ボランティア活動の内容・全体的な満足度)	自由記述法 1.満足した 2.まあ満足した 3.あまり満足しなかった 4.満足しなかった
継続意欲	ボランティア活動の継続意欲 キャンプの他者への勧め	1.非常にそう思う 2.そう思う 3.あまり思わない 4.全く思わない 同上
キャンプの感想	キャンプの感想や意見	自由記述法

3. 結果と考察

1) 参加者の属性

参加者の男女比は男性4割、女性6割で、学生・会社員といった10代、20代の若者が主力であった。

2) 参加のきっかけ

男性は「所属団体から」及び「友人・知人から」の直接的勧誘が多く、参加者の身近な者からの影響が大きい。女性は、「新聞・雑誌」「ポスター」などの募集広告による影響が大きい。また、男女ともに「テレビ・ラジオ」「市町村の広報紙」は今回のボランティア参加の情報源には、ほとんど影響を及ぼしていない。

3) 参加の意志決定

男女とも約半数の者が「自分一人で決めた」と答えており、「友人と決めた」者が約3割を占めている。学生を中心とする若者が大半を占めることから、「友人」が参加意志決定の際の重要な他者となっているのが特徴といえる。

4) ボランティア参加期間中の休暇の形態

男女とも「春・夏休み」「年休」など休暇を利用して参加した者が大半を占めるが、授業・仕事の一部としての参加は男性に多くみられる。

5) 参加動機

参加動機として、男女とも新聞やテレビ報道により被害を知り、被災者の窮状が他人ごとには感じられず、援助の仕方はいろいろあるが、とにかく、自分自身の目で現地を確かめ、救済復興の為に尽くしたい、その結果人間的に大きく成長したいという参加者像が浮かび上がり、進学就職に有利であるとか信仰上の理由からといった、代償を求めたり、特定の目的(理由)に縛られたものではない。

6) 日常生活における規範行動

参加者は全体的にプラスの規範行動を取っており、今回の参加者集団は社会的モラルの高い集団で構成されていたことがわかる。また、全体を通して女性は男性よりも規範が高い。

7) 普段のボランティア活動の実施頻度

普段のボランティア活動の実施状況は、男女とも全体を通して低調であり、ボランティア活動に慣れ親しんでいるものは少なく、今回のワークキャンプは「初心者集団」が組織化されて活動を行ったといえる。

8) ボランティア活動の内容

最も多かったのは、「被災者宅訪問・レクリエーション指導」で、次いで「被災者宅の訪問」「ガレキの片づけ・被災者宅

の訪問」となっており、参加者全体の6割がこれらの3種類の活動内容に従事した。「被災者宅や避難所への訪問」が活動の中心となっており、参加者の約8割の人が訪問を行い、被災住民との出会い・ふれあいを体験している。

9) ボランティア活動に対する期待

男女ともにボランティア活動参加前に期待の高かった項目は、表2、表3を見ると若干の順位に違いはあるものの、「手助けをしたい(手助け)」「被災地の現実を知りたい(現実を知る)」「普段では得ることのできない体験をしたい(普段できない体験)」「成長したい(成長)」「社会のために何か役立ちたい(社会に役立つ)」「被災地域の人たちとふれあいたい(ふれあい)」などの項目が上位を占め、様々な期待をもってボランティアに参加していることがうかがえる。また、女性は男性よりもボランティア活動に対する期待が高く、17項目中「自分のやりたいことを発見したい(発見)」「何か新しく感動できることを体験したい(感動の体験)」「自分の能力や技術を生かしたい(能力技術をいかす)」「新しい人と出会いたい(出会い)」「普段できない体験」を除く12項目に有意な差がみられ、ボランティア参加に求めているものも大きいといえる。

10) ボランティア活動参加後の満足

表2、表3より、全ての項目で男女ともに、満足している方にシフトしており、満足の高かった項目は「出会い・ふれあい」「現実・体験」のキーワードにまとめることができる。参加前には「与える側の立場」を意識して参加したが、現実には想像以上のインパクトがあり、自分の無力を感じながら、今までに絶対に得ることができなかった体験や人々との出会いを通して「何かを与えられる立場」に意識が変化し、最終的には自分自身が何かを学びとることができたという個人的項目に大きな満足を得ている。さらに、男性が女性よりも特に満足の高かった項目は、「手助け」「能力・技術をいかす」「社会に役立つ」の項目であり、自分の持っている資質を生かして、貢献できたという満足感が男性に強い。また、女性が男性よりも満足の高かった項目は、「出会い」「将来の仕事に役立つ」「長期的な援助の気持ち」「ふれあい」「ボランティアの勉強」「時間の有効利用」「新しい技術や経験」の7項目であり、ボランティア体験を通して感じたこと学び得たことに満足が高い。

表2 参加前の期待と参加後の満足(男性)

項目	参加前	参加後	p
手助け	1.66	2.26	***
発見	2.54	2.63	N.S.
感動の体験	2.29	1.88	***
能力・技術を生かす	3.03	2.78	***
出会い	2.22	1.36	***
社会に役立つ	2.07	2.37	***
自分を見つめ直す	2.42	2.16	***
仕事に役立てる	3.05	2.62	***
長期的な援助の気持ち	2.29	2.11	**
普段できない体験	1.96	1.46	***
共感	2.25	2.39	*
成長	1.98	2.39	***
現実を知る	1.92	1.64	***
ふれあい	2.09	1.93	**
ボランティアの勉強	2.36	1.95	***
時間の有効利用	2.69	2.28	***
新しい技術や経験	2.73	2.45	***

*:p<.05, **:p<.01, ***:p<.001

表3 参加前の期待と参加後の満足(女性)

項目	参加前	参加後	p
手助け	1.56	2.54	***
発見	2.51	2.54	N.S.
感動の体験	2.27	1.82	***
能力・技術を生かす	3.02	2.97	N.S.
出会い	2.11	1.25	***
社会に役立つ	1.89	2.55	***
自分を見つめ直す	2.27	2.06	***
仕事に役立てる	2.80	2.47	***
長期的な援助の気持ち	2.04	1.98	N.S.
普段できない体験	1.86	1.38	***
共感	2.09	2.33	***
成長	1.81	2.38	***
現実を知る	1.66	1.63	N.S.
ふれあい	1.85	1.78	N.S.
ボランティアの勉強	2.07	1.80	***
時間の有効利用	2.42	2.12	***
新しい技術や経験	2.46	2.25	***

***:p<.001

11) 参加前のボランティアに対するイメージ

男女ともに「かなり」のプラス(肯定的)のイメージを持つ項目は、表4、表5を見ると若干順位が異なるが「自発的な-強制的な」「責任感のある-無責任な」「まじめな-ふまじめな」「信頼できる-信頼できない」「感動がある-感動がない」「積極的な-消極的な」の6項目である。これらの項目はボランティア活動を言い表す一般的なイメージととらえることができ、今回の参加者は震災救復復興ボランティア活動に対して、比較的純粋なイメージを抱いている。「人気のある-人気のない」「カッコいい-カッコ悪い」「不安がある-不安がない」の項目は「どちらでもない」に反応していることから参加者のイメージの中には、人の目を意識するとか流行でといった価値観で活動をとらえていないことが分かる。

中でも女性は「積極的な-消極的な」「感動がある-感動がない」「楽しい-つまらない」「魅力的な-つまらない」「自

発的な－強制的な」「責任感のある－無責任な」「身近かな－無縁な」の7項目で男性よりも強くプラス（肯定的）イメージ側に反応している。

12) 参加後のボランティア活動に対するイメージ変化

活動参加後のイメージで、‘かなり’のプラス（肯定的）イメージを持つ項目は、表4、表5から18項目中、男性で8項目、女性で11項目となっている。男女で共通する項目は「自発的な」「積極的な」「責任感のある」「感動がある」「嬉しい」「信頼できる」「まじめな」「魅力的な」の8項目であり、女性にかなり肯定的であった他の項目は、「本物の」「身近な」「楽しい」の3項目である。参加後は参加前に抱いていたイメージを保ちながら、あらたに「魅力的な」「嬉しい」「本物の」「身近な」「楽しい」の項目が高くなった。このことは今回のワークキャンプでは、被災者との関係の中では、飾りたてた見せかけの自分では通用せず、あくまで本音でのつき合いが要求されたこと、自分の活動、誠意が認められたときの嬉しさ、被災者、ボランティア仲間同志の交流の中で体験した楽しさ、またこのような体験を通じて非日常的な震災がとても身近な存在となり、参加者のイメージ変容に、強い影響を及ぼしたものと考えられる。

女性が男性よりも肯定的なイメージを持った項目は「自発的な」「魅力的な」「身近な」「日常的な」「感動がある」「積極的な」「楽しい」の項目であり、女性は、男性より、ボランティア活動は身近かで日常的であると同時に魅力的で楽しく感動的であるというイメージをより強くいだく結果となった。

表4 参加前と参加後のボランティア活動のイメージ（男性）

項目	参加前	参加後	p
自発的な	1.83	1.93	N.S.
魅力的な	2.72	2.49	***
本物の	2.73	2.52	**
人気のある	4.00	3.58	***
責任感のある	2.07	2.04	N.S.
身近な	3.36	2.67	***
日常的な	3.60	2.97	***
かっこいい	3.76	3.71	N.S.
明るい	3.14	2.76	***
まじめな	2.33	2.38	N.S.
信頼できる	2.49	2.36	*
不安がある	3.82	4.06	**
感動がある	2.41	2.08	***
嬉しい	2.61	2.33	***
積極的な	2.10	2.01	N.S.
創造的な	2.90	2.71	**
自由な	3.30	2.89	***
楽しい	3.09	2.58	***

*:p<.05, **:p<.01, ***:p<.001

表5 参加前と参加後のボランティア活動のイメージ（女性）

項目	参加前	参加後	p
自発的な	1.68	1.76	N.S.
魅力的な	2.54	2.32	***
本物の	2.62	2.43	***
人気のある	3.98	3.44	***
責任感のある	1.92	1.97	N.S.
身近な	3.13	2.35	***
日常的な	3.42	2.52	***
かっこいい	3.69	3.70	N.S.
明るい	3.08	2.66	***
まじめな	2.35	2.45	*
信頼できる	2.48	2.46	N.S.
不安がある	3.70	3.93	***
感動がある	2.14	1.90	***
嬉しい	2.58	2.25	***
積極的な	1.80	1.83	N.S.
創造的な	2.87	2.58	***
自由な	3.24	2.84	***
楽しい	2.87	2.40	***

*:p<.05, ***:p<.001

13) ワークキャンプに参加しての満足度

①交流に対する満足度（対参加者、対地域住民）

ボランティア参加者同志の交流には、男女とも94%の者が満足しており、男性76%、女性80%の参加者が地域住民との交流に満足している。

②ワークキャンプの運営及びボランティア活動の内容に対する満足度

男女とも8割がワークキャンプの運営に満足しており、運営面に対する評価は高い。また、活動内容に対しては、男女とも8割の者が活動の内容に満足している。

③全体的な満足度

男女とも9割の者がワークキャンプ全体に対して満足を得ており、非常に高い評価を得ている。

14) ボランティア活動の継続意欲

男性が96%、女性が97%と非常に高い割合で、今後のボランティア活動継続の意思を表明している。

15) 周囲へのボランティア活動の勧め

男性79%、女性85%の参加者が周囲にボランティアを勧めたいと思っている。今回のワークキャンプで自分が体験した様々な感動、満足を多くの人達とわかちあいたいという気持ちの現れであろう。

震災ボランティアの社会学的研究（2）

-参加者タイプによる分析-

○世戸 俊男（神戸YMCA）、山口 泰雄（神戸大学）、土肥 隆（神戸商科大学）、
高見 彰（関西女学院短期大学）

キーワード：阪神・淡路大震災、ボランティア、期待と満足、イメージ、参加者タイプ

1. はじめに

わが国において、「ボランティア」という言葉は一般的になってきているが、実際のボランティア活動は低調であり、総理府が1991年に実施した「長寿社会に関する世論調査」によると20歳以上60歳未満の者の現在のボランティア参加率はわずか5.6%である。また、若者のボランティア参加率も日本青少年研究所が実施した日・米・台湾の高校生の国際比較を見ると、アメリカの63.9%、台湾の5.8%に比べて4.3%と低率である（朝日新聞・朝刊1994年5月8日）。さらに、ボランティア活動参加者の参加動機も所属団体や職場などにおいて参加が期待され、その期待に応えないと何らかのマイナス評価を受けるという不安や心配が活動の契機になっている（内閣総理大臣官房広報室、1983年）、いわゆる「外発的動機」であることが多い。

しかし、阪神・淡路大震災のあと、阪神地区全体では、1995年1月からの3カ月で延べ117万人のボランティアの参加があり、被災地ではボランティア活動に対して、「若者がボランティアとしてよく働いた」「日本はボランティア活動の新しい時代に入った」「生きることは人とかわり合うことだと実感した」「ボランティア元年を迎えた」等々多くの社会的な注目を集めることとなった（高田裕之、1995）。このように震災を契機にボランティア活動に対する関心が高まる中、震災後のボランティア自身の参加動機や意識、および態度変容を明らかにし、ボランティア活動の活性化と組織化に向けての基礎資料を蓄積することは重要な課題である。そこで本研究では、以下の研究問題(research problems)を設定し、参加者の個人的属性（年齢、性別、職業）から参加者のタイプを中高生、大学生・専門学校生、社会人に分類し、それぞれのグループごとに分析をすすめることでその解明を試みた。

- 1) 「ボランティアはどのようなきっかけで参加したのか？」
- 2) 「ボランティアはどのような動機で参加したのか？」
- 3) 「日常生活においてボランティア活動や規範行動をどの程度行っているのか？」
- 4) 「ボランティアは何を期待して参加したのか？また、活動参加により期待は達成（満足）されたのか？」
- 5) 「参加者はボランティア活動に対して、どのようなイメージをもっていたのか？また、活動参加によりイメージはどのように変容したのか？」
- 6) 「ボランティアは何を感じ、考えたのか？」
- 7) 「参加者の属性（性別、職業）により、参加動機や期待及び満足には違いがあるのだろうか？」

2. 研究方法

1) 調査対象

本調査は、1995年2月26日から8月27日にかけて「阪神大震災復興協力キャンプ」（日本YMCA同盟主催）に参加したボランティア1,004名（男性38%、女性62%）を対象とした（回収有効票は1,002票）。阪神大震災復興協力キャンプ（以後、ワークキャンプと略す）は日本YMCA同盟が主催し、5泊6日（原則）の日程で阪神地区に滞在し、ボランティア活動を行ったものである。

2) 調査方法

調査の方法は、質問紙を用い集合法により実施し、研究目的を達成するために、事前事後調査法(pre-post survey)を適用した。すなわち、ワークキャンプ初日におけるオリエンテーション直後に質問紙の前半部である事前調査を記名で実施し、ワークキャンプ最終日の活動後に質問紙の後半部の事後調査を実施した。データ分析には単純集計、クロス分析および記述統計を

用い、参加者タイプによる違いを検証するためにカイ二乗検定とt検定を適用した。

3) 調査項目

研究問題を検証するために、内閣総理大臣官房広報室(1983)、全国社会福祉協議会(1990)、山口ら(1989)、長ヶ原ら(1991)の先行研究を参考にし、8要因群19項目〔1.属性 2.動機：参加のきっかけ、意志決定、参加形態、参加動機 3.ボランティア経験：日常の規範行動、ボランティア活動の頻度 4.ボランティア活動へのイメージ：活動イメージ、事後のイメージ 5.キャンプへの期待と満足：期待内容、期待した内容に関する達成 6.ボランティア活動の内容と満足度：活動内容、活動満足度（参加者との交流・地域のひととの交流・ワークキャンプの運営・ボランティア活動の内容・全体的な満足度） 7.継続意欲：ボランティア活動の継続意欲、キャンプの他者への勧め 8.キャンプの感想：キャンプの感想や意見〕から構成される質問紙を作成した。

3. 結果と考察

1) 参加者のタイプ

年代別にみると、10歳代（46%）と20歳代（41%）で約9割を占めている。また、30歳代、40歳代と年齢が高くなるにつれ参加者の割合は低くなっている。職業では学生（生徒）が76%と最も多く大半を占めるが、会社員、公務員、教員、主婦、各種専門職など職種は多岐にわたっている。今回のボランティア活動参加者は、学生、会社員といった10代、20代の若者が主力であった。

2) 参加の情報源

主婦が含まれる社会人女性は、新聞や雑誌が情報源となっている者が多いが、中高生、大学生・専門学校生は所属団体（学校・大学等）、社会人男性も所属団体（勤務先）から情報を得ている者が多い。ワークキャンプに関する情報源として、テレビ・ラジオ、広報紙などあげる者は、全ての年代できわめて少なかった。

3) 参加の意志決定

中高生の参加決定には、男女とも「自分一人で決めた」以外に「友人」「家族」が要因となっているのが特徴であり、学生は男女とも約半数の者が「自分一人で決めた」と答えており、「友人」も約3割を占めている。社会人は半数以上が「自分一人で決めた」と答えている。

4) ボランティア参加期間中の休暇の形態

ワークキャンプには、春・夏休みを利用した者が最も多い。授業の一部として参加した者が1～2割見られ、社会人ではボランティア休暇を利用しての参加も1割程度みられる。

5) 参加動機

参加動機では「他人事でない」「自分の勉強になる」「現状を見ておきたい」「お金以外で役に立ちたい」が各参加者タイプに共通している。特に社会人では、「新聞やテレビ報道をみて」というマスコミの影響が強い。

6) 日常生活における規範行動

中高生より大学生・専門学校生、さらにそれよりも社会人の方が、日常生活規範行動をより実践しており、年代が高くなるにしたがい規範が高くなる傾向が見られる。

7) ふだんのボランティア活動の実施頻度

「募金慈善活動」のボランティア経験者が若干みられたが、ほとんどの参加者が今回がボランティア初体験である。

8) ボランティア活動に対する期待と満足

①中高生（表1）

ボランティア活動参加前の期待が高かった項目は、「困っている人の手助けをしたい」「ふだんでは得ることのできない体験をしたい」「被災地の現実を知りたい」「人間として成長したい」「被災地域の人たちとふれあいたい」「社会のために何か役立ちたい」「ボランティア活動の勉強をしたい」などであった。普段できないボランティア活動を通して、被災地域の手助け、被災地域の人々とのふれあいを通して人間的に成長することとともに、ボランティア活動の勉強をしたいと考えていることがわかる。

ワークキャンプを終えて、満足度の高かった項目は、「新しい人と出会った」「ふだんでは得られないことを体験した」「被災地の現実を知ることができた」「ボランティア活動の勉強ができた」「被災地域の人たちとふれあいができた」「何か新しく感動することを体験した」などであった。

最も反応率の高かったのは、「出会い」であり、参加者を含めたボランティアの人々、あるいは被災地域の様々な人々との出会いに対する満足度が特に高い。また、かつてない大震災後のボランティア活動であり、その活動のほとんどは日常生活において体験できるようなことではなく、普段できない体験に対する満足度も非常に高い。さらに、援助活動を通して現実を知り、それがボランティア活動の勉強になり、被災地域の人々とのふれあいを体験することで感動の体験をする事ができたという面での満足度が高い。

②大学生・専門学校生（表2）

ボランティア活動参加前の期待が高かった項目は、「手助け」「現実を知る」「成長」「普段できない体験」「ふれあい」「社会に役立つ」などであった。被災地域の人々への援助の気持ちや被災者とのふれあい、現実に立ち向かうことでの人間的な成長などに対する期待が高いことがわかる。大学生や専門学校生も、中高生同様の期待を示していると考えられる。

ワークキャンプを終えて、満足度の高かった項目は、「出会い」「普段できない体験」「現実を知る」「感動の体験」「ふれあい」「ボランティアの勉強」「長期的な援助の気持ち」「自分を見つめ直す」などであった。最も反応率の高かったのは、中高生同様に「出会い」であり、参加者を含めたボランティアの人々、あるいは被災地域の様々な人々との出会いに対する満足度が特に高い。また、非日常的な活動であるがゆえに普段できない体験に対する満足度も非常に高い。さらに、援助活動を通して現実を知り、感動の体験をし、被災地域の人々とのふれあいを体験することで、ボランティア活動の勉強になっていることがわかる。ワークキャンプを通じて、長期的な援助の気持ちを持つようになったことや、自分を見つめ直すことができたという満足度も高い。

③社会人（表3）

ボランティア活動参加前の期待が高かった項目は、「手助け」「現実を知る」「長期的な援助の気持ち」「社会に役立つ」「ふれあい」「成長」などであった。他の年代に比べて、長期的な援助の気持ちが高い反応率を示している。被災地域の人々への援助の気持ちやふれあい、現実に立ち向かうことでの人間的な成長などに対する期待は、他の年代とほとんど同様の傾向を示している。しかし、他の年代に比べると、ほとんどの項目で、社会人は他の年代よりも期待が低く、多くを期待しても、「現実そんなに甘くない」ということを認識しているのが社会人の特徴であるといえる。

ワークキャンプ後、満足度の高かった項目は、「出会い」「普段できない体験」「現実を知る」「感動の体験」「長期的な援助の気持ち」「ふれあい」「ボランティアの勉強」「自分を見つめ直す」などであった。これらの項目は、大学生や専門学校生と同じ項目であり、社会人も大学生らと同様の満足を得ていることがわかる。最も反応率の高かったのは、他の年代と同様に「出会い」であり、様々な人々との出会いに対する満足度が特に高い。また、普段できない体験に対する満足度も非常に高い。さらに、援助活動を通して現実を知り、感動の体験をし、被災地域の人々とのふれあいを体験することで、ボランティ

表1 参加前の期待と参加後の満足（中高生）

項目	参加前	参加後	p
手助け	1.48	2.34	***
発見	2.25	2.38	N.S.
感動の体験	2.00	1.71	***
能力・技術を生かす	2.99	2.88	N.S.
出会い	2.01	1.22	***
社会に役立つ	1.89	2.34	***
自分を見つめ直す	2.44	2.15	***
仕事に役立つ	2.79	2.53	***
長期的な援助の気持ち	2.31	2.09	**
普段できない体験	1.67	1.32	***
共感	2.07	2.24	*
成長	1.83	2.18	***
現実を知る	1.72	1.49	***
ふれあい	1.86	1.69	**
ボランティアの勉強	1.92	1.61	***
時間の有効利用	2.56	2.03	***
新しい技術や経験	2.44	2.18	**

*:p<.05, **:p<.01, ***:p<.001

表2 参加前の期待と参加後の満足（大学生）

項目	参加前	参加後	p
手助け	1.63	2.45	***
発見	2.51	2.65	*
感動の体験	2.25	1.87	***
能力・技術を生かす	2.96	2.87	N.S.
出会い	2.12	1.29	***
社会に役立つ	2.01	2.52	***
自分を見つめ直す	2.22	2.09	**
仕事に役立つ	2.76	2.50	***
長期的な援助の気持ち	2.14	2.04	*
普段できない体験	1.90	1.40	***
共感	2.17	2.40	***
成長	1.79	2.44	***
現実を知る	1.70	1.66	N.S.
ふれあい	1.92	1.87	N.S.
ボランティアの勉強	2.20	1.92	***
時間の有効利用	2.47	2.21	***
新しい技術や経験	2.47	2.31	**

*:p<.05, **:p<.01, ***:p<.001

表3 参加前の期待と参加後の満足（社会人）

項目	参加前	参加後	p
手助け	1.66	2.48	***
発見	2.87	2.67	*
感動の体験	2.66	1.96	***
能力・技術を生かす	3.19	2.95	**
出会い	2.41	1.40	***
社会に役立つ	1.95	2.59	***
自分を見つめ直す	2.41	2.06	***
仕事に役立つ	3.33	2.58	***
長期的な援助の気持ち	1.94	1.96	N.S.
普段できない体験	2.18	1.52	***
共感	2.22	2.41	*
成長	2.09	2.53	***
現実を知る	1.92	1.74	*
ふれあい	2.08	1.96	N.S.
ボランティアの勉強	2.47	2.03	***
時間の有効利用	2.58	2.30	***
新しい技術や経験	2.90	2.53	***

*:p<.05, **:p<.01, ***:p<.001

ア活動の勉強になっている。ワークキャンプを通じて、長期的な援助の気持ちを持つようになったことや、自分を見つめ直すことができたという満足度も高い。

9) ボランティア活動のイメージ変容

① 中学生 (表4)

参加前のボランティア活動のイメージは、「自発的な」「責任感のある」「積極的な」「感動がある」「信頼できる」「まじめな」「嬉しい」「本物の」などのイメージが強く、ほとんどの項目でそのイメージは肯定的である。

参加後のイメージを見ると、参加前に比べて肯定的になった項目は、「魅力的な」「本物の」「人気のある」「身近な」「日常的な」「明るい」「不安がない」「感動がある」「嬉しい」「創造的な」「自由な」「楽しい」の12項目である。

今回のワークキャンプによって、中学生はボランティア活動をより身近に感じ、日常的な活動として認識していることがわかる。このことは、ワークキャンプが中学生のボランティア活動に対する意識を高めたこと明確に示している。

② 大学生・専門学校生 (表5)

参加前のボランティア活動のイメージは、中学生と同様の傾向を示しており、そのイメージは肯定的である。参加前に比べて参加後に肯定的になった項目も中学生と全く同じである。ただ1項目、「自発的な」というイメージが若干弱まっているものの、他の項目に比べて最も肯定的である。

③ 社会人 (表6)

参加前のボランティア活動のイメージは、「自発的な」「積極的な」「責任感のある」「まじめな」「感動がある」「信頼できる」「魅力的な」「本物の」「嬉しい」などのイメージが強く、他の参加者タイプ同様にほとんどの項目でそのイメージは肯定的である。

参加後のイメージを見ると、参加前に比べて肯定的になった項目は、「魅力的な」「本物の」「人気のある」「身近な」「日常的な」「明るい」「感動がある」「嬉しい」「自由な」「楽しい」の10項目である。他の参加者タイプに比べると、より肯定的に変化したイメージの数は少ないが、イメージが明らかに否定的になっている項目は皆無で、参加前のイメージ判断が他の年代に比べると、的確であったことがうかがえる。

表4 参加前と参加後のボランティア活動のイメージ (中学生)

項目	参加前	参加後	p
自発的な	1.79	1.83	N.S.
魅力的な	2.69	2.35	***
本物の	2.47	2.23	**
人気のある	4.07	3.49	***
責任感のある	1.81	1.82	N.S.
身近な	3.24	2.42	***
日常的な	3.53	2.67	***
かっこいい	3.62	3.53	N.S.
明るい	3.10	2.60	***
まじめな	2.38	2.45	N.S.
信頼できる	2.35	2.25	N.S.
不安がある	3.77	4.11	***
感動がある	2.18	1.81	***
嬉しい	2.54	2.14	***
積極的な	1.87	1.77	N.S.
創造的な	3.11	2.68	***
自由な	3.34	2.82	***
楽しい	3.02	2.32	***

p<.01, *p<.001

表5 参加前と参加後のボランティア活動のイメージ (大学生)

項目	参加前	参加後	p
自発的な	1.72	1.84	*
魅力的な	2.60	2.42	**
本物の	2.80	2.61	**
人気のある	4.02	3.53	***
責任感のある	2.03	2.06	N.S.
身近な	3.29	2.59	***
日常的な	3.58	2.81	***
かっこいい	3.75	3.76	N.S.
明るい	3.13	2.76	***
まじめな	2.37	2.47	N.S.
信頼できる	2.60	2.59	N.S.
不安がある	3.69	3.88	*
感動がある	2.22	2.02	***
嬉しい	2.60	2.31	***
積極的な	1.90	1.93	N.S.
創造的な	2.83	2.60	***
自由な	3.26	2.90	***
楽しい	2.94	2.52	***

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

表6 参加前と参加後のボランティア活動のイメージ (社会人)

項目	参加前	参加後	p
自発的な	1.69	1.80	N.S.
魅力的な	2.52	2.36	*
本物の	2.63	2.44	**
人気のある	3.85	3.42	***
責任感のある	2.07	2.10	N.S.
身近な	3.09	2.34	***
日常的な	3.31	2.51	***
かっこいい	3.76	3.80	N.S.
明るい	3.10	2.73	***
まじめな	2.23	2.30	N.S.
信頼できる	2.46	2.33	N.S.
不安がある	3.86	3.97	N.S.
感動がある	2.36	2.10	**
嬉しい	2.65	2.43	**
積極的な	1.98	2.00	N.S.
創造的な	2.73	2.62	N.S.
自由な	3.19	2.86	***
楽しい	2.93	2.58	***

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

10) ワークキャンプに参加しての満足度

地域の人との交流では、大学生・専門学校生の30%、社会人男性25%、社会人女性21%が満足していないと答えており、活動内容の影響や被災地域への理解が十分でないことがうかがえる。ワークキャンプ全体の満足度は9割を超えており、参加者タイプによる差異はみられない。

11) ボランティア活動の継続意欲

ボランティア活動の継続意欲は、参加者タイプ(年代)にかかわらず非常に強く、8割以上が周囲の人への参加を勧めたいと感じている。

キャンプ・アーメックが東京YMCA 長期キャンプに及ぼした影響

○谷戸一雅（余暇問題研究所）

高橋和敏（余暇問題研究所）

キーワード：キャンプ・アーメック、長期キャンプ、野尻学荘、東京YMCA

1. はじめに

1932年7月、東京YMCA野尻学荘（以下野尻学荘と略）は、男子中高校生のための長期キャンプとして設立された。設立以来、第二次世界大戦による三度の中断はあるものの1995年7月で60回目のキャンプを迎え日本では歴史あるキャンプとして知られている。

今日までの60年余り、野尻学荘を支えてきた東京YMCAや協力者の努力は当然ながら、その設立に心血を注いだ人々の努力もまた忘れてはならない。そもそも野尻学荘は、「少年の成長を啓発する場」¹⁾として用意され、「具体的なキャンプの見本としてはキャンプ・アーメックがあり・・・略」²⁾と見られるように、青少年の成長を掲げキャンプ・アーメック（以下アーメックと略）を手本に設立された。このように設立時にキャンプの趣旨を明確に打ち出し、それを実現すべくモデルの存在が今日に至る伝統を築いたのだろう。

その伝統を省みることは、今後キャンプをはじめ様々なレクリエーション活動を展開する上で大いに参考になるものと思われる。そこでこの伝統を生み出したひとつの源流ともいえるアーメックの影響、存在を検討するに至った。そしてそのために、文献を中心に次の項目に沿って検討を進めた。1)野尻学荘の設立経緯 2)野尻学荘設立時のアーメックの概要 3)アーメックの影響。さらにアーメックについては現地視察も行った。

2. 野尻学荘の設立経緯

野尻学荘は前述の如く、1932年（昭和7年）7月長野県野尻湖畔に設立された。設立当初からいわゆるレジデンシャル・キャンプの形態をとり、グループ・ワークを重視し、水泳、カヌー、登山、絵画、音楽など様々なプログラムが展開されてきた。設立当初においては、最長5週間のキャンプ期間を設定していた。その後、戦争など社会情勢の影響を受けキャンプ期間は短縮されたりしたが、1952年（昭和27年）から2週間に定められ今日に至り長期キャンプの伝統は守られている。

その設立過程をみると、まず初めに着目すべき点は東京YMCAの少年事業であろう。1923年（大正12年）東京YMCAは少年事業において全人教育の実践をめざした。全人教育とは「青春時代の青少年を、グループシステムにより智育、霊育、体育、奉仕、訓練の諸方面より指導する」³⁾ことであり、青少年の望ましい成長を目的としていた。その実践の場のひとつとしてキャンプも行われていた。

次に注目すべき点は、この少年事業に小林弥太郎（以下小林と略）が関わっていたことであろう。小林は1922年（大正11年）から少年部の委員として東京YMCAに奉仕し、中でもキャンプ活動に多大な貢献をしていた。小林は1931年（昭和6年）アーメックを訪問し、その施設やプログラムなどに深い感銘を覚え、長期キャンプ設立へ向けて影響を受けた。そして自らキャンプ地を野尻湖畔に入手し、東京YMCAに寄贈した。一方、東京キリスト教

青年会百年史によれば、東京YMCAもキャンプの教育的効果をより推進するため長期キャンプの導入が検討され、先の小林の寄付もありその結果野尻学荘が設立された。

3. アーメックの概要（野尻学荘設立時）

アーメックは1921年、テイラー・スタットンによって設立された少年を対象としたキャンプである。カナダのオンタリオ州アルゴンクイン・パーク内カヌー・レイク畔にある。

1930年頃のアーメックの様子は、H. S. DIMOCK, C. E. HENDRY編「CAMPING AND CHARACTER」に詳細は述べられている。それによれば、アーメックは、基本的にはキャンプにおいて少年の人格形成、成長を掲げ、その実現のために数週間のキャンプ期間を設定し、カヌー、ヨット、クラフト、水泳、乗馬など自然を十二分に生かしてプログラムを展開していた。

4. アーメックの影響

アーメックが野尻学荘に影響を与えたと思われる一例をあげてみる。

1) キャンプの特色・・・第1回野尻学荘の参加者募集広告には、キャンプの特色として「長期間の個人的指導」、「個性と社会性の助長」など教育的側面をあげている。

アーメックにおいても、キャンプは人格形成や社会性の発達過程などに関し、有用な側面を持つとしている。

2) プログラム・・・前出募集広告プログラムの項をみると、「プログラムは、参加者、両親、指導者の三者の希望を基礎として作成する。指導者として我等は、次のごとき諸点を助長したいと希望する。」⁴⁾とある。「次のごとき諸点」として、「1. 天分や興味を発見してそれを助長したい」、「2. 他人と協力して考えたり仕事をする習慣を助長したい」など9項目みられる。アーメックはキャンプの展開にあたり、参加者、両親、指導者の目的を把握し、それを統合してキャンプを進めている。また、指導者の目標をみると野尻学荘の「次のごとき諸点」に色濃く反映していると思われる点が多くみられる。

5. まとめ

アーメックが、野尻学荘に及ぼした影響として考えられる点は、キャンプの特色、プログラム、期間、目的などハード、ソフトの様々な面にあると思われる。ともすると、ハード面のみを重視する例が目立つが、野尻学荘はソフト面でもアーメックを参考にし自らの姿勢を創造してきた。アーメックは設立以来、独自の姿勢を保ち75年、現在は創設者テイラー・スタットン三世が運営にあたっている。その伝統は脈々と受け継がれ、キャンプの根幹にある思想の重要性を物語る好例ではないだろうか。このアーメックを支える思想が野尻学荘に継承され60有余年にわたる伝統を築き上げてきたものと考えられる。

引用および参考文献

- | | | | | |
|----------|-----------------------|----------------------------|--------|---------|
| 1)、2)、4) | 東京YMCA | 光に歩めよ | 東京YMCA | 1996年3月 |
| 3) | 東京キリスト教青年会 | 百年史 | 斉藤 実 | 1980年5月 |
| 5) | 東京YMCA | その生涯は水晶の如く | 星野達雄 | 1980年6月 |
| 6) | ASSOCIATION PRESS | | | |
| | CAMPING AND CHARACTER | H. S. DIMOCK, C. E. HENDRY | | 1929年 |

現代女子学生の健康意識について

○生方盈代（国立音楽大学）
音海哲子（相模女子大学）
藤井陽江（立教大学）

キーワード： 女子学生 健康観 ライフスタイル

1. はじめに

我が国の平均寿命が延び人生80年といわれるが、生涯を健康で生き生きと過ごせることは大きな幸せであると言える。それ故健康やスポーツ、体力、運動等に対する社会的関心が急速に高まってきている。我々の日常生活は家庭を中心として、学校、職場、社会など環境の広がりの中でさまざまな刺激に反応し心身の健康の調和を保っているが、この調和を乱す要因はライフスタイルの喫煙、飲酒、日常の食事、運動パターン等の行動傾向に関連があり、これらはその基となる個々の健康に対する考えや日常生活の仕方に大きく左右され影響されると考えられているので、現在の各自のライフスタイルを自覚し、日常生活を点検し将来に向けて質の高い健康づくり、健康増進への動機づけとなるよう、さらに各人における健康観の確立のため、健康度チェック、健康意識調査を実施し、健康教育の一助とする。

2. 目的

現代の異常現象ともいえる健康ブームに乗じて、さまざまな情報が氾濫している現実の中で、自己の体力・健康状況を把握しておくことは生活上大切なことである。現代女子学生の特徴として、痩せ願望の強い傾向がみられるが、体重調整の用法をみても問題をはらむ健康意識であり、健康教育に携わる者としてはゆゆしき問題であると考えられる。

病弱でなければ健康であるという従来の健康観ではなく、真の健康づくりのために体力だけでなく、栄養、休養、飲酒、喫煙などのライフスタイルを改め、より発展的で逞しく生き甲斐のある生き方が必要であるとの認識をもつウェルネスの考え方にたった健康意識で、学生が自分の将来を考え生活向上に努めるよう教育の一助として、本研究においては学生の実態を個人の身体意識、生活状況、家庭環境から把握することの調査を目的とした。

3. 調査方法と調査対象

調査方法は質問紙法によるアンケート調査 アンケート項目は (1)健康意識について (2)体力について (3)健康生活(睡眠について) (4)ストレスについて (5)将来問題の5項目について。調査対象者は東京都2大学、神奈川県1大学に在籍する女子学生、18歳115名、19歳 111名計226名を対象とした。有効回収率は100%であった。大学は都内・都下・神奈川県 の 2県にわたっており、18歳は91.3%、19歳は59.5%が家族との同居である。

4、結果と考察

調査対象者の形態について 平均身長は18歳で161.0cm、19歳で157.5cmであるが、学生の理想身長は18歳で161.9cmと平均とほぼ同様であり、19歳で163.3cmと5.8cm高いのが理想という結果であった。また、18歳の身長は最高値は170.0cm、最低値は138.0cmで162.0cmが14人と多い、理想身長は最高値が171.0cm現身長とほぼ同様であるが、最低値は150.0cmと現身長値よりも12.0cmの差がみられる。理想身長で160.0cmが27人と一番多く、165.0cmが25人、163.0cmが24人と理想身長がほぼみえてくる回答である。19歳は身長は最高値は173.0cm、最低値は145.0cmで理想身長は最高値は178.0cm、最低値は150.0cm実際の身長よりも最高値、最低値共5.0cm高く希望しており、体重の最高値が67.0kg、理想体重の最高値が58.0kg最低値42.5kg、理想体重は42.0kgと最高値は9.0kg少ない数値をあげているが、最低値は42.0cm実際とほぼ同数であった。平均体重は18歳で50.4kg、19歳で52.61kgであり、理想体重は18歳で46.5kg、19歳で49.1kgと18歳で3.9kg、19歳で3.5kg少ない数値をあげており瘦身体型を思い描いている。

(1) 健康観について

この項目は現代の女子学生の健康意識を探ることで、次代の担い手となり、母親となる学生が正しい健康知識をもち適切な健康管理ができることを目的としたもので、

1)あなたの考える健康状態とはどのようなものかの設問 1・・・いつも他人の援助ができる 2・・・ストレスと上手に付き合っている 3・・・常に心身のバランスを考えて行動できる 4・・・現在、病気や悩みがない状態のこと 5・・・健康活動がともなわずとも健康知識は備えているの5項目からの回答で18歳(4・・・57.4%)、19歳(4・・・50.5%)ともに4の答えが50%以上であり、次いで3の回答はともに30%代で心身のバランスがとれた平穏な状態と考えられている。また、1や2の積極的と思われる項目には10%代以下で、5については19歳では0%であったが、18歳で少数ながら回答があったがこれは健康意識に対して低い評価をもっているといえる。

2)今、あなたは健康だと思いますかに対しては、18歳では3の普通が50.4%であるのに対して、19歳は37.8%であった。2の良い、4のあまり良くないは18歳・19歳共20%代であった。

3)健康度チェック

実際の健康度チェックとして16項目あげ 1-かなり傾向がある 2-傾向がある 3-普通 4-あまり傾向がない 5-傾向がない の5段階の中での回答を得た。

その結果は2-傾向があるが多いのは“めまい・立ちくらみ”で18歳が41.7%、19歳で30.6%、“便秘”で18歳が28.7%、19歳で27.0%、“肩凝り”では18歳で40.9%、19歳で29.7%と“めまい・立ちくらみ”“肩凝り”で18歳が19歳よりも10%以上多い結果であった。3-普通 4-あまり傾向がないが60%以上を占める結果は“風邪引き”が18歳で3-33.9%、4-29.6%、19歳で3-31.5%、4-21.6% “すぐに動機や息切れがする”が18歳で3-40.9%、4-23.5%19歳で3-43.2%、4-24.3%、動くことで息切れがする傾向にあるのは18歳で13.0%、19歳で15.2%であった。“常にイライラする”が18歳で3-40.9%、4-25.2%、19歳で3-40.5%、4-19.8%であったがかなり傾向があるが18歳で2.6%、19歳で4.5%、傾向があるは18歳で17.4%、19歳で15.3%と20%が常にイライラする傾向であると回答の結果であった。“偏頭痛”は18歳で5が30.4%、19歳が25.2%で、18歳で2が28.2%、19歳が25.2%と5と2で18歳と19歳では逆の結果であった。“下痢”

は18歳、19歳共にまとめた数値では80%以上の者が3、4、5の結果であった。“アレルギー症状”は1と2の数値をまとめると18歳で38.3%、19歳で36.0%で、5の回答は18歳で37.4%、19歳で36.0%とほぼ同率であった。“腰痛”においては1項目は18歳で5.2%、19歳で9.9%であるが、他の4項目は20%前後のほぼ同率で特別腰痛を訴える学生は少ない結果であった。

“夜寝付きがよくぐっすり眠れる”に対しても3と2の項目をまとめると18歳で66.1%、19歳で54.0%は回答しているのに対して、18歳で4が13.9%、5が7.0%、19歳は4がないと回答している、残りの13.0%と19歳の18.9%の学生はかなり傾向があると回答している。精神面での“悩み事”は傾向があるが18歳で33.9%、19歳で31.5%と学生は悩みの傾向にある結果であった。あまり悩まないと回答しているのは18歳で19.2%、19歳で12.6%となっている。

“気分転換”は2、3共18歳、19歳ほぼ同率であるが1は18歳で3.5%、19歳は9.0%であるのに対して、“行動の積極性”は19歳は3-49.5%が多く2と3は22%前後でほぼ同率であり、18歳は4の20.9%が多くこの項目に対して43.5%が無回答であった。この無回答は積極性のなさを表しているかのようである。“意識的な身体活動”は3が18歳は42.6%、19歳は42.3%で4は18歳が31.3%、19歳が31.5%であった、また、“朝、気持ちよく目覚める”は3が18歳は38.3%、19歳は37.8%で4が18歳は27.8%、19歳は23.4%と両方ともほぼ同率であった。これらの項目に対する回答はかなり傾向があるから傾向がないまでの5項目にばらつきがあり、健康状態をはっきり自覚できない状態の表れと考えられる。

4)喫煙の習慣がありますかの設問は“ない”の18歳は69.6%、無回答が25.2%、19歳は96.4%となっていて少数ながら“ある”は18歳5.2%、19歳3.6%と未成年で喫煙の習慣をもつ学生が見られた。

5)飲酒の習慣では18歳、19歳共に80%以上ないと回答している。

(2)体力観について

1)体力についての考えの設問は 1・運動意欲があること 2・筋持久力・全身持久力があること 3・日常生活が充分にこなせる 4・将来設計実現のための精神・身体的能力が備わっていること 5・体力はなくても生きていけるの5項目の中で各自の考えに当てはまるものの回答で、2を回答した学生が一番多く18歳で46.9%、19歳が43.2%次いで3は18歳が26.0%、19歳が26.1%であり、次いで1項目、4項目、5項目の順であり5の回答は体力をあまり必要としていない学生が少数ながらいることは問題に値する。また、19歳で項目を数項選ぶものが1と2が2人、1と3が3人、2と35人、1と2と3が1人、3と4が1人、1と2と3と4が2人と○印をつけた学生がいて1項目ではとらえる事ができないと考えている学生がいた。

2の持久力があることが大半の学生の体力観であるが、実際の運動実施状況を調べてみると、週1回実施が18歳で33.9%、19歳で26.9%、その他主だった回数は週2回が19歳で14.0%、週3回が18歳で12.2%、週7回が18歳で5.2%、19歳で6.5%であった。1日の運動時間は18歳は平均90分が35.6%と多く、19歳では60分、90分、120分が12.9%と同率であった。内容としては歩行・散歩が多くテニス・水泳・ゴルフ・バドミントン等の種目をあげている。19歳の学生は44.1%が運動を何もしていないと回答しており、また、していると回答した学生もその内容の中で体育の授業をあげている者もいる。

(3)家族のコミュニケーション

気分転換・外での悩み等一番身近な解決手段と思われる家庭の在り方として家族間のコミュニケーションを取り上げ、1~あなたの家族はコミュニケーションが取れています

かの設問に対して1・大変良好 2・良好 3・普通 4・あまり良くない 5・良くないの5項目からの回答を得、その理由を聞いた。大変良好・良好・普通と答える学生は18歳で88.2%、19歳で82.8%と良い状態を回答し、あまり良くないが18歳で9.6%、19歳で13.5%、良くないが18歳で2.6%、19歳で1.8%の回答があった。

家族のコミュニケーションがとれている理由として、一緒にいて楽しいから、家族皆でよく食事をし、よくしゃべる。と家族の会話を掲げている。普通と回答している学生の理由としては家族が仲が良いから、適度にお互い話をする、家族自体はコミュニケーションがよく取れているが私自身はそうでもない、時間がバラバラ、仲は良いがお互いあまり理解をしていない、特別不都合を感じたことがないとあり普通という回答の学生のとらえ方、学生の家族の中での自分の場所、立場が感じられる結果であった。あまり取れていないという理由としては生活の時間がバラバラであり、全員で食事をするのが少ない結果だという回答であった。

2~あなたは家族の中で、コミュニケーションがとれ易いのは誰ですかの項に対して母親との関係が18歳で65.2%、19歳で74.8%とかなり多く姉・妹・兄・弟・父などもあるがとれ易い関係にはないようである。

3~あなたは家族の中でコミュニケーションがとりにくいのは誰ですかの項に対しては父親18歳で48.7%、19歳で49.4%とあげているが、とりにくい人はいないという学生が19歳で23.4%の結果であった。

4~あなたが自分の悩み事を安心して打ち明けられるのは誰ですかの項は18歳で友人が37.4%、19歳で母親39.6%、友人26.1%友人が身近な相談相手となるようである。相手がいないという学生が7.2%の回答だがどのように対処しているのか気掛かりな点である。

5、まとめ

健康状態が良好であることに異論を唱える人はいないと思う。しかしながらあらためて健康を理論的に見直し、健康観の確立のために日々努力をする人はあまり見られないのが実状だと思われる。現代の女子学生は健康とはどのような状態かの質問に、現在病気や悩みがないこと、とか心身のバランスを考え行動できる状態と答え、中でも運動・活動はしなくても健康であると答えた学生が少数ながらいいた。体力についての同じ様な質問には日常生活が十分にこなせること、とか筋持久力・全身持久力があることなどと回答している。そこで日常運動の実施状況を調べてみると、実施している学生は40%に満たない。さらにあなたは今健康ですかときかれて“まあ健康です”と大半の回答がありますが、16項目の健康度チェックをしてみると肩凝りや、偏頭痛、立ちくらみなどがあると答える学生が以外に多くいる。この現状から現代の女子学生は健康や体力に対しての考え、実際の活動もあまり積極的とはいえない。本研究において女子学生を的としたが、次代を担う社会人として、また子供を育む母親となる女子学生が、正しい健康観を持ち、健康・体力についても自分だけの良好な心身体状況にとどまらず近隣地域や、社会にまで影響できる考え方、積極的な働きかけができるよう教育すべきことを確認し、今後の学生指導に役立てたい。

なお本調査に用いた質問紙の質問項目が多数につき内容の詳細については当日の発表にかえさせていただきます。

日本レジャー・レクリエーション学会会則

〈第1章 総則〉

第1条 本会を日本レジャー・レクリエーション学会（英語名 Japan society of Leisure and Recreation Studies）という。

第2条 本会の目的は、レジャー・レクリエーションに関する調査研究を促進し、レジャー・レクリエーションの普及・発展に寄与する。

第3条 本会の事務局は、神奈川県小田原市荻窪1162-2 関東学院大学法学部小田原校地体育館内に置く。

〈第2章 事業〉

第4条 本会は第2条の目的を達するため、次の事業を行う。

1. 学会大会の開催
2. 研究会・講演会等の開催
3. 機関誌の発行ならびにその他の情報活動
4. 研究の助成
5. 内外の諸団体との連絡と情報の交換
6. 会員相互の親睦
7. その他本会の目的に資する事業

第5条 学会大会は、毎年1回以上開催し、研究成果を発表する。

〈第3章 会員〉

第6条 本会は正会員の他、賛助会員、購読会員、および名誉会員を置くことができる。

1. 正会員は第2条の目的に賛同し、正会員の推薦および、理事会の承認を得て、

規定の入会金および会費を納入した者とする。

2. 賛助会員は、本会の事業に財政的援助をなした者で理事会の承認を得た者とする。

3. 購読会員は、本会の機関誌を購読する機関・団体とする。

4. 名誉会員は、本会に特別に貢献のあった者で、理事会の推薦を経て総会で承認された者とする。

第7条 会員は、本会の編集刊行する機関誌（紙）等の配布を受け本会の営む事業に参加することができる。

第8条 会員にして会費の納入を怠った者および会の名誉を棄損した者は、理事会の議を経て会員としての資格を停止されることがある。

第9条 会員は原則として、いずれかの支部に所属するものとする。

〈第4章 役員〉

第10条 本会を運営するために、総会において正会員の中から次の役員を選ぶ。理事25名以上30名以内（内会長1名、副会長若干名、および理事長1名）、監事2名

第11条 会長は、本会を代表し、会務を総括する。

2. 副会長は、会長を補佐し、会長に事故がある時、または会長が欠けたときは、会長が予め指名した順序により職務を代行する。

3. 理事長は、理事会を総括し、理事は会務を執行する。

4. 監事は、会計および会務の執行状況について監査する。

第12条 役員の任期は2年とする。但し、再任を妨げない。役員を選出についての規則は別に定める。

第13条 本会に名誉会長および顧問を置くことができる。

2. 顧問は、本会の会長または副会長であった者および本会に功労のあった者のうちから理事会の推薦により会長が委嘱する。

〈第5章 会議〉

第14条 本会の会議は、総会および理事会とする。

第15条 総会は、毎年1回開催し本会の運営に関する重要事項を審議決定する。

総会は、会長が招集し、当日の出席正会員をもって構成する。

議事（会則改正を除く）は、出席者の過半数をもって決定される。

第16条 理事会が必要と認めた場合、もしくは正会員の1/3以上の開催請求があった場合、臨時総会を開くことができる。

第17条 理事会は理事長が招集し、幹事若干名および事務局員を選出し、会務を処理する。理事会は、運営の円滑化をはかるため、常任理事会を置くことができる。

〈第6章 支部および専門分科会〉

第18条 本会の事業を推進するために、支部ならびに専門分科会を置くことができる。支部ならびに専門分科会についての規則は別に定める。

〈第7章 会計〉

第19条 本会の経費は、会費、寄付金および

その他の収入をもって支弁する。

第20条 会員の会費は次の通りとする。

1. 入会金 1,000円
2. 正会員 年度額 5,000円
3. 賛助会員 〳 20,000円以上
4. 購読会員 〳 5,000円

第21条 本会の会計年度は毎年4月に始まり、翌年3月に終る。

付 則

1. 本会の会則は、総会において出席正会員の2/3以上を得た議決により変更することができる。
2. 本会則は、昭和46年3月21日より一部改訂する。
3. 本快速は、昭和51年5月1日より一部改訂する。
4. 本快速は、昭和55年5月11日より一部改訂する。
5. 本会則は、昭和56年11月8日より一部改訂する。
6. 本会則は、昭和57年6月12日より一部改訂する。
7. 本会則は、昭和58年10月30日より一部改訂する。
8. 本会則は、昭和59年6月9日より一部改訂する。
9. 本会則は、昭和62年10月17日より一部改訂する。
10. 本会則は、平成3年11月10日より一部改訂する。
11. 本会則は、平成5年10月17日より一部改訂する。

専門分科会設置に関する規程

昭和57年6月12日制定

平成7年12月10日改訂

1. 会則第18条規定により、本学会員が専門分科会を設置しようとする場合は、この規定に基づいて行うものとする。
2. 専門分科会の設置は、原則として研究分野を同じくする本学会正会員20名以上の要請があった場合とする。
3. 専門分科会の設置を求めようとする正会員は下記により本学会会長に申請するものとする。
 1. 設立経過および主旨
 2. 名称
 3. 発起人名簿
 4. 連絡事務所
 5. 連絡事務所
 6. その他
4. 専門分科会は次の事項について各年度ごとに本部報告する。
 1. 活動状況の概要
 2. その他必要と認められる事項

支部に関する規程

昭和56年11月8日制定

1. 本学会員が、支部を設けようとする場合には、下記により、本学会会長に申請し、理事会の議を経て総会の承認をえるものとする。
 1. 設立の経過概要
 2. 名称
 3. 支部長および役員
 4. 会則
 5. 会員名簿
 6. その他
2. 各支部の運営は、本部との関係については本規定に従って行われるが、その他の事項については各支部規則においてこれを定めるものとする。
3. 支部は原則として隣接する地域に在勤または在住する本学会正会員20名以上をもって構成する。
4. 支部運営のため経費は支部会費によって賄う

ものとする。支部会費の額は各支部毎に決定するものとする。

5. 支部は次の事項について各年度ごとに本部に報告する。
 1. 役員の変更
 2. 活動状況の概要
 3. その他必要と認められる事項

理事会の運営に関する規程

昭和57年6月12日制定

昭和58年10月30日改訂

平成7年12月10日改訂

1. 会則第17条の規定により、理事会の運営は、会則に定められているほか、この規定に基づいて行うものとする。
2. 理事会は、原則として年に1回以上開催するものとし、理事長がその議長となる。
3. 理事会の招集に当たっては、書面によって付議事項を明示しなければならない。
4. 理事会は、理事の過半数の出席により成立し、議決は出席者の2分の1以上の賛成を必要とする。ただし、表決に当たっては、予め書面（署名捺印）を以って当該議事に対する意向を表示した者を、出席者とみなす。
5.
 - (1) 常任理事会構成員は若干名とする。
 - (2) 常任理事会は、理事会決定の方針にもとづき、日常業務の執行にあたる。
 - (3) 常任理事の議事録（概要）はできるだけすみやかに各理事に送付するものとする。
6. 理事会は、業務を遂行するために次のような専門委員会を置く。
総務、研究企画、編集、広報渉外、財務
7. 理事会には、専門的に研究、調査および審議を必要とするような場合には、特別委員会には、理事以外の適任者を委嘱することができるがその人選は理事会の承認を必要とする。
8. その他理事会の運営に必要な事項は、理事会で決定することができるものとする。

「レジャー・レクリエーション研究」 投稿規程

昭和46年3月21日制定

昭和57年6月12日改訂

昭和58年7月1日改訂

平成元年2月2日改訂

平成8年4月1日改訂

1. 投稿者は、本学会会員であること。ただし、編集委員会が必要と認めた場合にはこの限りではない。
2. 投稿内容は、レジャー・レクリエーションを対象とした研究領域における原著論文、研究資料、評論、実践報告、その他とし、完結していること。また、他誌に未投稿、未発表のものに限る。
3. 投稿に際しては、原稿の冒頭に前項に挙げた区分の内、該当するいずれかの種類を朱書し明記する。
4. 原稿は、400字詰原稿用紙（A4版）に黒インク書きまたは、ワープロ（A4版、800字：25字×32行）で仕上げるものとし、本文はひらがな現代かなづかいとする。また、外国語のかな書きにはカタカナを用いて表記し、欧文の記述にあたってはタイプまたは活字体を用いて表記すること。
5. 図表および写真は、オリジナルなものとし、必ず通し番号とタイトルを記入して一枚ずつ台紙に貼り、本文とは別に一括して添付する。また、図表等の挿入箇所は本文欄外に図表番号をもって朱書し、明記する。
6. 投稿者は、氏名と共に勤務先または所属機関名を（ ）内に表記すること。
7. 論文および資料の原稿には、欧文による題名、著者名、所属機関名、抄録、キーワード、ならびに欧文抄録とキーワードの和訳を別紙により添付する。なお、本文が欧文原稿の場合には、邦文による同様な様式を整えて添付する。
8. 引用文献は、原則として本文の最後に著者名のA、B、C順に通し番号をつけて一括し、雑誌の場合には、著者、題目、雑誌名、巻号、ページ、西暦年号、の順に、単行本の場合には、著者、書名、ページ、発行所、西暦年号、の順に記載する。なお、本文中の引用箇所の右肩上に該当する文献番号を付すこととする。
9. 原稿は一篇につき図表・写真共刷り上がり10頁（400字詰原稿用紙約35枚）以内を原

則とする。ただし、前記規定以上の頁数を必要とする場合や、特殊な印刷を必要とする場合には、編集委員会の承認を経た上で、その費用の超過分を投稿者の負担とする。

10. 掲載論文については、別刷り30部を執筆代表者に無償で送付する。なお、更に部数を必要とする場合には、投稿時点に申し出ること。ただし、その場合の費用は投稿者の負担とする。
11. 投稿にあたっては、オリジナル原稿とそのコピーを3部添付して提出する。なお、掲載論文にあたっては、その原稿は返却しないものとする。
12. 投稿原稿の採否については、本学会編集委員会において決定する。なお、採否の決定にあたっては、編集委員会が委嘱する審査員2名の審査結果を尊重する。
13. 本誌は、日本レジャー・レクリエーション学会の機関誌として年2回（9月、3月）の発行を予定し、本誌への掲載は原稿受理の順序による。
14. 大会発表論文集への投稿規定については、別に定める。
15. 本誌への投稿は、下記編集委員会宛てに行うこととする。

〒250 神奈川県小田原市荻窪1162-2
関東学院大学法学部（小田原校地）体育館内
日本レジャー・レクリエーション学会編集委員会
電話・FAX 0465-32-2617

「レジャー・レクリエーション研究」

投稿募集

研究論文の投稿は、常時受け付けております。
積極的にご投稿下さい。

（編集委員会）

学会大会号編集企画

前野淳一郎 (学会会長)	石井 允 (学会常任理事)
秋吉 嘉範 (学会副会長)	坂口 正治 (学会常任理事)
黒田 信寛 (学会副会長)	嵯峨 寿 (学会常任理事)
高橋 和敏 (学会副会長)	下村 彰男 (学会常任理事)
田中 鎮雄 (学会副会長)	西田 俊夫 (学会常任理事)
鈴木 祐一 (学会監事)	西野 仁 (学会常任理事)
永島 正信 (学会監事)	松浦三代子 (学会常任理事)
鈴木 秀雄 (学会理事長)	松田 義幸 (学会常任理事)
荒井 啓子 (学会常任理事)	油井 正昭 (学会常任理事)
飯田 稔 (学会常任理事)	

学会大会号編集委員会

鈴木 秀雄 (委員長)	
小田切毅一	西田 俊夫
石井 允	沼澤 秀雄
坂口 正治	菊 幸一

Editorial Committee for Papers of the 26th National Congress

H.Suzuki (Chief Editor)	
K.Odagiri	T.Nishida
M.Ishii	H.Numazawa
M.Sakaguchi	K.Kiku

Subscription published two times a year: one issue in Japanese with abstracts in English and another issue in only Japanese, by Japan Society of Leisure and Recreation Studies (JSLRS). Subscription is available to libraries, institutions, department, and individual members at the equivalent amount of foreign currency of 6,000 Japanese yen as a member (U.S. \$60 at present inclusive of postage).

Address: Subscription Manager, Japan Society of Leisure and Recreation Studies (JSLRS) .
c/o; Kanto Gakuin University
1162-2 Ogikubo, Odawara-city, Kanagawa, 250, Japan
Tel. & Fax. your country code + 81 + 465 - 32 - 2617

『レジャー・レクリエーション研究』

第34号

1996年10月30日 印刷

1996年11月5日 発行

編集・発行人：鈴木 秀雄

発行所：日本レジャー・レクリエーション学会事務局

〒250 神奈川県小田原市荻窪1162-2

関東学院大学法学部(小田原校地)体育館内

電話・FAX 0465-32-2617

印刷所：有限会社 石橋印刷

神奈川県小田原市飯泉1033

電話 0465-47-9171(代)

FAX 0465-48-2411

あなたの「国際交流」、お手伝いします。

市民レベルで多彩なひろがりを見せる、
 国際交流新時代。その主役はもちろん、あなたです。

時代のニーズに応じて、 「JTB国際交流センター」、誕生!

Q 少年サッカーチームのコーチをしています。本場ブラジルで交流試合をしたいのですが...

A ブラジルではサッカーは国民的なスポーツです。クラブの数も驚くほど多くあります。せっかくですから、あのラモスが少年時代に所属していたチームとお試しなんていかがですか。試合相手はもちろんおまかせください。

Q 来年、北京で開催される世界女性会議のNGOフォーラムに参加したいのですが...

A NGO(非政府組織)フォーラムのある国際会議は、いつ、どこで開催されるのか、プログラムの詳細や会議登録の方法はどうなっているのか、そしてどんなNGO団体が世界から参加しているのか等、すべてあなたに代わって調べ、必要な手続きを代行します。

Q 市制30周年を迎え、海外の都市と姉妹都市提携を考えているのですが、どうすればいいのでしょうか。

A 姉妹都市交流で大切なのは、永永相互の交流です。でも交流の相手を手探しから、その内容を定めるまてには、大変な労力と豊富な情報が必要で、JTB国際交流センターなら、あなたの市にマッチしたプランを提案できます。

Q ドイツでは、若者が農村を大切に育て、活気と魅力あるものにして、というところですが、本当ですか。

A ヨーロッパでは美しい自然と豊かな作物を売り物にして農家が民宿を営み、活気と魅力に満ちあふれた村作りを多くの地域で行なっています。実際にそうした農家に泊りこんで、作業の手伝いをしてみると、あなたが求めているものがきっと見つかるはずです。

Q 茶道を教えています。その中に留学生がいて「私の国の友達にも日本の伝統文化を教えてほしい」と言われているのですが...

A 茶道はもちろん、華道や折り紙など日本の文化を知りたがっている人々は、世界中にたくさんいます。そうした人々を訪れ、ふれあう場をつくるもの、私たちの役割です。民間の文化大使としてのあなたの意欲をいっぱい応援します。



Q 友達と励んでいるコースの一周年の成果を海外で発表するなんて、できるのでしょうか。

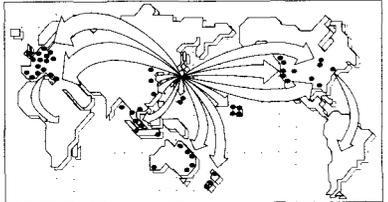
A それならいっそ、音楽の都ウィーンで、現地の同好の人たちと交流コンサートを開催するなんていかがですか。相手先を探ることから、コンサートホールの手配まで、すべておまかせください。絵のサークルの方々には、パリでの交流展示会もお手伝いします。

JTB国際交流センターは、 あなたの「国際交流」を期待通りに実現します。

いま、国際交流は、個人やグループが主流となって、世界の各地で活発で多彩な活動を繰りひろげる市民レベルの新しい時代を迎えています。それに伴い、いままでの観光旅行の枠を超えたご要望やご相談が、私たちに寄せられています。「JTB国際交流センター」は、そうした多彩なニーズにお応えするべく、30年にわたる豊富な実績とノウハウ、そして業界一のグローバルなネットワークを結集して誕生。あらゆるジャンルで、あなたが実現したい国際交流を強力にバックアップします。

JTB国際交流センターなら、 例えばこんな国際交流ができます。

- 主婦のホームステイ・異文化体験
- 地域国際化(姉妹都市・市民間交流)
- 熟年世代の国際体験交流
- 農村休暇体験
- 趣味・スポーツ・サークルの国際交流
- NGO(非政府組織)海外交流支援プログラム
- 世界の自然環境・動物保護の交流(エコツアー)
- 海外ボランティア活動・交流
- 伝統文化・芸能の海外紹介
- 青少年の国際交流プログラム



いま国際交流をご検討されている方。まず私たちに、お気軽にご相談ください。

JTB国際交流センター

JTB Global Link
 ☎ 03-5512-0510
 FAX. 03-5512-0526 受付時間(月~金 9:30~17:30)

JTB海外旅行虎ノ門事業部
 東京都港区虎ノ門1-26-5 虎ノ門17森ビル7階

旅の笑顔をお届けするのが 京王観光の仕事です。

▷JR・航空券

JRをはじめ、すべての航空会社の指定代理店として
発売を承っております。

▷旅館・ホテル

全国の一流旅館やホテル協会に加盟のホテルと
協定を結び、ご予約を承っております。



▷各種パッケージツアー

オリジナル商品「キングツアー」の他、各種の国内・
海外パッケージツアーの予約販売を承っております。

▷団体旅行

職場旅行・ご招待旅行などのグループ旅行の
ご相談も承っております。

渋谷支店 ☎(03)3462-0351

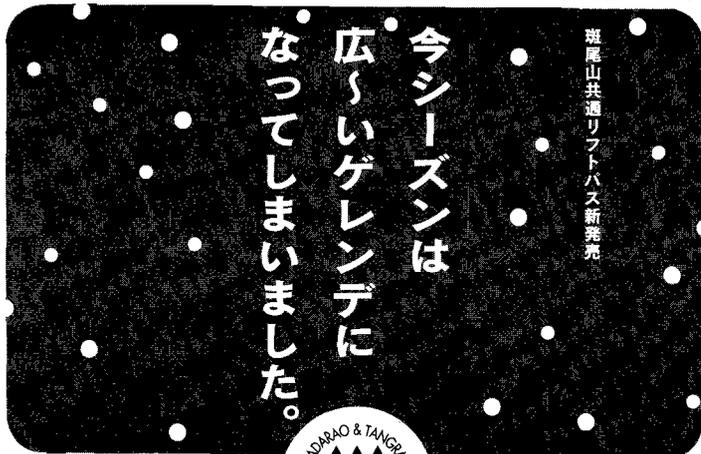
本社：東京都渋谷区初台1-53-7 京王初台駅ビル ☎(03)5351-7141

KEIO

旅 京王観光株式会社

運輸大臣登録一般旅行業務第10号 
JATA(日本旅行業協会)加盟

Mt. MADARAO AREA NEWS '97 WINTER



今シーズンは
広いゲレンデに
なっていました。

斑尾山共通リフトバス新発売



斑尾高原スキー場 + タングラムスキーサーカス
= マウント斑尾エリア誕生

リフトバス共通化により、スキーでもスノーボードでも、
両スキー場が自由に行き来OK。
ゲレンデ総面積275ha、コース総数29本、
リフト総数25基のBIGなゲレンデに生まれ変わります。
◎共通リフト1日バス：おとな4,400円◎

■'97WINTER 特別ご宿泊プラン

ホテル1泊2食+共通リフト1日バス付
期間：'96.12/16～'97.4/4
(ただし12/28～1/5を除く)

1室利用人数	平日	休前日
2名様	17,500円	20,000円
3～4名様	16,000円	17,500円

(料金はすべてお1人様・税別)

■スノーボードセーフティースクール 毎日開校

リフトの乗り降りや転び方、ボード滑走の基本操作など、安全に楽しむための基礎を無料でお教えします。1日2回、約40分のレッスンで誰でも自由に参加できます。

上信越自動車道/小幡I.C.-更埴JCT間開通!
信州中野I.Cより40分

斑尾高原ホテル・スキー場

〒389-22 長野県飯山市斑尾高原
☎0269-64-3311(ホテル) ☎03-3216-2611(東京本社)

<インターネット ホームページ> <http://www.avisnet.or.jp/~madarao>

串焼と
お楽しみ小皿料理



マスタッシュ

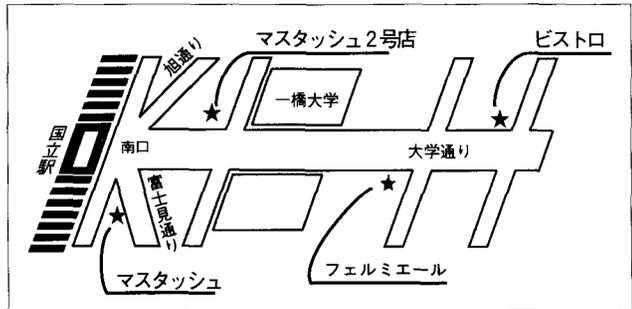
phone 0425-75-9900

フランス料理と
優膳



フェルミエール

phone 0425-73-0923



マスタッシュ
東京都国立市中1-10-8ノア国立ビル2F 〒186
営業時間 5:00PM～0:00AM 年中無休
(ラストオーダー10:30PM)

フェルミエール
東京都国立市中2-19-80 〒186
営業時間 11:00AM～11:00PM 年中無休
(ラストオーダー9:00PM)

*各種パーティのご予約承ります。
*フェルミエールではお客様の送迎を致しております。送迎時間PM 5:00～11:00

時代をカタチに。 確かな技術の証です。

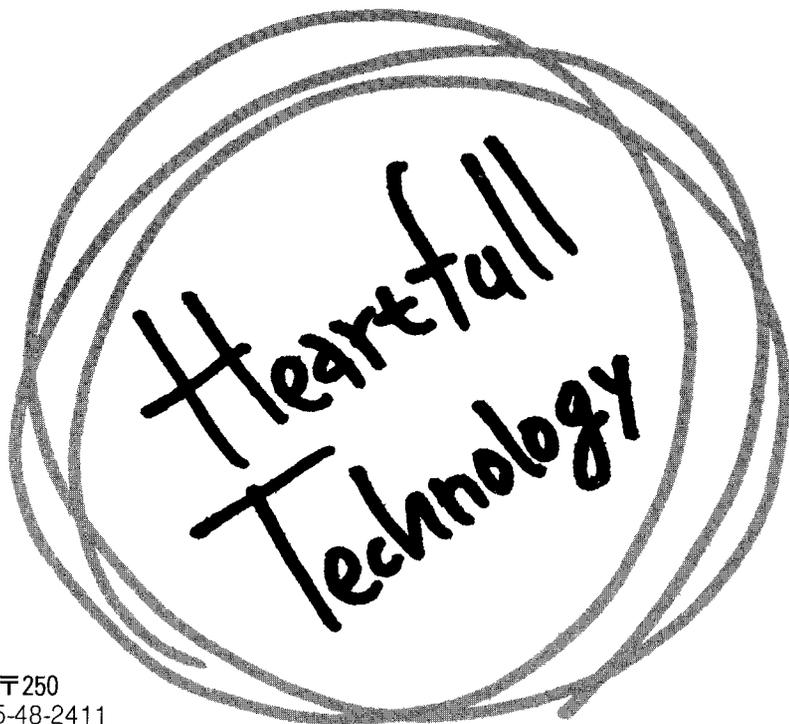
情報・ニューメディアの多様化、転換期を迎えつつある
平成のいま、私たちは、ハイテクノロジーを駆使し
最先端の印刷物の制作と
お客様にとって、
より身近な存在で
応えたいと考えて
おります。

isibashi printing



有限
会社 石橋印刷

神奈川県小田原市飯泉1033 〒250
Tel.0465-47-9171(代) Fax.0465-48-2411



スポーツ用品全般

山田スポーツ商会

〒130 東京都墨田区本所 2-20-9 細井ビル 3F
電話 (03) 3621-7766 FAX (03) 3621-7770

夢がフィット！心がウェルネス！

社会体育学科

- スポーツ・健康コース
- スポーツ・マネジメントコース
- アウトドア・アクティビティーコース
- マリーン・アクティビティーコース

授業時間 / 18:00~20:30

キャンパスは、お洒落なカフェやブティックが並ぶ「自由が丘」。満足度120%のスクールライフを応援する好環境です。本校の大きな特色のひとつは、日本で初めて社会体育専門学校の認可を受けているところ。各分野のエキスパートを講師に迎え、少人数制による交流ゆたかな授業展開を実施して

ます。また2年生時にはカリフォルニア大学ロングビーチ校へ2週間にわたる研修旅行を実施。先進のフィットネス理論にふれたり、ディズニーランドをエンジョイしたり充実の体験学習を行っています。スポーツインストラクターへのウォーミングアップ、本校がサポートします。

資格取得は得意

厚生大臣認定 健康運動実践指導者
(講習免除)

キャンプ指導者初級

スポーツクラブ専門指導員

日本 救急法救急員

日本 水上安全法救助員

文部大臣認定 公認スキー指導員C級
(申請中)

ボクたちの体事、君の目で確かめて。
学校見学随時受付中

水～金PM6:30～PM8:00

※試験期間などには見学できない場合があります。
事前に電話でご確認ください。

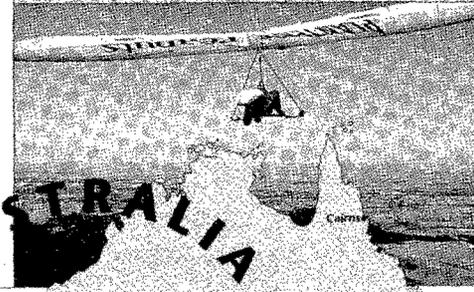
主な就職先

フィットネスクラブ、スイミングスクール、スポーツ関連企業など

東京体育専門学校

〒152 東京都目黒区自由が丘2-19-8
TEL/03-3718-8251(代表)

初め、文化は遊ばれた。



未来のレジャー・レクリエーションを見据えて

私たちは、理想的なレジャー・レクリエーションのかたちの中に“真のゆとり”を求め、日本とオーストラリアにおいて調査・研究活動を始めました。

豊かな自然に囲まれ、生まれながらにしてレジャーマインドを持つオーストラリアの人々。

ここでは古くて新しいレクリエーションとのつき合い方を見いだすことができます。

さらに環太平洋の国々の大なるマツリの数々。

私たちは異文化・国際交流における諸活動を通じて、新しい世紀へ向かうレジャー・レクリエーションの新たな創造と探究を目指します。

また、2000年に開催されるシドニーオリンピックに照準を合わせ、関連する事業・情報収集・研究者の相互交流を推進・サポートするなど、活動の場を広げていきます。

太平洋レジャー・レクリエーション交流会議 Pacific Exchange Committee on Leisure and Recreation

PELR Australia 研究所：8 Seamount Quay Noosa Waters QLD, 4566 Australia Tel./Fax. 001-61-74-42-4898
PELR 東京事務局：〒113 東京都文京区向丘1-16-4 矢川律子 Tel./Fax 03-3811-6016

加盟団体
Cultural Exchange Australia
PELR Australia Centre
Sunshine Coast Language and Cultural Centre
KGCJ Pty. Ltd.
日本セラピューティックレクリエーション協会
日本野外活動教育演習会 (EQOL)

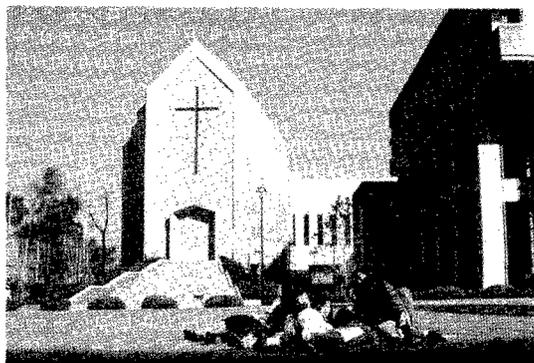


関東学院大学

学長
鴻池 淳志

金沢八景キャンパス（所在地）〒236 横浜市金沢区六浦町4834 （電話）(045)786-7019(入試課直通) [交通] 京浜急行金沢八景駅下車徒歩15分
金沢文庫キャンパス（所在地）〒236 横浜市金沢区釜利谷南3-22-1 [交通] 京浜急行金沢文庫駅下車バス12分、徒歩3分
小田原キャンパス（所在地）〒250 小田原市荻窪1162-2 [交通] J・R・小田急 小田原駅下車徒歩18分

創立112年。キリスト教精神に基づく総合大学



1884年創立、キリスト教精神に基づく総合大学

関東学院大学は、キリスト教に基づく学校教育を行うという建学精神のもとに歩みつづけてきた百年以上の長い歴史と伝統をもち、人文、社会、自然の各系列に学部を置く総合大学です。創立以来蓄積された有形、無形の財産は計り知れません。

現在は、文学部、経済学部、法学部、工学部の他、大学院、研究所なども充実し、学問の発展と社会への貢献に努めています。

潮風香る国際都市“横浜”で学ぶ

キャンパスは、今若者に人気のペイシティ横浜に金沢八景（六浦）キャンパスと金沢文庫（釜利谷）キャンパスの2つがあります。それぞれ首都圏横浜市の中でも、自然と歴史に囲まれた金沢区にあり、東京からでも約1時間と通学にも大変便利な環境です。文学部生が学ぶ金沢文庫キャンパスには、最新の視聴覚施設をはじめ豊富な教育施設を整えるとともに、ナイターも可能な野球場、公認陸上競技場兼ラグビー場など課外活動の施設も充実しています。

経済学部・工学部生が学ぶ金沢八景キャンパスは、潮風香るキャンパスとして有名です。すぐ近くには八景島シーパラダイスというアミューズメントパークもあり、環境は申し分なし。またキャンパス中央のチャペルも一見の価値はあります。

小田原を加えて充実の3キャンパス

横浜の2つのキャンパスに、1991年より法学部の小田原キャンパスが加わりました。小田原駅から徒歩で約18分、雄大な自然を望む高台に広大なキャンパスは位置しています。歴史と文化の薫る都市・小田原の理想的な環境の中にあるキャンパスは、小田原市との公私協力のもとに生まれたもの。既設の学部と有機的な連携を図りながら、時代の要請に応える教育を展開しています。

■設置学部・学科（募集定員）

- 文学部 英米文学科(180) 社会学科(180)
- 経済学部第一部 経済学科(350) 経営学科(350)
- 法学部 法律学科(350)
- 工学部第一部 機械工学科(110) 電気・電子工学科(110) 建築学科(110) 土木工学科(90) 工業化学科(90) 建築設備工学科(90)
- 経済学部第二部 経済学科(経済系/経営系)(260)
- 工学部第二部 機械工学科(50) 電気工学科(50) 建設工学科(建築系/土木系)(110) 工業化学科(50)

8年度入試データ

学部	学 科	志願者数	受験者数	合格者数			倍率(受/合)
				正規合格	補欠合格	計	
文	英米文学科	1,147	1,125	428	109	537	2.1
	社会学科	2,101	2,076	473	75	548	3.8
	計	3,248	3,201	901	184	1,085	3.0
経一	経済学科	3,795	3,694	1,006	0	1,006	3.7
	経営学科	3,344	3,280	981	0	981	3.3
	計	7,139	6,974	1,987	0	1,987	3.5
法	法律学科	2,785	2,673	821	0	821	3.3
	計	2,785	2,673	821	0	821	3.3
	計	2,785	2,673	821	0	821	3.3
工一	機械工学科	1,003	984	301	0	301	3.3
	電気・電子工学科	821	803	320	0	320	2.5
	建築学科	1,317	1,290	251	0	251	5.1
	土木工学科	771	748	200	20	220	3.4
	工業化学科	565	553	250	0	250	2.2
	建築設備工学科	586	555	170	0	170	3.3
計	5,063	4,933	1,492	20	1,512	3.3	

※第二部のデータなど、さらに詳しいデータについては「'97受験ガイドブック」をご請求下さい。

（受験ガイドブック） 6月上旬完成予定 無料

（9年度募集要項） 9月上旬から配布予定 有料

請求先＝金沢八景キャンパス入試課 ZD係

JOURNAL
of
Leisure and Recreation Studies
No. 34
Papers of the 26th National Congress

Special Issue :

Papers Presented at the 26th Japan Society of Leisure
and Recreation Studies National Congress

(Nov. 23 and 24, 1996)

(Nara Women's University :

Nara Pref., Japan)

Japan Society of Leisure and Recreation Studies (JSLRS)

Nov. 1996